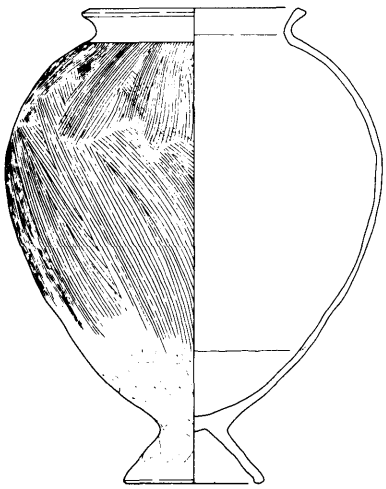
三重県埋蔵文化財調査報告108-1

東浦遺跡・椋本南方遺跡ほか



１９９３・３

三重県埋蔵文化財センター

序

埋蔵文化財は、それぞれの地域の、そして我が国の歴史を明らかにする上での重要な歴史史料です。また同時に、後世に残さなければならない、私たち共通の大切な文化遺産でもあるのです。

従って、可能な限り現状で保存してゆくことを大原則としておりますが、私たちの社会生活を向上させるための各種の公共事業もまた重要であることは言うまでもありません。

そこで、どうしても現状保存の困難な部分については、発掘調査を実施し、記録保存を図ってきているところであります。

ここに紹介致します５件の発掘調査結果も、このような状況で止むなく実施されたものです。この成果が、より多くの方面で活用されることを切望するものであります。

なお文末ながら、協議から発掘調査にかけて多大のご理解とご協力をいただいた県農林水産部・各関係事務所及び各土地改良区をはじめ、発掘調査にご助力をいただいた地元の方々に心より感謝致します。

平成５年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　久　保　富　子

例　　言

1．本書は平成４年度農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査結果の内、中勢管内（大里地区・芸濃北部地区）の東浦遺跡・小谷Ｃ遺跡・古里遺跡・多為遺跡・椋本南方遺跡を、第１分冊としてまとめたものである。

2．調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会の、他を県農林水産部の負担による。

3．調査体制は下記によった。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

4．調査にあたっては、三重県農林水産部農村整備課、同部耕地課、各農林事務所、各土地改良区及び地元の方々、各市町村教育委員会にご協力をいただいた。

5．文献史料の収集にあたっては、東京大学史料編纂所のご協力をいただいた。

6．各遺跡の整理・報告書作成は調査第１課の各担当者があたり、管理指導課がこれを補佐した。また文末には報告文章の執筆者名を記し、文責を明記した。

7．本書で用いた遺構表示略記号は下記の通りである。また、挿図の方位は全て国土座標第Ⅵ系を基準とした。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＫ：土坑　　ＳＥ：井戸　　Ｐ：柱穴・小穴

ＳＨ：竪穴住居　　ＳＸ：墓　　ＳＤ：溝　　ＳＺ：その他

8．本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

9．管理指導課の以下の者が、当報告書作成作業を補佐した。

足立純子　石橋秀美　岩崎道代　植村裕美　柿原清子　北山美奈子
倉田由起子　小林佳代子　須賀幸枝　杉原泰子　瀧川ひとみ　武村千春
豊田幸子　中村美智代　中山豊子　西村秋子　浜崎佳代　松井美幸
松月浩子　松本春美　森島公子　脇坂栄子

10. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　　言 …… 1
Ⅱ　津　　市東浦遺跡ほか …… 5
（東浦遺跡・小谷Ｃ遺跡・古里遺跡・多為遺跡）
Ⅲ　安芸郡芸濃町椋本椋本南方遺跡 …… 52

図　版　目　次

Ⅱ　東浦遺跡ほか
ＰＬ．１　東浦遺跡全景
ＰＬ．２　東浦遺跡　遺構　ＳＨ１
ＰＬ．３　東浦遺跡　遺構　ＳＨ40・ＳＨ６
ＰＬ．４　東浦遺跡　遺構　ＳＨ41・ＳＨ54
ＰＬ．５　東浦遺跡　遺構　掘立柱建物群
ＰＬ．６　東浦遺跡　遺物(1)　縄文土器など
ＰＬ．７　東浦遺跡　遺物(2)
ＰＬ．８　東浦遺跡　遺物(3)
ＰＬ．９　東浦遺跡　遺物(4)・遺跡遠景
ＰＬ．10　小谷Ｃ遺跡全景・遺構　ＳＨ１
ＰＬ．11　小谷Ｃ遺跡　遺物(1)　縄文土器
ＰＬ．12　小谷Ｃ遺跡　遺物(2)　土器・石器
ＰＬ．13　古里遺跡調査区全景
ＰＬ．14　多為遺跡　遺構・遺物
Ⅲ　椋本南方遺跡
ＰＬ．15　Ａ地区北側
ＰＬ．16　Ｅ地区全景・遺構　ＳＸ25
ＰＬ．17　遺構　ＳＥ30・ＳＤ37
ＰＬ．18　出土遺物(1)
ＰＬ．19　出土遺物(2)
ＰＬ．20　出土遺物(3)

挿　図　目　次

Ⅰ　前　言
第１図　平成４年度調査遺跡位置図
Ⅱ　東浦遺跡ほか
第２図　遺跡位置図
第３図　遺跡地形図
第４図　東浦遺跡調査区周辺地形図
第５図　東浦遺跡遺構平面図
第６図　東浦遺跡調査区小地区割図
第７図　東浦遺跡ＳＨ１・４・６・40・65・67
平面図・断面図
第８図　東浦遺跡ＳＢ75～78平面図・断面図
第９図　東浦遺跡ＳＢ79～81平面図・断面図
第10図　東浦遺跡縄文土器・石器実測図
第11図　東浦遺跡出土遺物実測図(1)
第12図　東浦遺跡出土遺物実測図(2)
第13図　東浦遺跡出土遺物実測図(3)
第14図　大里地区地形概念図
第15図　東浦遺跡遺構変遷図
第16図　小谷Ｃ遺跡調査区周辺地形図
第17図　小谷Ｃ遺跡遺構平面図・土層断面図
第18図　小谷Ｃ遺跡ＳＨ１平面図・断面図
第19図　小谷Ｃ遺跡ＳＨ１土器出土状況図
第20図　小谷Ｃ遺跡出土器・石器実測図
第21図　小谷Ｃ遺跡出土遺物実測図
第22図　古里遺跡調査区周辺地形図
第23図　古里遺跡遺構平面図
第24図　多為遺跡遺構平面図
第25図　多為遺跡出土遺物実測図

Ⅲ　椋本南方遺跡
第26図　遺跡位置図
第27図　遺跡地形図
第28図　椋本南方遺跡調査区周辺地形図
第29図　椋本南方遺跡土層断面図
第30図　椋本南方遺跡遺構平面図
第31図　椋本南方遺跡ＳＸ25平面図・断面図
第32図　椋本南方遺跡ＳＸ　平面図・断面図
第33図　椋本南方遺跡ＳＥ30平面図・断面図
第34図　椋本南方遺跡出土遺物実測図(1)
第35図　椋本南方遺跡出土遺物実測図(2)
第36図　椋本南方遺跡出土遺物実測図(3)
第37図　椋本南方遺跡出土遺物実測図(4)

表　目　次

Ⅰ　前　言
第１表　平成４年度農業基盤整備事業地内
遺跡一覧(1)
第２表　平成４年度農業基盤整備事業地内
遺跡一覧(2)
Ⅱ　東浦遺跡ほか
第３表　東浦遺跡出土遺物観察表(1)
第４表　東浦遺跡出土遺物観察表(2)
第５表　東浦遺跡出土遺物観察表(3)
第６表　東浦遺跡出土遺物観察表(4)
第７表　小谷Ｃ遺跡出土遺物観察表(1)
第８表　小谷Ｃ遺跡出土遺物観察表(2)
第９表　椋本南方遺跡土坑一覧表
第10表　椋本南方遺跡溝一覧表
第11表　椋本南方遺跡出土遺物観察表(1)
第12表　椋本南方遺跡出土遺物観察表(2)
第13表　椋本南方遺跡出土遺物観察表(3)
第14表　椋本南方遺跡出土遺物観察表(4)
第15表　椋本南方遺跡出土遺物観察表(5)

Ⅰ　前　　言

1．調査に至る経緯

三重県内の農地は、現在73,300haあり、このうち、ほ場整備を必要とする面積は46,000haで、平成３年度末段階で32,700ha、率にして71％が完了している。当面残りの29％についても事業が実施されるのであろうが、一方では日米構造協議において日本の市場解放を強く求める動きや、ガット・ウルグアイラウンドで米の自由化問題が大きくクローズアップされているなど日本の農政全般にわたり、大きな転換期をむかえていると言ってよいであろう。

こうした中、平成４年度農業基盤整備事業について県教育委員会文化振興課から、平成３年８月８日付、教文第1410号で県農林水産部関係課宛に事業照会が行われ、同３年８月23日付、農備第827号で回答があった。

これを受けた県埋蔵文化財センターでは、平成３年12月から平成４年１月にかけて分布調査を実施した。その結果、昨年度からの送り分も合わせ、事業予定地内には1,048,000㎡の遺物散布地が含まれることが判明した。この結果はすぐに農村整備課ならびに各農林事務所に報告するとともに、試掘調査の日程等について調整を図った。

試掘調査は、遺物整理、報告書作成の合間をぬって平成４年１月中に実施した。その結果、遺構・遺物が確認され、明らかに遺跡と認知された範囲は、約239,000㎡に絞られた。この結果をもとに各農林事務所では、畦畔を変える、掘削深度を浅くする、盛土を行うなど、極力遺跡を保護するための設計変更を検討することになった。

遺跡保存をめぐる詰めの協議は、２月24日、農村整備課、耕地課、各農林事務所、文化振興課、埋蔵文化センターの五者で行い、最終的に県ぽ関係では11遺跡、20,180㎡（年度途中の協議でさらに4,350㎡を追加し、24,530㎡となる）の本調査と、６遺跡、1,670㎡の立会調査を実施することになった。一方、農免農道や広域農道関係では、平成４年度中に試掘調査を実施し、その結果をもとに再度、遺跡の取り扱いを協議することになった。

2．本年度調査の経過と概要

調査は、所定の事務手続き、調査準備等を経て、例年通り５月の連休明けから、津管内の東浦遺跡、松阪管内の北野遺跡、上野管内の北城遺跡、向出Ａ遺跡の計４ケ所で開始した。なお、東浦遺跡は当初2,750㎡の調査を予定していたが、現地協議の結果、750㎡については事業地外となったため、すぐ近くで昨年度より事業が見送られていた小谷Ｃ遺跡の調査も合わせて実施することとなった。

このうち作業員の確保に苦労した北城遺跡の調査では、通称箕升氏館址と呼ばれていた中世城館をほぼ全掘することができ、伊賀地方の城館史研究にとって貴重な調査例となった。また城館廃絶後も江戸時代の一時期に周囲の土塁を壊して整地がなされ、屋敷地となっていた可能性もあり、城館の二次利用という面で興味深い成果が得られた。

７月からは、既に調査が終了した向出Ａ遺跡を除く上記の三遺跡に加え、新たに松阪管内で池ノ上遺跡、上野管内で川南遺跡の調査も開始された。

特に松阪市西黒部町所在の池ノ上遺跡では、整然と配置された鹹水槽、工房跡などの製塩遺構が検出され、これまで古文書からしか知られていなかった西黒部の製塩業の実態が、実際に遺構で証明できたことは特筆すべきである。当遺跡の北方370mに位置する小狐遺跡の調査でも多数の鹹水槽が検出され、当遺跡一帯が海浜地帯を利用した、中・近世の一大塩業地帯であったことが明らかとなった。なお、池ノ上遺跡に隣接する西山遺跡（旧名　西黒部遺跡）は、分布調査の際遺物がなく調査対象遺跡から外されていたが、「松阪市史」に掲載されていることが判明したため、急遽松阪農林事務所と協議をして、池ノ上遺跡の調査中に試掘をし、引き続き調査（1,500㎡）をすることになった。

こうした中、５月から開始していた北野遺跡の調査は順調に進み、弥生時代後期の竪穴住居のほか、飛鳥時代～奈良時代の土師器焼成坑が多数確認され、７月末段階で全体のほぼ３／４が終了していたが、当初試掘調査の結果から本調査の必要なしと判断し

管轄	事業名	地区	事業面積 ha	遺跡名	所在地	事業地区遺跡面積 m²	備考
桑名農政	県営ほ場整備	員弁	6	—	員弁郡楚原	—	
		十社北部	6	—	〃 北勢町田辺	—	
		藤原中部	20	—	〃 藤原町本郷ほか	—	
		梅戸井	26	—	〃 大安町南金井	—	
	公害防除	西員弁	35	—	〃 藤原町坂本ほか	—	
四日市農林	県営ほ場整備	四日市南部	4.2	—	四日市市山田町	—	
		芥川沿岸	20	—	鈴鹿市西富田町	—	
		井田川	16	—	〃 小田町ほか	—	
		道伯・住吉	6	—	〃 住吉町	—	
	広域農道	北勢南部	L=150m	青館跡	亀山市川崎町青	4,300	試掘(75m²)、遺構・遺物無
		〃	L=200m	西尾A遺跡	〃 辺法寺町西尾	1,500	未試掘
津農林水産	県営ほ場整備	河芸北部	20	—	安芸郡河芸町三行	—	
		芸濃北部	38	横山遺跡	〃 芸濃町椋本	1,750	立会調査195m²
				目細遺跡	〃 〃 〃	1,800	盛土対応
				金谷遺跡	〃 〃 〃	4,000	立会調査480m² 次年度送り
				椋本南方遺跡	〃 〃 〃	49,000	本調査730m²
		大里	40	大里西沖遺跡	津市大里野田町	10,500	本調査2,750m² 次年度送り
				南所遺跡	〃 〃 〃	390	工事対応
				多為遺跡	〃 〃 小野田町	550	立会調査50m²
				前田遺跡	〃 〃 野田町	3,500	事業次年度送り
				東浦遺跡	〃 〃 小野田町	2,900	本調査2,000m²
				小谷C遺跡	〃 〃 山室町	750	本調査750m²
				古里遺跡	〃 〃 小野田町	10,100	立会調査830m²
		榊原	12	五間田遺跡	久居市榊原町下村	7,700	久居市教委試掘、事業次年度送り
				(向ヶ平遺跡)	〃 〃	—	久居市教委試掘、遺構・遺物無
		中郷	5	天白遺跡	一志郡嬉野町釜生田	32,700	本調査4,930m²、保存協議中
	畜環整備	一志	12	—	〃 美杉村	—	
	農免農道	津北部二期	L=1,000m	豊野遺跡	津市一身田豊野	300	未試掘
				豊野古墳	〃 〃 〃	100	未試掘
	一般農道	久居東部	L=1,700m	赤坂遺跡	久居市木造町	5,100	本調査1,800m²(久居市教委)
	かん排	窪田	L= 300m	—	津市大里窪田町	—	
松阪農林	県営ほ場整備	阪内川左岸	20	阿形遺跡	松阪市阿形町ほか	13,000	工事対応
		西黒部	30	下メ遺跡	〃 西黒部町	—	遺構無、遺物希薄、工事可
				小狐遺跡	〃 〃	1,600	本調査1,100m²
				池ノ上遺跡	〃 〃	2,000	本調査1,700m²
				(寺浦遺跡)	〃 〃	—	遺構・遺物無
				西山遺跡 (旧西黒部遺跡)	〃 〃	2,900	本調査1,500m²
		機殿		(渕ノ上遺跡)	〃 腹太町	—	遺構・遺物無、工事可
				(道買遺跡)	〃 〃	—	〃 〃
				(安田遺跡)	〃 六根町	—	松阪市教委試掘 遺構・遺物無、事業次年度送り
				大久保遺跡	〃 〃	10,000	未試掘、事業次年度送り
		明星	5	北野遺跡	多気郡明和町蓑村	7,500	本調査7,500m²
				鳥墓神社西遺跡	〃 〃	2,000	事業次年度送り
		八幡沖	12.7	—	松阪市笹川町	—	
	農免農道	天啓		(古墳3基)	多気郡多気町相可	—	自然地形と判明
伊勢農林	県営ほ場	一之瀬	40	城ノ前遺跡	度会郡度会町和井野	90	要立会調査、事業次年度送り
		中川	25	(田間遺跡)	〃 〃 立花	—	遺構・遺物無、事業次年度送り

第1表 平成4年度 農業整備事業地内遺跡一覧(1)

( )は、試掘の結果、遺跡を確認できなかったもの

管轄	事業名	地区	事業面積 ha	遺跡名	所在地	事業地区遺跡面積 m²	備考
伊勢農林	県営ほ場	中川	25	向村遺跡	度会郡度回町立花	6,500	事業次年度送り
				前山遺跡	〃 〃 田間	6,100	大半工事対応、立会調査75m²
				(小広木遺跡)	〃 〃 〃	—	遺構・遺物無、工事可
		伊勢北部	10	植山遺跡	伊勢市植山町	—	遺構・遺物希薄、事業次年度送り
		磯部西部		(栗木広遺跡)	志摩郡磯部町栗木広	—	遺構・遺物無、工事可
		南張		—	〃 浜島町南張	—	
	畜環整備	鳥羽		—	鳥羽市大鴻ほか	—	
上野農林	県営ほ場	上野北部	41	一丁田遺跡	上野市服部、羽根	7,800	工事対応による保存
				北城遺跡	〃 〃 〃	11,000	本調査2,500m²
				伊賀国府推定地	〃 坂之下、外山		本調査500m²、立会調査460m²
		上津	16	川南遺跡	名賀郡青山町勝地	9,400	本調査960m²、立会調査60m²
				滝遺跡	〃 〃 滝	—	遺構・遺物希薄、工事可
		滝之原	14.5	向出A遺跡	名張市滝之原	1,000	本調査450m²
		柘植川沿岸	13	—	伊賀町御代		事業次年度送り
尾鷲農林	県営ほ場	紀伊長島	7.3	茂原遺跡	北牟婁郡紀伊長島町	21,000	地区除外
	農免農道	赤羽		—	北牟婁郡紀伊長島町	—	
		赤羽2期		—	〃 〃	—	
	海岸環境	比幾		—	〃 〃	—	
	一般農道	古里二期		—	〃 〃	—	
	湛水防除	上里		—	〃 海山町	—	
	農地保全	天満		—	尾鷲市南浦	—	
熊野農林	ほ場整備	市木	16	—	南牟婁郡御浜町	—	
	かん排	下市木	L=215m	—	〃 〃	—	
	一般農道	志原	L=200m	—	〃 〃	—	
	畜環整備	紀南	10	—	熊野市飛鳥町	—	
	農免農道	西山二期	L=1,600m	(西山古墳)	南牟婁郡紀和町	—	試掘の結果、自然地形と判明

第2表　平成4年度　農業整備事業地内遺跡一覧（2）　　（ ）は、試掘の結果、遺跡を確認できなかったもの

ていた場所にも確実に遺構の及ぶことが明確になったため、調整協議をもち、調査経費の範囲内でさらに2,600m²の追加調査を実施することになった。

7月末から開始した嬉野町天白遺跡（A区）では調査が進展するにつれ、縄文時代後期後半の時期を中心とする良好な遺物包含層や県下で初めての配石遺構が次々と確認され、俄に遺跡の重要性が増してきた。そのため三重大学人文学部八賀晋教授、奈良大学文学部水野正好教授、泉拓良助教授による現地指導を受け、調査に万全を期すとともに、調査期間、調査経費、今後の遺跡の取り扱い等の問題で協議をもつ必要性が生じた。協議は平成4年10月14日、農村整備課、津農林水産事務所、文化振興課、埋蔵文化センターの四者でもち、①調査期間を半月程延長する。②配石の範囲を確認するためのトレンチ調査を行う。③仮に事業を実施しても遺構は完全に保存する。等の合意を得、範囲確認調査の結果次第では史跡指定もあり得る旨、示唆した。

一方、県営ほ場整備事業に先立ち昭和63年度から継続して実施してきた伊賀国府推定地の範囲確認調査は、昨年度国町地区で政庁と考えられる一部が確認されるに至り、前面盛土工法による保存が図られることとなっている。なお事業実施は次年度以降のため、本年度は範囲確認調査は見送り、外山からの追越地区にかけての幹線排水部分の調査に留めた。

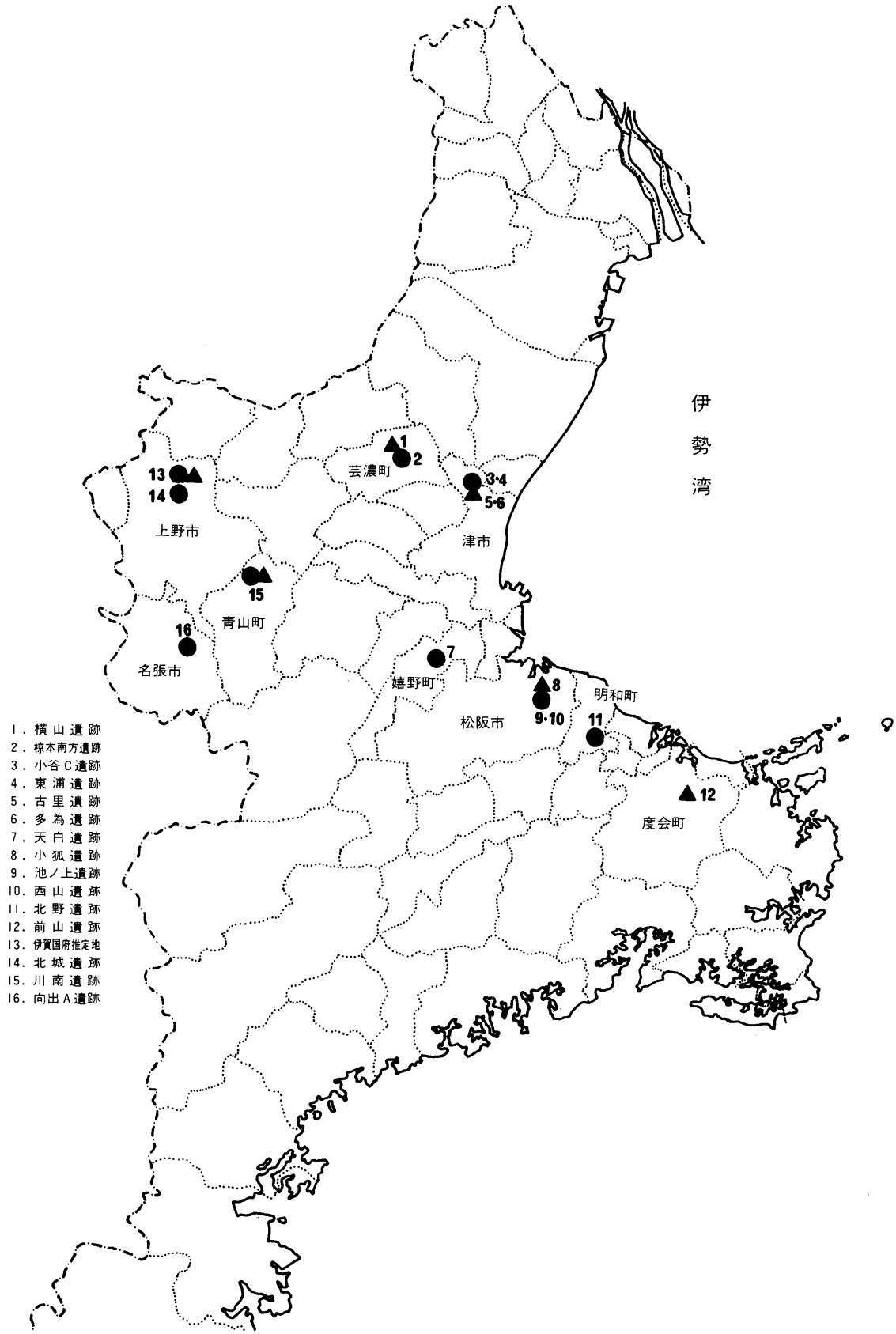
12月に入り、本年度最後の椋本南方遺跡の調査が始まった。遺跡面積は49,000m²にも及んだが、設計変更等で保存が図られたため、調査は排水路部分のトレンチ調査が中心となった。

なお事業発注後に実施する立会調査は、9月から11月にかけて随時行った。

以上のように本年度も幾多の調査成果を上げながらもやむをえず記録保存となった遺跡は数多くあったが、こうした中、昨年度の上野市城之越遺跡の保

存に継ぎ、天白遺跡の保存が、地元をはじめ、県、市の関係諸機関の理解と協力のもと、史跡指定の方向で動き出したことは喜ばしいことである。

（倉田直純）



第１図　平成４年度調査遺跡位置図（●＝本調査、▲＝立会調査）

II 津市 東浦遺跡 ほか

1．位置と歴史的環境

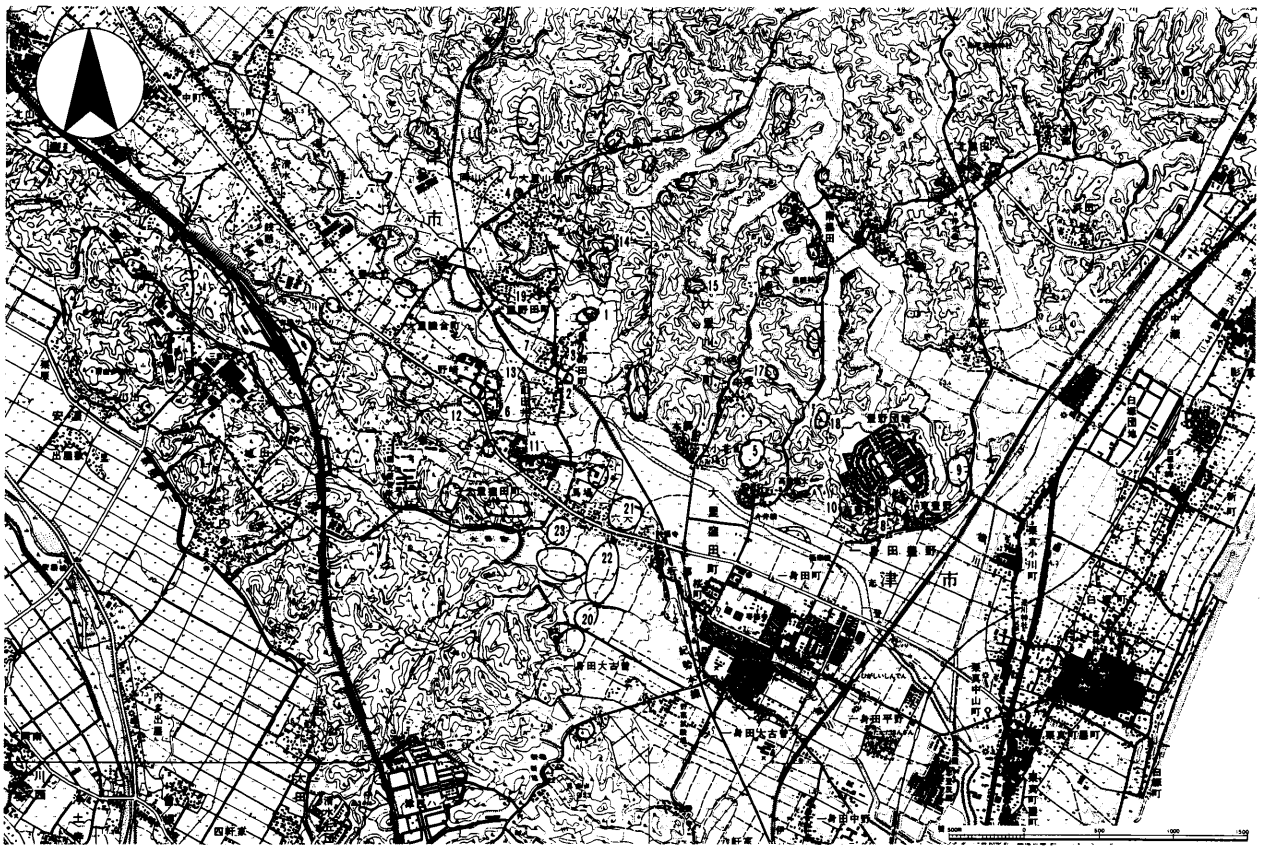
東浦遺跡(1)は、行政上は津市大里野田町字東浦に所在している。地形的には北から南に伸びる低丘陵の東端に位置し、南側の田面との比高差は5m程もある。また、この低地を挟んだ丘陵には、大里小野田町の集落が広がっている。そしてこの丘陵上の端部に、多為遺跡(2)や古里遺跡(3)も位置している。

次に小谷遺跡(4)は津市大里山室町に所在し、やはり東西に伸びる丘陵の縁辺部に位置している。調査区の南側は既にほ場整備事業の工事が進められており、現況で10m程の崖となっている。その下を志登茂川の支流の前田川が流れている。

さて旧大里村に当たる津市北西部周辺では、縄文時代に属するものとしては川北遺跡(5)・睦合遺跡(6)などが挙げられるが、後期の土器片が少量出土しているのみで、従来あまり顕著ではなかった。しかし東浦遺跡の西側に近接する大里西沖遺跡(7)では、平成3年度の調査において中期末葉の竪穴住居跡を確認したのをはじめ、小谷遺跡でも同年度にトレンチ調査を行い、やはり中期頃の土器片が出土している。[1]

弥生時代では、特に後期のものが目を引く。例えば豊野団地周辺には東豊野遺跡(8)や山脇遺跡(9)・岡遺跡(10)が、大里窪田町には山田井遺跡(11)・南浦遺跡(12)・向沖遺跡(13)が集中しているなど、納所遺跡の存在も含めて、この地域に弥生時代より広く人々の生活が営まれていたことを示している。

次に古墳時代になると、70棟以上もの前期の竪穴住居が検出された川北遺跡が注目される。また志登茂川流域の丘陵部には数多くの古墳が存在するとさ



第2図　遺跡位置図（1：50,000）（国土地理院『津西部』『津東部』『椋本』『白古』から）

第3図　遺跡地形図（1：5,000）

れており、これらと集落を形成した集団との関連が考えられる。ただ、大里山室町から小野田町の北に広がる丘陵部では農道設置に伴う試掘調査が平成3年度に実施され、石田3号墳(14)や小野田古墳群(15)及び睦合A古墳(16)・睦合B古墳(17)・すの坪古墳(18)は自然地形であることが確認されている。[2]

さて平安時代になると、遺跡の分布状況が端的に示している様に、志登茂川の形成した段丘上の旧大里村周辺は、俄然活気を帯びてくる。まず東浦遺跡の周辺から概観してみよう。

東浦遺跡の西側には、近接して南所遺跡(19)や前述した大里西沖遺跡が所在している。いずれも平成3年度に相次いで部分的に調査されており、平安時代から室町時代にかけての住居跡を確認している。[3]中でも南所遺跡では、奈良時代の中頃と考えられる瓦片も、若干ではあるが出土している。このことは寺院の存在を想起させ、当時よりこの周辺もかなり開けていたことを如実に示している。

次に旧大里村域内で注目されるのは、現在の大里窪田町の周辺である。ここには橋垣内遺跡(20)をはじめ、六大A遺跡(21)・六大B遺跡(22)や安養院跡(23)などが集中的に所在している。そしてこれらの遺跡は既に調査も行われており、この地域の歴史的背景を知る上で貴重な手掛かりを提供している。特に六大B遺跡の調査結果は重要な意味を持っている。この遺跡からは、ほぼ平安時代全般にわたっての、多くの掘立柱建物が比較的規則性を持って建ち並んでいたのをはじめ、300点を越える緑釉陶器片も出土している。[4]

ところでこの窪田町の周辺は、「窪田荘」の比定地となっている。この荘園の成立時期については良くわからないが、鎌倉時代以降には確実に存在し、いわゆる摂関家渡領であったことが確認されている。[5]その後鎌倉時代末には窪田荘210余町が北条相模守熙時の所領となり、[6]中世後期には足利尊氏により熊野若王子神社に寄進されている。[7]

窪田荘の範囲は未だ明らかにされていないが、六大B遺跡の調査結果から推して、現在の窪田町の辺りがその中心であったことは間違いなかろう。また平城宮出土の木簡にも「久菩多里」と見えており、既に奈良時代よりその地名が成立していたことも、間接的ながらその傍証となる。

中世末から近世初頭に入ると、「窪田郷」という地名が史料上に散見されるようになる。この郷域はかなり広大なものであったようで、東浦遺跡の所在する野田も窪田郷内であった。この窪田郷と窪田荘との関連については不明ながら、同荘が210町以上もの大きな荘園であったこと、東には栗真荘があり、窪田荘域が西方に広がっていたと考えざるを得ないこと、また窪田に隣接する一身田は窪田荘には含まれていないことが確認されることから、窪田郷域と窪田荘域とはほぼ重なっていたと考えることができる。

因みに、戦国時代には中勢に威を張っていた長野工藤氏の領域内に入り、若王子神社領窪田荘もやがて押領されて行ったものと思われる。

（小林　秀）

〔註〕

① 伊藤裕偉「大里西沖遺跡」『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第1分冊－』三重県埋蔵文化財センター　1992年

② 前掲註①

③ 前掲註①

④ 『一般国道23号線　中勢道路　埋蔵文化財調査概要Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター　1992年

⑤ 稲本紀昭「伊勢国における北条氏一門領」（『ふびと』38号　1981年）

⑥ 「御鎮座伝記紙背文書」建武2年（1335）9月2日付け太政官符（前掲註⑤所収）

⑦ 「熊野若王子神社文書」文安3年（1446）4月13日付け伊勢国窪田庄支證目録（東京大学史料編纂所所蔵影写本）

2．津市大里野田町　東　浦　遺　跡

(1) 遺　　構

遺構検出面は、9ラインより西は耕土下20～30cmと浅かったが、9ラインの東は急激に落ち込み、M・N－12～14には比較的厚く暗褐色の包含層が堆積していた。遺構検出面の土質は、西側の高い部分では粘土質の赤褐色土と比較的安定していたのに対し、東側の低い部分では白灰色粘土と黒色土が錯綜する複雑なものであった。特にO－10～14では、検出面に人頭大の礫が多く露頭していた。

調査の結果、竪穴住居を15棟、掘立柱建物7棟等を検出した。ただ縄文土器は出土したものの、遺構としては顕著なものはなかった。以下、その主なものについて述べてみたい。

〔縄文時代〕

A．竪穴住居

SH45　直径4mの、円形のプランを持つ。部分的に後世の撹乱を受けているが、ややまとまって縄文時代中期末の深鉢片が出土しており、この時期の住居跡であると考えられる。深さは、最深部で30cmの船底状をしている。ただ残りは悪く、主柱穴などは検出できなかったなど、確定的ではない。

B．土坑

SK24・36　いずれからも中期末の土器片が出土

第4図　調査区周辺地形図（1：2,000）

第５図　遺構平面図（１：250）

第６図　調査区小地区割図（１：1,000）

している。ＳＫ36は、長径175cm、短径100cmの不定形の土坑で、後世の耕作溝によって撹乱を受けているが遺構検出面より37cmと深く、遺物も比較的まとまって出土した。遺構の性格については不明である。

ＳＫ24は、長径185cm、短径75cm、深さ20cm程の不定形の土坑である。

〔古墳時代〕

Ａ．竪穴住居

ＳＨ１　一辺約３ｍの方形を呈す。北側は平安時代の土坑によって撹乱を受けているが残存状況は良好で、深さは床面で検出面から35cmあった。幅20cmの周溝を伴い、北東隅には直径45cm、深さ30cmの貯蔵穴を持っていた。中から完形の土師器高杯が２個体出土している。この貯蔵穴には他に遺物はなく、また出土状況から故意の埋設と見てよい。床面中央部のやや南寄りに焼土があり、炉の跡と考えられる。

出土遺物は、土師器高杯・小型丸底壷・二重口縁壷などが主で、須恵器を全く伴っていなかった。よって時期的には５世紀初頭頃と判断されるが、この時期の竪穴住居としては相対的に小規模であると言える。また残存は良好であったにもかかわらず、主柱穴は検出されなかった。

ＳＨ４　一辺約3.5ｍの方形である。深さは現況で15cmと浅く、周溝も検出できないなど、残りは悪かった。主柱穴は若干壁寄りで検出されたが、非常に浅かった。

出土遺物量は少なかったが、５世紀初頭頃と考えられる。また砥石や、鎌と思われる鉄片も出土している。

ＳＨ６　一辺約３ｍの方形である。ＳＨ４と同様残りは悪く、深さは現況で20cmであった。主柱穴が四隅に極端に寄っているのが特徴である。

出土遺物はごく少量であり、かつ細片のため確定的なことは言えないが、中に須恵器片が含まれており、ＳＨ１・４よりは年代的に下るものと判断される。

ＳＨ40　一辺約5.5ｍの方形で、本遺跡検出の竪穴住居の中で最大規模であった。南西隅に直径２ｍの奈良時代頃の円形土坑が切り込んでいたが、住居跡自体の残りは非常に良好で、北側で遺構検出面より約53cm、南側でも25cm残っていた。幅約30cmの周溝を伴い、主柱穴も床面から40cmと深かった。出土遺物は、土師器高杯・小型丸底壷・二重口縁壷などが完形品を含めて多数出土しており、年代的には５世紀初頭に比定できる。

ただ埋土は３層に分かれ、遺物も上層に集中し、完形品はいずれも床面からかなり浮いた状態で出土している。以上のことから、住居が廃絶してある程度埋没した後、その窪みが祭祀などに二次的に利用されたた可能性が高い。

焼土は中央やや北よりに認められ、この部分に炉があったものと推定される。

ＳＨ41　一辺約４ｍの方形の規模を持つ。深さは北東辺では約30cmあったが残りは非常に悪く、検出面が南東に低く傾斜しているため、この方向で特に残りが悪かった。床面は礫層に達しており、周溝や主柱穴も検出できなかった。

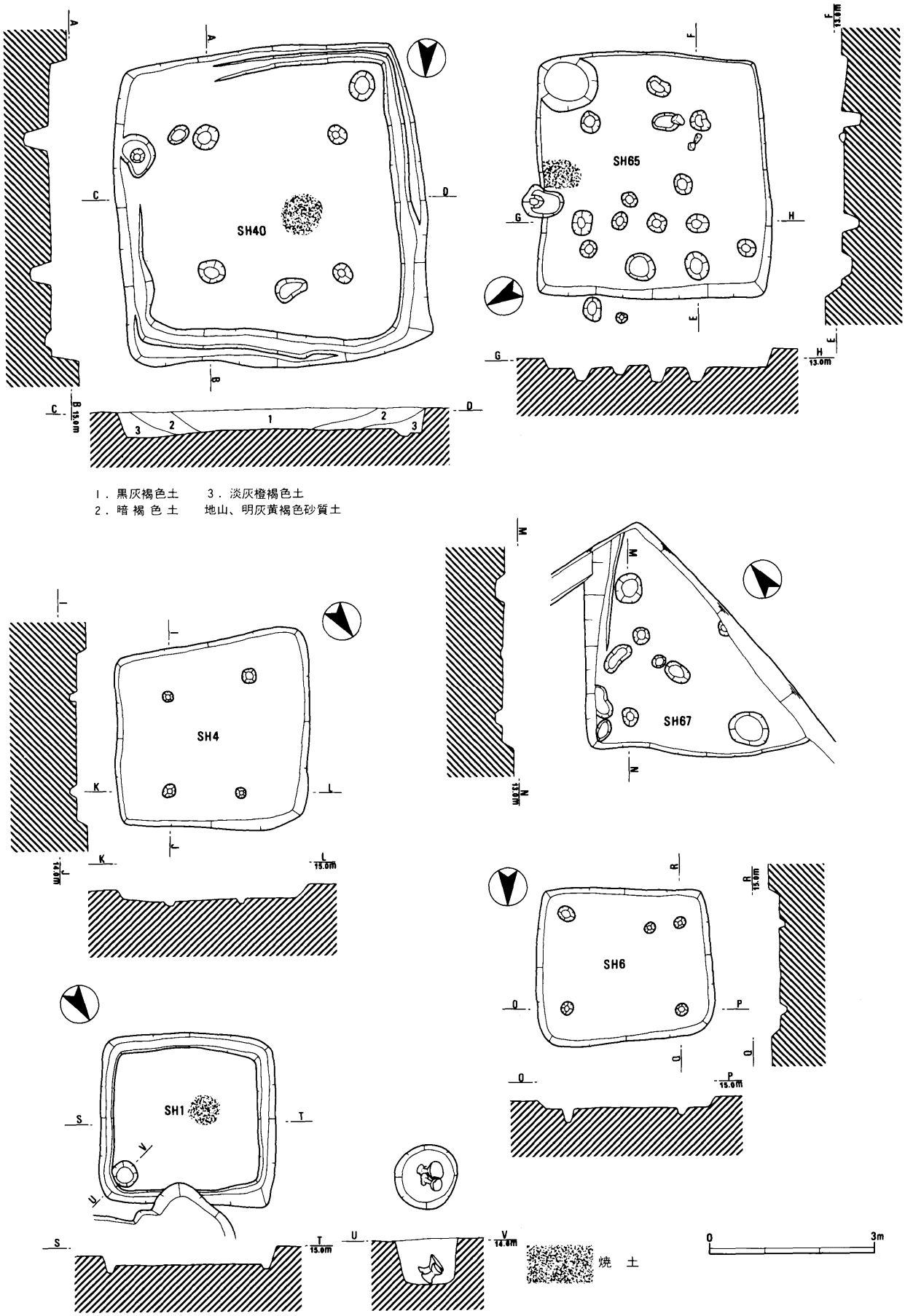
出土遺物は少量ながらも須恵器片を含んでおり、７世紀頃に比定できる。

ＳＨ54　一辺４ｍ程の方形の竪穴住居が２棟、若干東西にずれてほぼ重なるように切り合っていた。最深部で遺構検出面から20cmと残りは決して良好とは言えないが、遺物は土師器高杯や台付甕を中心に比較的まとまって出土している。それらの遺物に年代的差異が認められないこと、また２棟がほぼ重なっていることから、比較的短期間に建て替えられたと推定される。

ＳＨ63　検出面が南に向かって急激に低く傾斜しているためその規模については必ずしも確定できないが、東西辺は約４ｍあった。南側を後世の土坑によって撹乱を受けている上、深さも20cmと浅く、主柱穴も明瞭でないなど、残りは非常に悪い。出土遺物も殆どなく年代は不確定だが、形態などから古墳時代と判断した。

ＳＨ65　東西辺4.5ｍ、南北辺４ｍの方形で、深さは現況で約30cmであった。北辺のほぼ中央に焼土があり、竈の跡と考えられる。周溝はなく、北東隅には貯蔵穴と考えられる土坑を伴っていた。出土遺物量は決して多くはないが、須恵器杯身の形態から６世紀頃の住居であると考えられる。

ＳＨ67　大部分が調査区外にあるため、全体的な規模はわからない。検出面が南に傾斜しているのでその部分では15cmと浅いが、北側では40cm程残って



第７図　竪穴住居平面図・断面図（１：100）

いた。主柱穴も部分的に検出できた。また西壁に沿って幅20cmの浅い溝があり、周溝を伴っていたと考えられる。

出土遺物は土師器高杯や二重口縁壺などで、須恵器は含まれていなかった。埋土には炭化物が全体的に多く、中には建築部材と思われる木炭も出土している。よってこの住居が焼失して廃絶した可能性がある。

ＳＨ68・69　両住居跡とも残りは悪く、特に西側は樹木の根によって大きく撹乱されていた。このためＳＨ68の南北辺が約4.3mであることがわかる以外は、両棟ともその規模は不明である。

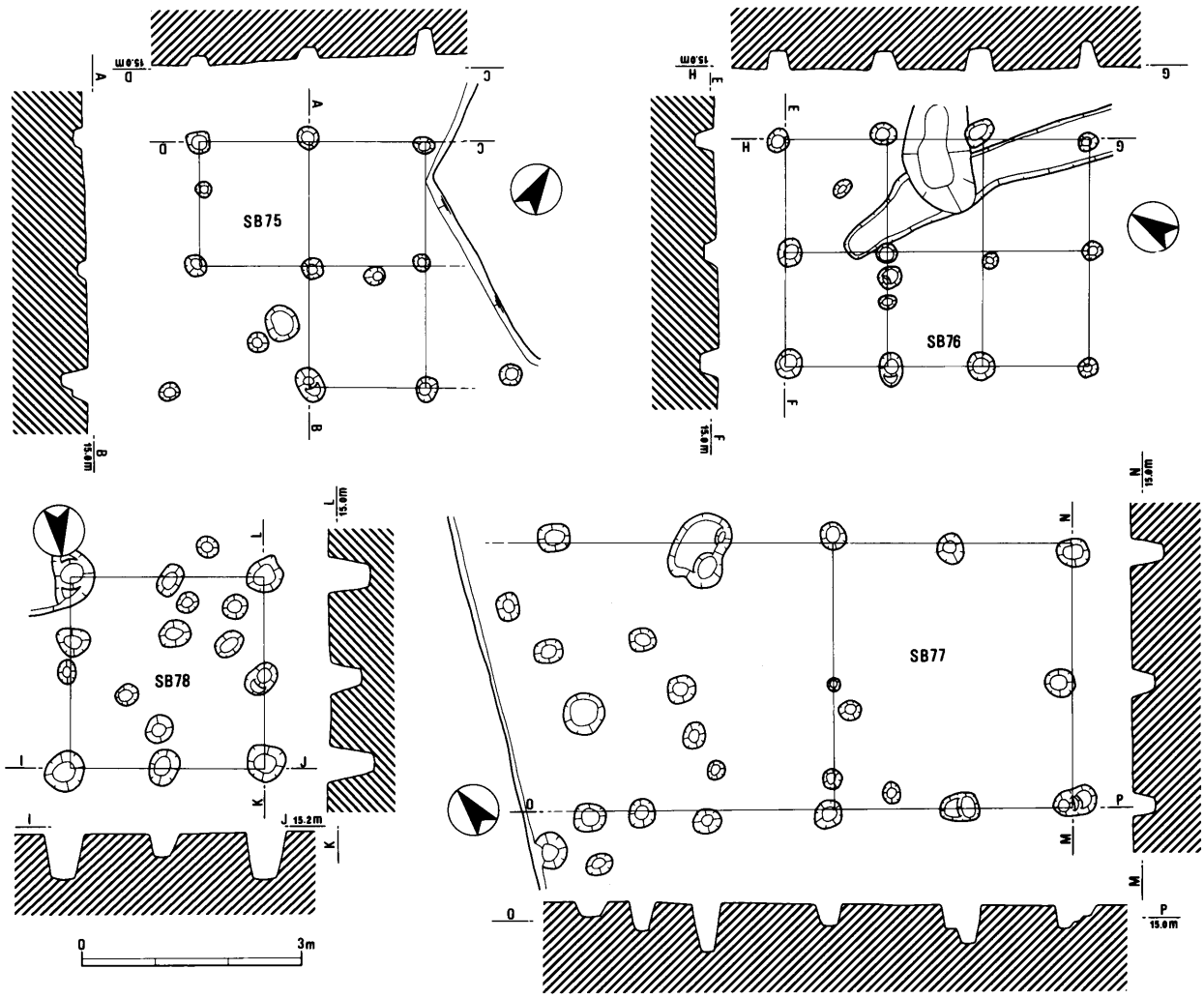
ＳＨ68の北辺に焼土があり、竈跡と考えられる。またＳＨ69では南東隅に焼土が認められた。その西側の土坑からは５世紀末から６世紀初頭頃の台付甕がほぼ完形で出土しているが、この土坑がＳＨ69に伴うものかは断定できない。切り合い関係から、ＳＨ68のほうが年代的に若干下るものと判断される。

ＳＨ73　一辺約2.7mの方形である。幅20cm程の周溝を伴い、北辺のやや東寄りに竈を持つ。遺物は甑の破片などが竈の周囲で出土しているが、量は全体的に少なかった。また深さも遺構検出面から約10cmと浅かった。中央部の土坑は後世の撹乱である。

Ｂ．土坑

ＳＫ３　長径3.3m、短径2.5mの楕円形を呈する。深さは遺構検出面から約30cmで、底は比較的平坦である。遺物も土師器高杯や甕などが比較的まとまって出土し、５世紀前半の遺構であるが、用途については不明である。

ＳＫ22　直径約２mのほぼ円形で、摺鉢状の掘形を持つ。中央部は更に掘り窪められており、深さは最深部で検出面より44cmである。埋土は４層に分かれ、その状況から、下層の土坑が一度に埋まった後、徐々に全体が埋没していったと判断される。



第８図　掘立柱建物平面図・断面図（１；100）

遺物は、上３層から混入と考えられる土師器の細片が僅かに出土したのみであったが、最下層の淡褐色土から完形の小型丸底壷が１点出土した。よって時期的には５世紀初頭頃の遺構であることは確実だが、用途は不明である。

〔奈良～平安時代〕

この時代の遺構としては、竪穴住居１棟、掘立柱建物５棟と土坑３基を確認した。

Ａ．竪穴住居

ＳＨ10　長辺約５ｍ、短辺約３ｍの長方形を呈す。深さは現況で遺構検出面から約30cmあったが、周溝や主柱穴は明瞭には検出できなかった。ただ床面には部分的によく締まった小石まじりの黄褐色粘土が薄く認められ、貼り床がなされていたものと考えられる。また南東隅の埋土には炭化物が多く含まれており、竈跡ではないかとも考えられる。

出土遺物は少量ながらも須恵器片の占める割合が高く、年代的に奈良時代頃の住居であると思われる。

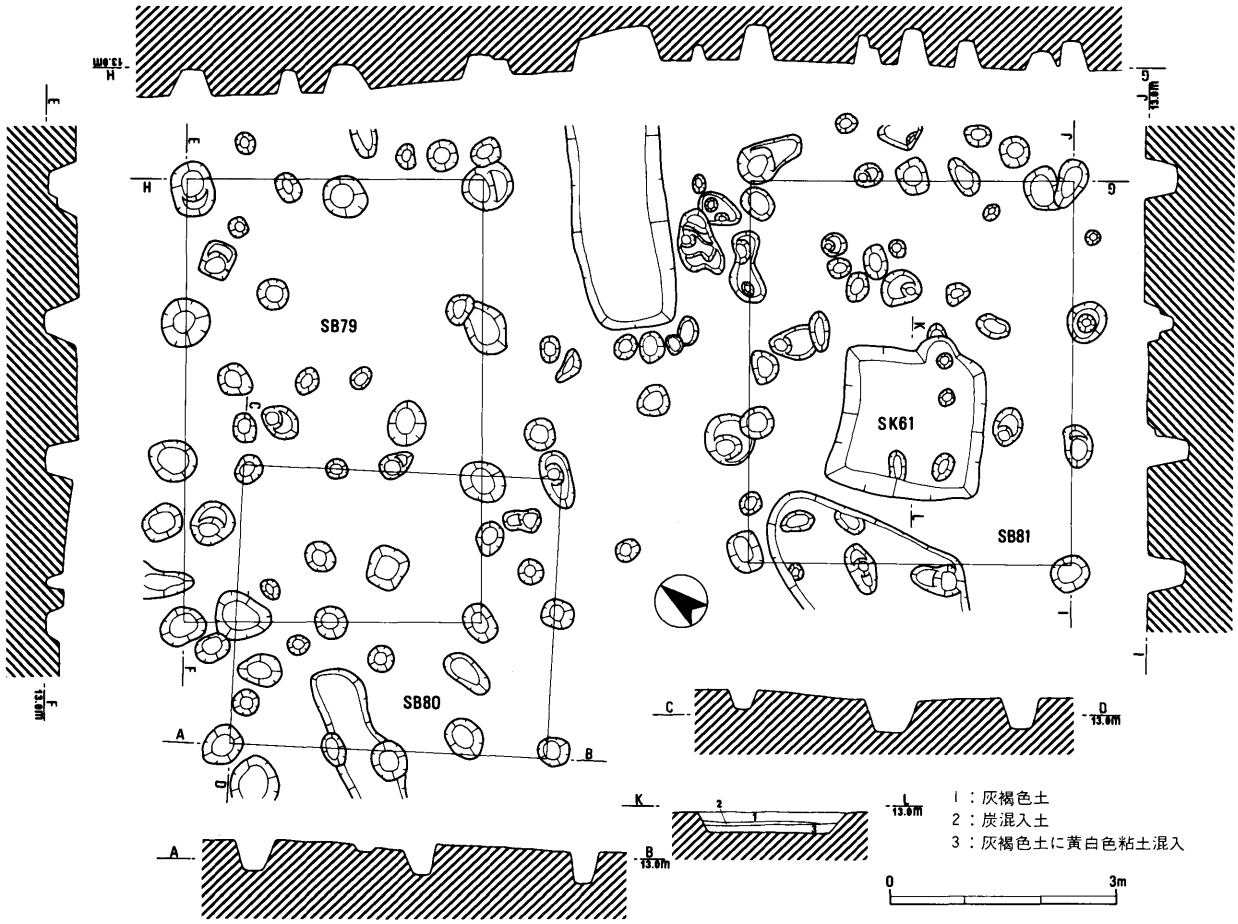
Ｂ．掘立柱建物

ＳＢ77　梁行２間、桁行５間以上の規模を持ち、本遺跡中最大の掘立柱建物である。柱間は梁行で約1.75m、桁行で約1.6mである。出土遺物が殆どなく、厳密な年代決定はできなかった。

ＳＢ78　柱間約1.4mの、２間四方の建物である。柱の掘形は四方の隅柱が比較的大きく、またいずれも１m近く掘り込まれているなど、堅固に作られていた印象がある。倉庫などの用途に使用された建物であると考えられる。ＳＢ77とは、棟方向が大きく異なっていることから、両者の関連性は薄いものと判断される。

ＳＢ80　２間四方の規模を持つ。柱間の長さに若干の差異があり、梁行で約1.85m、桁行で約２ｍであった。ＳＢ79と切り合っているが、両建物の新旧関係はわからない。

ＳＢ79・81　ＳＢ79は、梁行２間、桁行３間で、いずれも柱間は約1.9 ｍである。ＳＢ81は３間四方の規模で、柱間は梁行で約1.5m、桁行で約1.7mであった。この２棟は北東面で梁行を揃え、約3.5m



第９図　掘立柱建物平面図・断面図（１；100）

の間隔を置いて整然と建ち並んでいる。このことから同時併存の建物であり、一戸の屋敷地を形成していたと考えられるが、柵や井戸などの付随施設は検出されなかった。

この辺りの検出面は人頭大の石を多く含む礫層であり、かつ掘形も平均30cmと浅かったことから、当時の生活面はもっと高かったものと判断される。

C．土坑

ＳＫ２　直径２ｍの円形で摺鉢状に掘られ、深さは最深部で40cmであった。埋土は分層できず、一度に埋没した感がある。遺物は少量ながらも土師器皿が完形で２個体出土している。墓坑の可能性も考えられる。

ＳＫ39　直径約２ｍの掘形を持つほぼ円形の土坑である。奈良時代の遺構で、ＳＨ40の埋土を掘り込んでおり、完掘した後ＳＨ40の埋土掘削の段階で取り除いた。埋土は単層で、７世紀頃の須恵器の杯身や平瓶なども出土しているが、混入と考えられる。

ＳＫ61　径２ｍの方形の土坑で、底は平坦、深さは約30cmである。埋土には炭化物が多く含まれる層があり、北ほど厚い。その炭化物層からは、甕の破片や土師器の皿などが出土している。また炭化物層はほぼ全面に認められる。

このことから、この遺構は小型の竪穴住居などではなく、火に関係した何らかの施設であったことは疑いない。ただ壁には焼けた痕跡はなく、焼土も入っていない。ＳＫ61がＳＢ81と年代的に同一であるとは断定できないが、ＳＢ81に付随する施設の可能性は充分にあり、その場合囲炉裏などの暖房施設と考えることもできよう。

〔鎌倉時代以降〕

A．掘立柱建物

ＳＢ75　梁行は２間、桁行は調査区外にあるものの２間以上の総柱の建物である。柱間は、梁行1.6ｍ、桁行1.5ｍで東側に１間分の張り出しがある。

ＳＢ76　梁行２間、桁行３間の総柱の建物で、柱間は梁行で1.5ｍ、桁行で1.37ｍである。ＳＢ75と東側の柱通りを揃え、建物間隔は3.4ｍを隔てて整然と配置されている。よってこの２棟は同時期の、しかも関連した建物であると考えられる。

(2)　遺　　物

〔先土器時代末期～縄文時代の遺物〕

遺物には、土器と石器がある。土器は、遺構からややまとまって出土した。

A．縄文時代早期末の土器(4～10)

いずれも胎土に繊維を含み、条痕調整される。

ＳＨ40近くの包含層から出土した４は、口縁端部から約4.5cm下に、若干ではあるが屈曲をとどめている。口唇部に刻みが斜位に巡り、口縁部から体部にかけて爪形が波状に連続刺突される。

Ｍ―５包含層から出土した５～７は同一個体と思われ、爪形の刺突が施される。

Ｊ―６包含層から出土した９は、外面に爪形の刺突？が間隔を開けて施される。また10は、内外面に荒い条痕が残る。

B．縄文時代中期末の土器(11～29)

ＳＨ45から出土した11～16は、同一個体と思われる。11は、口縁部下の破片と思われる。外面に楕円状の刺突が施され、その下に２本の沈線が横位に施される。12～14は体部片で、垂下する隆帯を付け、矢羽根状の沈線が施される。15・16は底部近くと思われ、僅かに矢羽根状の沈線が窺える。

Ｉ―７包含層から出土した18は沈線が横位に施され、17は縄文が施される。

ＳＫ24から出土した19は、口縁部片である。２本の太い沈線が横位に施され、その下に弧状の沈線が施される。縄文は見られない。20～22は、同一個体と思われる。20は、棒状工具で刺突が深く施される。21は底部に近く、矢羽根状沈線の末端部が窺える。22は底部であるが、剥離が著しい。

ＳＫ36から出土した24～27は、同一個体と思われる。口縁部から隆帯がＴ字状に付けられ、隆帯上に縄文が施される。また、無文の体部に１本の縄文帯が垂下する。24は口縁部片で斜め外方に向かって面を持ち、口縁端部にＲＬの縄文が施される。25の隆帯の下位には、羽状の縄文が窺える。

ＳＨ41から出土した28は、羽状の沈線が施される。

Ｍ―６包含層から出土した29は沈線が横位に施され、その下に条線が施される。

C．石器(1～3)

Ⅰ―7包含層出土の凹基無茎式石鏃(2)はサヌカイト製で、長さ3.6cm、最大幅2.3cm、重量0.8gである。

ピット出土の小型定角式磨製石斧(3)は石英斑岩製で、長さ3.9cm、最大幅1.8cm、重量12gである。刃は両平刃である。縄文時代中期から後期のものであろう。

包含層出土の木葉形尖頭器(1)はチャート製で、長さ8.1cm、最大幅3.6cm、重量44gである。粗い調製ではあるが、形がよく整えられている。時期は形態的な特徴から、先土器時代末期から縄文時代草創期と考えられる。

〔古墳時代の遺物〕

ＳＨ１出土の遺物(30～39)

土師器小形壷(30・31)　30は、全体的な器形からいわゆる小型丸底壷の範疇に入るものと考えられるが、口縁部が極端に短く、かつほぼ垂直に立ち上がっているものである。焼成は非常に悪く、全体的に黒色であるため、調整方法は不明である。

31は、胴部がやや大振りの半球形を呈し、頸部の屈曲は弱い。口縁部内面のみ横方向に荒いハケメが見られる。

土師器二重口縁壷(32・33)　32は屈曲部が明瞭で、口縁は緩やかに外反している。33は32に較べやや小形で、屈曲部も不明瞭である。また口縁も短く、かつ外側に強く屈曲している。

土師器高杯(34・35)　いずれも完形で、東隅の小穴より、同一方向に横たわった状態で出土した。この穴は竪穴住居に伴う貯蔵穴と考えられるが、出土状況から単なる廃棄ではなく、何らかの目的をもって人為的に埋設されたものと考えられる。

34の杯口縁部は直線的に立ち上がり、やや深めであるのに対し、35の杯部は内側に弯曲し、小形で浅い。また35の焼成は悪く、大部分に黒斑がある。

土師器甕(36～38)　36は、口縁がやや開きぎみに直線的に立ち上がるものである。また端部は外側に小さく突出している。

37と38は、いわゆるＳ字状口縁台付甕である。37は口縁部の小片であり、横方向のハケメが施されているか否かは不明である。口縁外面には未だＳ字状屈曲の名残が認められるものの、内面は殆ど平坦となっている。

ミニチュア土師器(39)　壷形と考えられるミニチュア土器である。器壁が非常に薄く仕上がっている。

ＳＨ４出土の遺物(40・41)

細片が多く、図示できたのはこの２点のみであった。

土師器高杯(41)　口縁が大きく開いた浅い杯部を持ち、かなり大形のものである。屈曲部で粘土を接合しているが、稜線は明瞭でない。

土師器甕(40)　短い口縁が強く外反する。器壁は比較的肉厚で、粘土の積み上げ痕跡をよく残している。

ＳＨ40出土の遺物(42～63)

土師器小形壷(42～48)　ＳＨ40出土土器の器種構成の中では、小形壷の多さが目を引く。

43・44及び46は口縁部を欠いているが、概ね45ないしは47のような形態であると考えられる。ただ45と47は底部外面を丁寧にヘラケズリしているが、他のものにはそれは認められない。また43と46には、底部に若干の平坦面がある。いずれも小型丸底壷の範疇に入るものである。

42も小型丸底壷であるが、頸部のくびれが小さいところに異なった特徴を持っている。それに対し48は平底の小形短頸壷とも言うべき形態で、頸部で粘土を継ぎ、口縁はヨコナデせずに指で押さえたままである。胴部上段には荒くハケメが施されている。外面には煤が付着しており、何かの煮炊に用いられたものと考えられる。

土師器二重口縁壷(49・50)　ＳＨ40からは、この２個体が出土した。49は一端頸部まで成形した後、半乾燥の状態で口縁部を取りつけている。50は口縁内面上段に、櫛状工具による刺突がある。

土師器壷(51)　頸部を細くくびれさせ、短い口縁部が内弯気味に開くものである。

土師器甕(52～58)　52はＳＨ１出土の甕(7)と同形のものである。外面のハケメは２つの原体で施されている。

54の器壁は薄く仕上がっており、口縁端部にはヨコナデによる明瞭な面がある。胴部内面はケズリ状の板ナデで丁寧に整えられ、外面には煤が、内面に

は食物等の煮炊によると考えられる炭化物が付着している。

55は頸部を強く「く」の字形に屈曲させ、口縁端部は内外面への強いナデによって上方に鋭く突出させている。56から58はＳ字甕で、安達・木下編[1]年で言うところのⅢＢないしはⅣＡ類に相当するものと考えられる。

53は肉厚で短い口縁部が大きく開くもので、端部は単純に丸く収束している。胴部外面と頸部内面には荒いハケメ調整がなされている。

土師器高杯(59～62)　60の杯口縁部はやや外反気味に開き、脚裾は急激に開いている。この点61・62も大差はないが、61の場合、杯底部外面をヘラケズリして整え、屈曲部の稜線をより明瞭にしているところに、若干の相違点が認められる。また59と61は、脚柱部外面に板状工具による強い縦ナデが施され、不明瞭ではあるが、面が形成されている。

軽石(63)　表面には幾つかの面に使用痕跡が見られるが、具体的な使用方法は不明である。

ＳＨ67出土の遺物(64～69)

出土遺物量は多くはないが、二重口縁壷(64)や杯屈曲部で若干の突出の見られる土師器高杯(65)、Ｓ字甕(67)、土師器椀(68)などが挙げられる。66は壷で、強いヨコナデで二重口縁状に稜線があるが、64の様な典型的なものではない。また69の鉄製品は鎌であると考えられ、床面直上から出土している。

ＳＨ54出土の遺物(70～76)

Ｓ字甕の脚台部(74～76)や壷(72)、小型丸底壷(70・71)などが出土している。70は口径が胴部最大径より大きい形態のもので、底部外面はヘラケズリで調えられている。口縁部内面及び胴部外面には荒くハケメが施されている。73は布留型甕である。

ＳＫ３出土の遺物(77～79)

出土遺物量が少なく、図示できたものはこの３点であるが、土師器甕中心の出土であった。口縁端部が単純に丸く収束するもの(78・79)と、端部が外側に若干突出するもの(77)とがある。

ＳＫ22出土の遺物(80・81)

81は完形の小型丸底壷で、ＳＫ22の底から単独で出土した。口縁が直線的に開き、胴部の張りの大きな形態を呈する。磨耗が激しいため、調整の細部は不明である。

ＳＫ15出土の遺物(82)

土師器高杯である。杯底部には、脚柱と接合した際のナデの跡が明瞭に残っている。脚柱外面には工具によって若干の面が取られ、内面にはシボリ痕跡が残る。

ＳＫ29出土の遺物(83)

Ｓ字甕の脚台部分である。

ＳＨ69出土の遺物(84～86)

86は土師器台付甕で、Ｓ字甕の系統のものである。短いが大きく開いた口縁部には、既にＳ字甕特有の屈曲は失われ、上端部は強いナデによって明瞭な面を持つ。胴部外面には荒いハケメが施されている。台端部は若干内側に突出が見られるが、折り返しはない。安達・木下編年のⅤＡ類に相当するものであると考えられる。

土師器椀は２つのタイプが出土した。84は口縁部をやや外反させ、内面に強いナデを施したための明瞭な稜線を持つ。85は口縁が内弯して立ち上がるもので、端部に面を持つ。

ＳＨ68出土の遺物(87～93)

88～92の遺物はＭ－16地区の包含層の出土であるが、ＳＨ68の直上に位置していたので、併せて報告する。

土師器椀(92)及びＳ字甕(91)はＳＨ69出土のものとほぼ同一の特徴を持つものである。

土師器の壷としては88と89がある。88は強くくびれた頸部と球形の胴部を持つもので、口縁は比較的長く、やや外反気味に開いている。口縁部内面に強いヨコナデを施し、端部のみ若干内弯させている。

89は口縁部外面を強いヨコナデによって屈曲させ、一見二重口縁壷の様な形態を持つものである。胴部外面には縦方向に荒いハケメが施されている。

93は須恵器である。小片であるが、無蓋高杯の口縁部である。やや内弯して立ち上がり、端部は丸く収束する。外面には小さいが鋭い突帯があり、その下に細かい波状文を施す。以上の特徴より、田辺編年[2]ＴＫ208型式の時期に併行するものである。

ＳＨ70出土の遺物(94～97)

95～97はＮ－16の包含層からの出土であるが、直上であるため、同一と見做して一括して報告する。

94と95は土師器の椀で、ＳＨ69出土のものと際立った差異はない。ただＳＨ69出土のものに比べ、口縁端部上に内傾する明瞭な面を持つ。

96と97は須恵器の杯蓋である。97はＴＫ208型式併行、96はそれよりも若干下る時期と考えられる。

ＳＨ65出土の遺物(98・99)

出土遺物は少なく、図示できたのはこの２点で、いずれも須恵器である。

杯身(99)はその形態からＴＫ208型式に併行するものと考えられる。

98は甕の口縁部と考えられ、ロクロで成形されている。口縁端部は外に折り返されている。99と同時期であるかについては疑問であり、時期を特定するまでには至っていない。

その他の出土遺物(100～105)

100～102はＳＤ55からの出土である。遺物にはいくつかの時期のものが混在しており、杯部内面にミガキのある土師器高杯(100)は布留Ｉ式併行のものであるが、土師器甕(101)は飛鳥から奈良時代頃の特徴を持つものである。

103はＳＫ62からの出土である。須恵器の杯身で、ＴＫ208型式併行の時期に比定できる。

104と105は須恵器の甕ないしは壷の口縁部と考えられるもので、104はＳＤ49から、105はそれに近接したＬ－８包含層よりの出土である。いずれも細かい波状文を持つが口縁端部の形態に相違点があり、別個体であると考えられる。

〔飛鳥～奈良時代の遺物〕

ＳＫ39出土の遺物(106～108)

106は須恵器の杯身で、107は土師器の皿である。

108は須恵器で、６世紀から９世紀初頭頃にかけて見受けられる器種である。古い時期には把手の付くものもあるが、概して口径に比べ非常に深く、内面底面積の小さい形態を持つ。つまり、必然的に傾斜が強くなっている。また底部の器壁も際立って厚いことも、特徴の一つとして挙げることができる。この器種は従来漠然と「擂鉢」と言われてきたが、これらの特徴は、「擂る」行為よりも寧ろ「舂く」行為に適していると言える。

強い傾斜は常に対象物を中心部に集め、底面積の小ささはより強い圧力で舂き潰す能力を高めるのに役立っている。厚い底部は細長い器形の重心を低くし、安定性を持たせると共に、衝撃への補強の意味があると考えられる。底部外面に不規則に開けられた無数の穴は、「擂る」時の「滑り止め」などではなく、器壁を厚くしたための、焼成の際の歪みやヒビ割れを防ぐためのものであると考えられる。

この器種で舂いた対象物については明確にはできないが、『皇太神宮儀式帳』に須恵器として「塩舂」とあるのは注目される。つまり、対象物の一つとして「堅塩」を挙げることができよう。

ＳＫ61出土の遺物(109)

109は土師器の皿である。

ＳＨ10出土の遺物(110・111)

出土遺物量は極端に少ない。110は須恵器の杯蓋である。

111は須恵器の鉢形のものと考えられる。ロクロ成形で外面にはカキ目が施されている。

〔平安時代の遺物〕

ＳＫ２出土の遺物(112～114)

112と113は土師器の皿である。外面に指押さえの痕跡をよく残している。

〔鎌倉時代の遺物〕

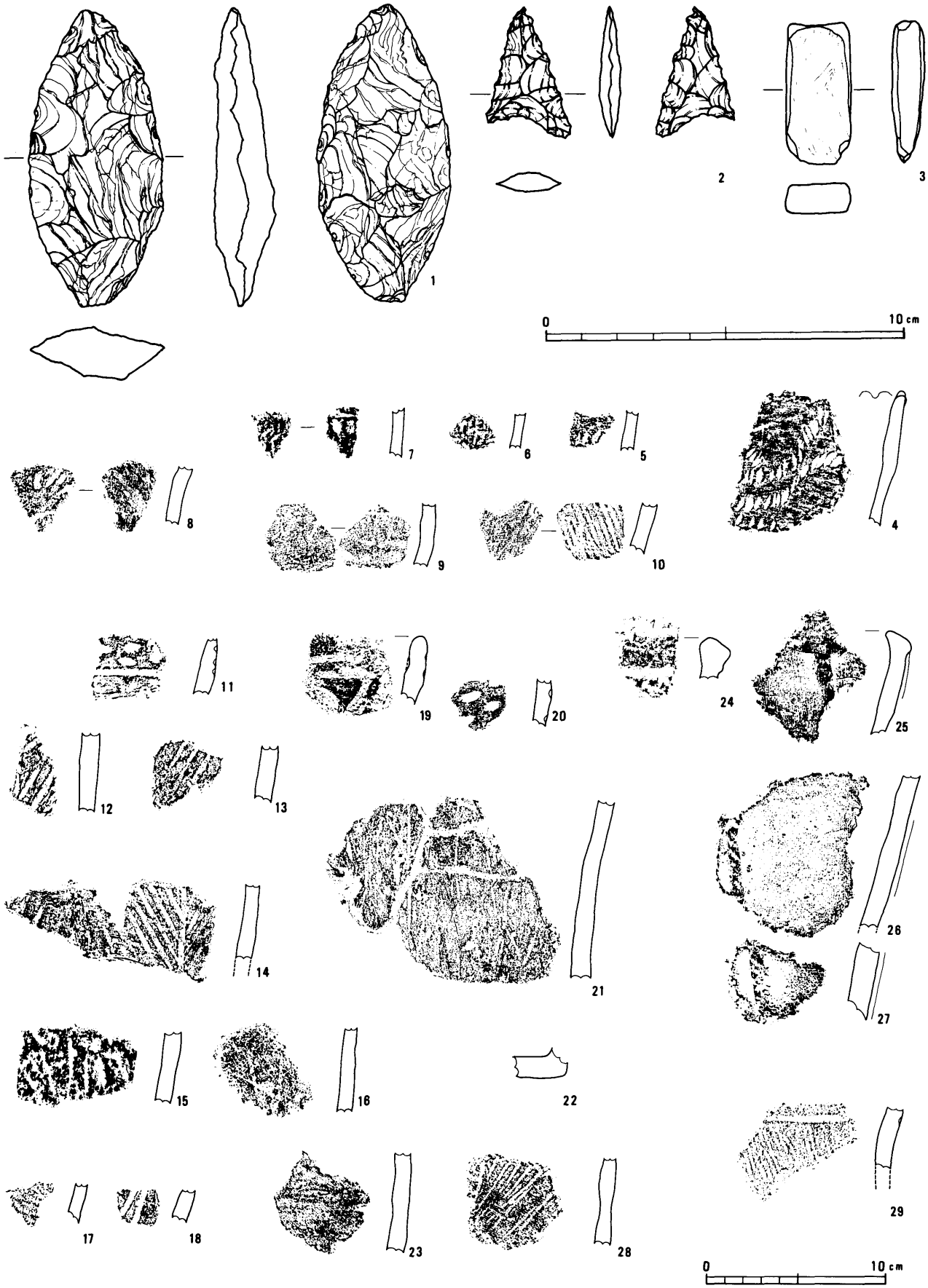
Ｊ－６包含層出土の遺物(116・117)

いずれも山茶椀と通称されている陶器椀である。有高台のもの(116)と無高台のもの(117)であるが、法量も口縁部形態も差異はない。いずれも完形で、しかも並んで伏せられた状態で出土しており、検出できなかったが出土地点が中世墓であった可能性が高い。　　（清水正明・小林　秀）

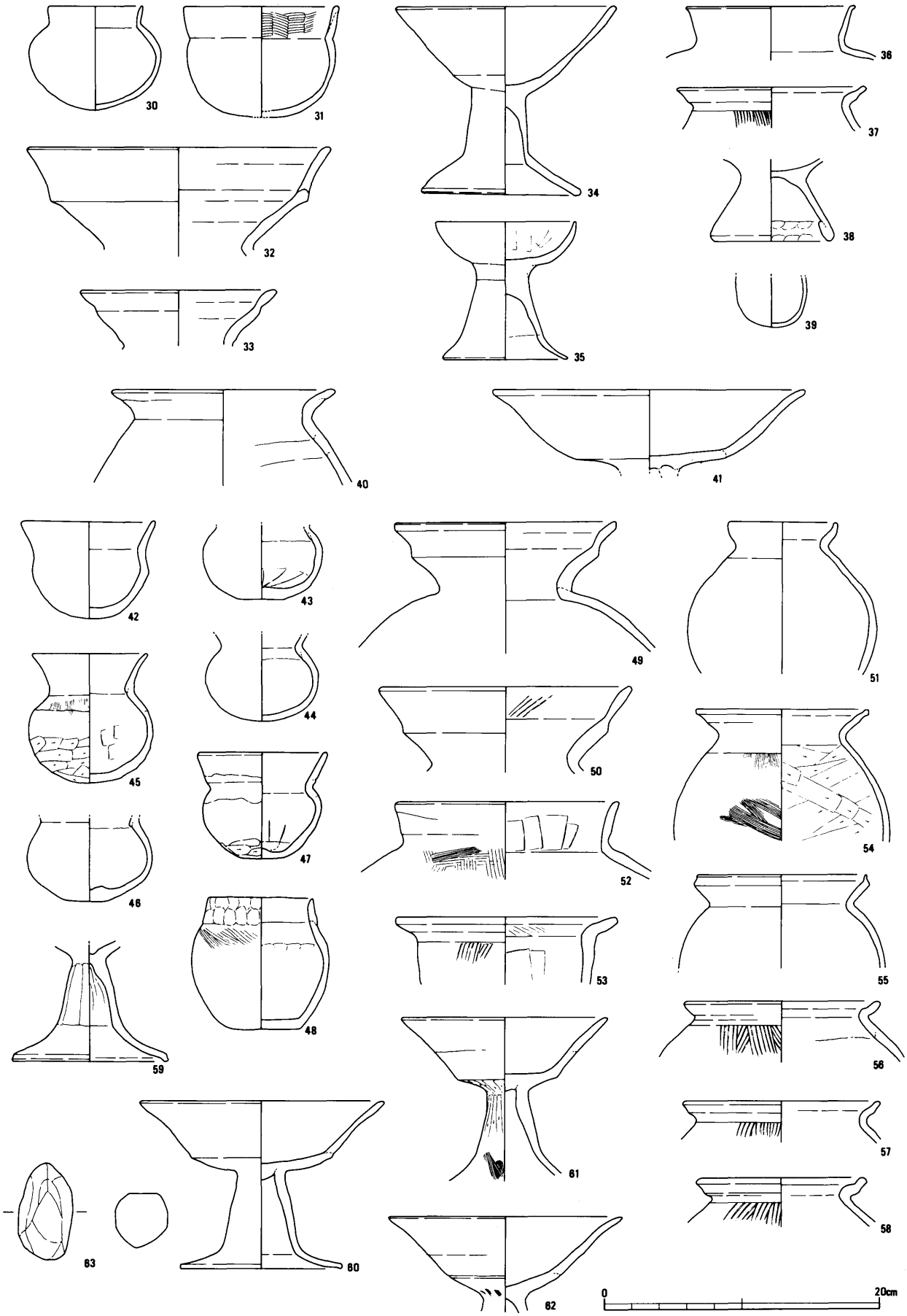
〔註〕

① 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」（考古学雑誌60－２　1974年）

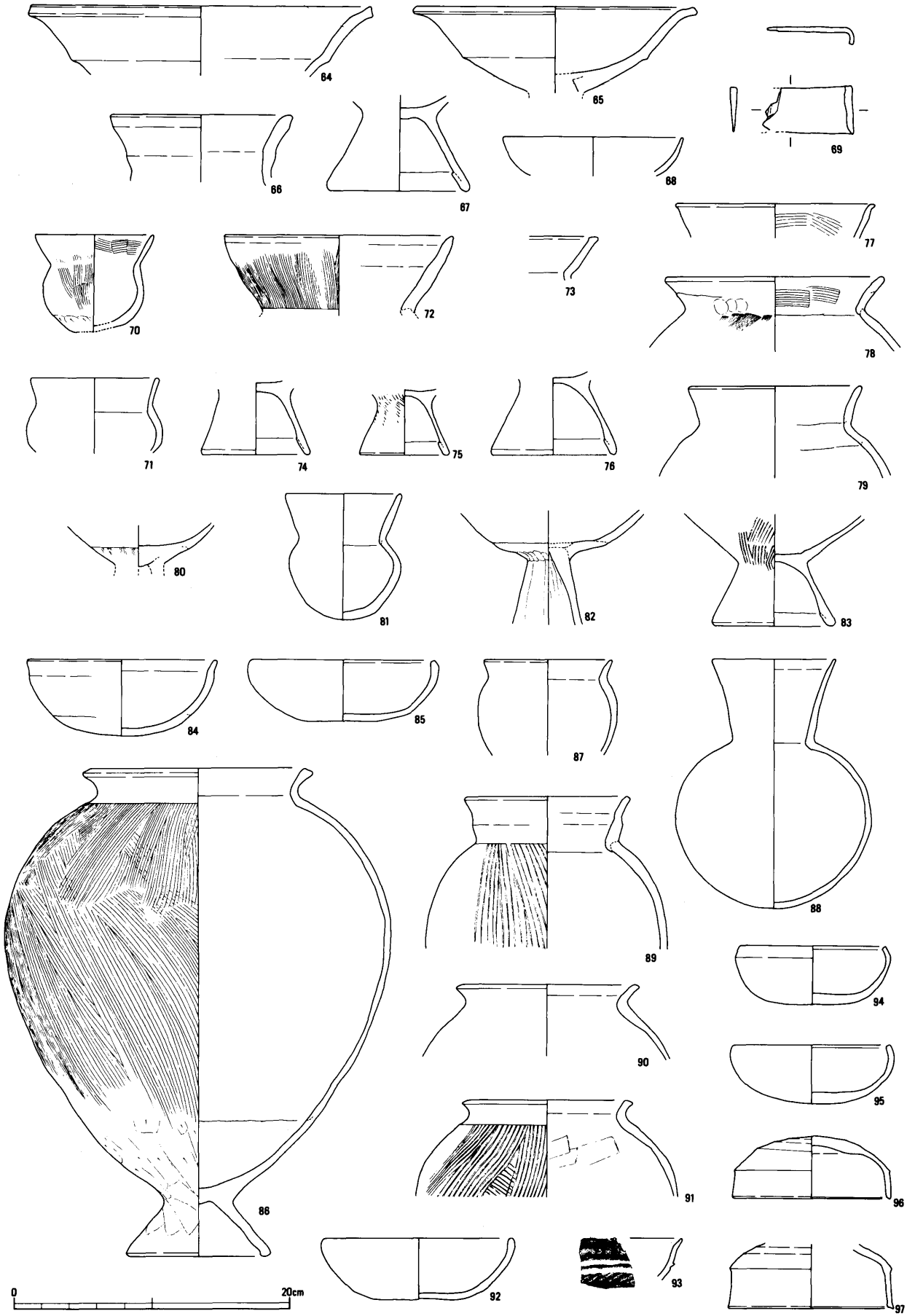
② 田辺昭三『陶邑古窯祉群Ｉ』（平安考古学園クラブ　1966年）



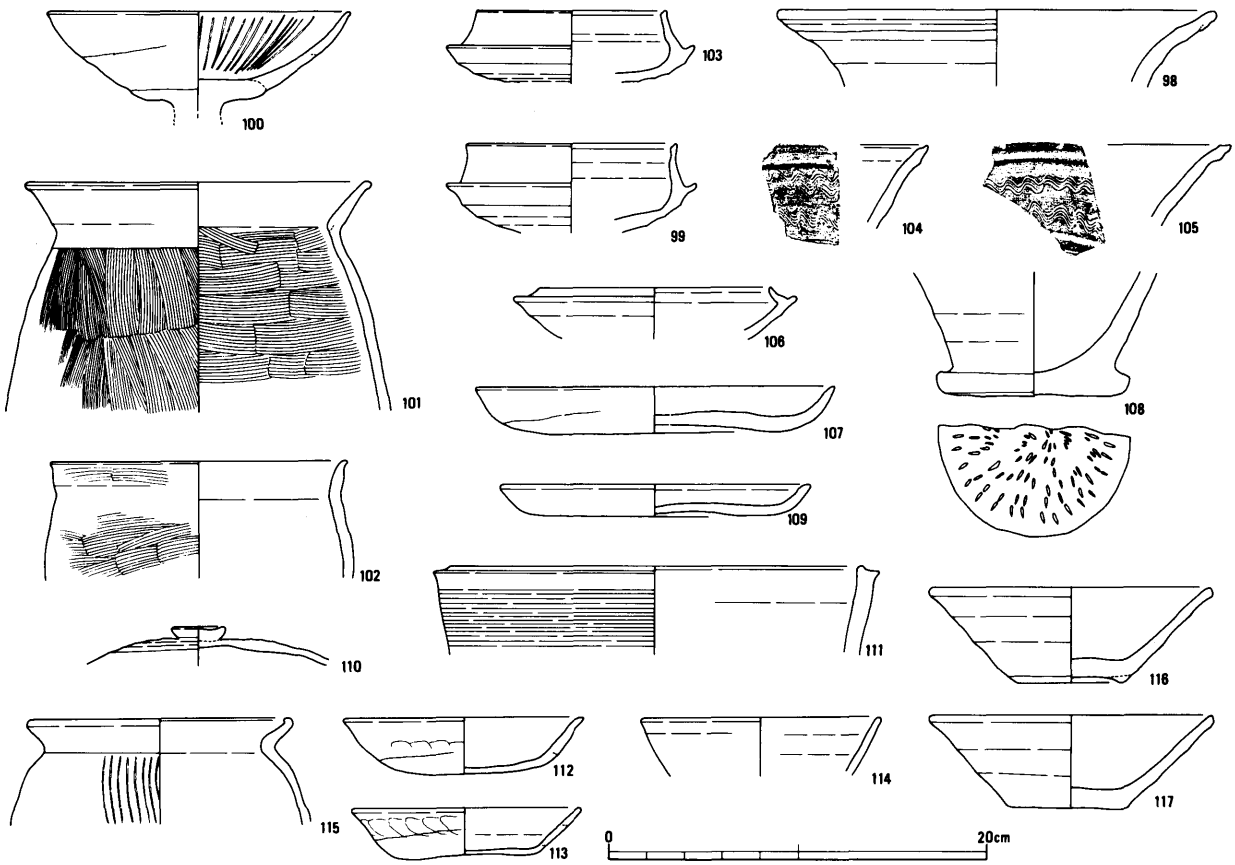
第10図　出土遺物実測図（1）（石器2：3，土器1：4）



第11図　出土遺物実測図（２）（１：４）



第12図　出土遺物実測図（３）（１：４）



第13図　出土遺物実測図（4）（1：4）

第3表　出土土器観察表（1）

番号	遺構	器種	器形	法量(cm)	成形・調整の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考	登録番号
4	SH40	〃	深鉢	(口)　(高) ;	外面に瓜型の連続刺突、口唇部に刻み	暗褐色	密	良	口縁部片		11—4
5	M—5 包含層	〃	〃	;	外面に瓜型	淡橙褐色	やや粗	〃	体部小片		4—8
6	〃	〃	〃	;	外面に瓜型	〃	〃	〃	〃		4—9
7	〃	〃	〃	;	外面に5㎜間隔の浅い瓜形	〃	〃	〃	〃		4—10
8	L—5 包含層	〃	〃	;	外面の沈線	淡赤褐色	〃	〃	〃		6—9
9	J—6 包含層	縄文土器	〃	;	外面に間隔の広い瓜型文	淡赤褐色	密	〃	〃	植物繊維痕	6—5
10	〃	〃	〃	;	内・外面に粗い条痕	淡橙褐色	〃	〃	〃	〃	6—4
11	SH45	〃	〃	;	外面に刺突文と2条の沈線	暗褐色	密	〃	口縁部下付近小片		26—2
12	〃	〃	〃	;	〃	〃	〃	〃	〃		26—1
13	〃	〃	〃	;	外面に矢羽根状沈線	〃	〃	〃	体部小片		26—6
14	〃	〃	〃	;	〃	〃	〃	〃	〃		26—8
15	〃	〃	〃	;	〃	淡橙褐色	〃	〃	〃		26—7
16	〃	〃	〃	;	〃	橙褐色	〃	〃	〃		26—5
17	〃	〃	〃	;	外面に縄文	黒褐色	〃	〃	〃		6—1
18	I—7 包含層	〃	〃	;	外面に2本の沈線	淡赤褐色	〃	〃	〃		6—2
19	SK24	〃	〃	;	外面に2本の沈線と弧状の沈線	淡橙褐色	〃	軟	口縁部片		6—7
20	〃	〃	〃	;	外面に斜め方向から棒状工具による刺突	〃	〃	良	体部小片		6—6
21	〃	〃	〃	;	外面に矢羽根状沈線	淡赤褐色	やや粗	〃	〃		5—7

第３表　出土土器観察表（２）

番号	遺構	器種	器形	法量(cm)	成形・調整の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考	登録番号
22	ＳＫ24	縄文土器	深鉢	(口)　(高)；	不明	淡橙褐色	やや粗	やや軟	底部片		6－8
23	ＳＤ26	〃	〃	；	外面の縄文	黒褐色	〃	良	体部小片		6－3
24	ＳＫ36	〃	〃	；	外面に隆帯、口縁端部に縄文	〃	〃	〃	口縁部小片		6－11
25	〃	〃	〃	；	外面に隆帯に縄文、区画内に羽状の縄文	〃	〃	〃	体部小片		6－13
26	〃	〃	〃	；	外面に隆帯に縄文、区画内に１本の縄文帯	〃	〃	〃	〃		6－14
27	〃	〃	〃	；	外面に隆帯	〃	〃	〃	口縁部小片	内面に煤付着	6－10
28	ＳＨ41	〃	〃	；	外面に羽状の沈線	赤褐色	〃	〃			26－4
29	Ｍ－６包含層	〃	〃	；	外面に横方向に沈線、その下に条線	淡橙褐色	〃	〃			26－3
30	ＳＨ１	土師器	小型壺	6.6；7.5	不明瞭	黒褐色	粗	やや軟	90%		31－3
31	〃	〃	〃	11.2；8.0	口縁内面に横ハケメ、内面ナデ、外面押ナデ	(外)黒褐色 (内)暗灰褐色	密	良	口縁1/6	外面に煤付着	2－2
32	〃	〃	二重口縁壺	21.6；	口縁内外面ヨコナデ	褐色	〃	〃	口縁1/12		2－3
33	〃	〃	〃	14.0；	〃	淡褐色	〃	〃	口縁1/5		1－7
34	ＳＨ１ Pit 1	〃	高杯	15.9；13.7	杯部：ヨコナデ→ナデ、　脚部：工具ナデ→ヨコナデ	灰橙褐色	〃	〃	70%	黒斑あり	29－3
35	〃	〃	〃	10.0；10.1	杯部：内面、ヨコナデ→板ナデ、外面、ヨコナデ→ナデ、脚部：タテナデ	黒褐色	粗	〃	完形		30－4
36	ＳＨ１	〃	甕	12.0；	口縁内外面ヨコナデ	褐色	密	〃	口縁1/5		2－4
37	〃	〃	〃	13.4；	口縁内外面ヨコナデ、外面ハケメ、内面ナデ	淡赤褐色	〃	〃	口縁1/10	外面に煤付着	1－5
38	〃	〃	〃	(台径) 9.0；	端部折返、指押	〃	やや粗	〃	台部のみ		1－1
39	〃	〃	ミニチュア	；	外面に指押ナデ、内面にナデ	淡褐色	〃	〃	底部のみ		2－5
40	ＳＨ４	〃	甕	16.2；	口縁内・外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ	(外)暗橙褐色 (内)暗灰褐色	〃	〃	口縁1/9	粘土巻上 外面に煤付着	3－3
41	〃	〃	高杯	22.5；	不明瞭	(外)褐色 (内)淡褐色	密	〃	杯部のみ 口縁1/8		4－6
42	ＳＨ40	〃	小型壺	9.6；7.0	外面：ヨコナデ→指押ナデ、内面：ヨコナデ→ナデ	明橙褐色	〃	〃	完形		11－2
43	〃	〃	〃	；	外面：ヨコナデ→ナデ　内面：ナデ→工具ナデ	褐色	〃	〃	口縁部を欠く		18－2
44	〃	〃	〃	；	内外面ナデ	〃	〃	〃	〃		18－1
45	〃	〃	〃	8.4；9.5	外面：ヨコナデ→タテハケメ→ケズリ、内面：ヨコナデ→ナデ→板ナデ→指押	灰褐色	やや粗	〃	80%		30－3
46	〃	〃	〃	；	不明瞭	明褐色	密	〃	口縁部を欠く		18－3
47	〃	〃	〃	9.2；7.7	外面：ヨコナデ→指押ナデ→ケズリ、内面：ヨコナデ→ナデ→工具ナデ	褐色	〃	〃	ほぼ完形		32－1
48	〃	〃	〃	7.5；9.6	外面：指押→ハケメ→ナデ、内面：指押→ナデ	(外)淡褐色 (内)暗白褐色	〃	〃	完形	煤付着	31－2
49	〃	〃	二重口縁壺	16.0；	外面：ヨコナデ→ナデ、内面：ヨコナデ→指押ナデ	暗褐色	〃	〃	口縁1/3		11－1
50	〃	〃	〃	18.0；	内外面ヨコナデ、内面に櫛目アリ	明褐色	〃	〃	口縁1/5		18－4
51	〃	〃	壺	8.0；	内外面：ヨコナデ→ナデ	赤褐色	〃	〃	口縁1/2		10－4
52	〃	〃	甕	16.0；	外面：ヨコナデ→タテ・ヨコハケメ（２原体）、内面：横板ナデ→指押ナデ	淡褐色	〃	〃	口縁1/2		10－1
53	〃	〃	〃	16.0；	外面：ヨコナデ→タテハケメ、内面：ヨコナデ→斜ハケメ→板ナデ	暗橙褐色	〃	〃	口縁1/4		10－5
54	〃	〃	〃	12.4；	外面：ヨコナデ→タテハケメ→斜ハケメ、内面：ヨコナデ→ケズリ	暗褐色	〃	〃	口縁1/10	内外面に煤付着	17－3
55	〃	〃	〃	12.4；	外面：ヨコナデ→工具ナデ→ナデ、内面：ヨコナデ→ナデ	淡褐色	〃	〃	口縁1/3		10－2
56	〃	〃	〃	14.0；	外面：ヨコナデ→タテハケメ、内面：ヨコナデ→ナデ	暗灰褐色	〃	〃	口縁1/8		15－3
57	〃	〃	〃	14.0；	〃	褐白色	〃	〃	口縁1/4		15－4
58	〃	〃	〃	12.4；	外面：ヨコナデ→タテハケメ、内面：ヨコナデ→指押ナデ	白褐色	〃	〃	口縁1/4		10－3
59	〃	〃	高杯	(脚径) 11.2；	端部内外面ヨコナデ、外面タテ板ナデ	灰褐色	〃	〃	脚部のみ		11－3

第３表　出土土器観察表（３）

番号	遺構	器種	器形	法量(cm)	成形・調整の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考	登録番号
60	ＳＨ40	土師器	高杯	(口)(高) 16.1；12.0	外面：ヨコナデ→ナデ→ヨコナデ、内面：ヨコナデ→ナデ	暗赤褐色	密	良	50%		17—2
61	〃	〃	〃	15.0；	杯部内外面：ヨコナデ→工具ナデ、脚部：ケズリ状板ナデ→ハケメ	褐色	〃	〃	脚端部を欠く		12—1
62	〃	〃	〃	17.0；	外面：ヨコナデ→指押→ハケメ、内面：ヨコナデ→ナデ	暗橙褐色	〃	〃	杯部のみ		13—1
64	ＳＨ67	〃	二重口縁壺	25.0；	不明瞭	褐色	〃	〃	口縁1/12		19—4
65	〃	〃	高杯	20.6；	内外面：ヨコナデ→ナデ	暗灰褐色	やや粗	〃	杯部のみ30%		20—1
66	〃	〃	壺	13.0；	外面：ヨコナデ、内面：ヨコナデ→工具ナデ	暗橙褐色	密	〃	口縁1/2		19—1
67	〃	〃	甕	(台径) 10.4；	端部折返	〃	やや粗	〃	台部のみ		19—5
68	〃	〃	椀	13.0；	不明瞭	褐色	密	〃	口縁1/7		21—1
70	ＳＨ54	〃	小型壺	8.6； 7.0	外面：ヨコナデ→タテハケメ→ケズリ、内面：ヨコナデ→ナデ	淡褐色	〃	〃	80%		8—5
71	〃	〃	〃	9.0；	不明瞭	暗褐白色	〃	〃	口縁1/3		20—2
72	〃	〃	壺	16.6；	外面：ヨコナデ→タテハケメ、内面：ヨコナデ→指押	明灰褐色	〃	〃	口縁1/3		27—1
73	〃	〃	甕	；	内外面ヨコナデ	暗灰褐色	〃	〃	口縁小片	外面に煤付着	27—2
74	〃	〃	〃	(台径) 7.6；	端部折返	明褐色	〃	〃	台部のみ		20—5
75	〃	〃	〃	(台径) 6.4；	端部折返、外面ハケメ	暗赤褐色	〃	〃	〃		20—6
76	〃	〃	〃	(台径) 8.8；	端部折返	〃	〃	〃	〃		20—4
77	ＳＫ３	〃	〃	；	外面：ヨコナデ、内面：ハケメ	褐色	〃	〃	口縁1/6		1—2
78	〃	〃	〃	16.0；	口縁内面：ハケメ、外面：ヨコナデ→指押→ハケメ	橙褐色	やや粗	やや軟	口縁1/2	外面に煤付着	3—4
79	〃	〃	〃	12.4；	口縁内外面：ヨコナデ、外面ナデ、内面：指押ナデ	赤褐色	密	良	口縁3/5		1—6
80	ＳＫ22	〃	高杯	；	杯外面底部にハケメ	明褐色	やや粗	〃	杯底部のみ		5—6
81	〃	〃	小型壺	8.3； 9.2	外面：ヨコナデ→ナデ、内面：ヨコナデ→指押ナデ	淡褐色	〃	〃	ほぼ完形		29—2
82	ＳＫ15	〃	高杯	；	杯外面：ヨコナデ→ナデ、脚部：工具によるナデ	〃	密	〃	杯底部と脚部分		5—5
83	ＳＫ29	〃	甕	(台径) 8.5；	胴部外面：ハケメ、台端部折返	橙褐色	やや粗	〃	台部は完形	外面に煤付着	5—4
84	ＳＨ69	〃	椀	13.6； 5.6	外面：ヨコナデ→指押ナデ、内面：ヨコナデ→工具によるタテナデ	淡橙褐色	密	〃	25%		15—2
85	〃	〃	〃	13.1； 4.5	内外面：ヨコナデ→ナデ	暗赤褐色	〃	〃	完形		31—4
86	〃	〃	甕	16.6；35.8	外面：ヨコナデ→タテハケメ→板ナデ	(外)黒褐色 (内)褐色	〃	〃	ほぼ完形	外面に煤付着	28—1
87	ＳＨ68	〃	〃	9.2；	口縁内外面ヨコナデ	赤褐色	〃	やや軟	口縁1/4		19—2
88	〃	〃	壺	9.0；18.0	内外面：ヨコナデ→ナデ	褐色	〃	良	40%		23—2
89	〃	〃	〃	12.0；	外面：ヨコナデ→タテハケメ、内面：ヨコナデ→ナデ	(外)淡橙褐色 (内)灰褐色	〃	〃	口縁1/2		23—3
90	〃	〃	甕	12.6；	外面：ヨコナデ→ナデ、内面：ヨコナデ→指押	褐色	〃	〃	口縁部は完形		25—5
91	〃	〃	〃	12.4；	外面：ヨコナデ→タテハケメ、内面：ヨコナデ→板ナデ	〃	〃	〃	口縁1/2		23—1
92	〃	〃	椀	13.5； 4.5	外面：ヨコナデ→ナデ→指押、内面：ヨコナデ→ナデ	暗橙褐色	〃	〃	30%		24—4
93	〃	須恵器	高杯？	；	ロクロナデ、外面に波状文	暗灰色	〃	〃	口縁部の小片		19—6
94	ＳＨ70	土師器	椀	10.6； 4.2	外面：ヨコナデ→指押、内面：ヨコナデ→ナデ	橙褐色	〃	〃	口縁1/2		25—1
95	〃	〃	〃	11.3； 4.2	不明瞭	赤褐色	〃	〃	完形		15—1
96	〃	須恵器	蓋	11.4； 4.6	ロクロナデ→ケズリ	暗灰色	〃	〃	口縁1/3		25—3
97	〃	〃	〃	12.0；	〃	灰白色	〃	〃	口縁1/4		25—2
98	ＳＨ65	〃	甕	23.0；	ロクロナデ、口縁端と外に折返	暗灰色	〃	〃	口縁1/6		21—2
99	〃	〃	杯	11.0；	ロクロナデ→ケズリ	灰色	〃	〃	口縁1/6		21—3

第３表　出土土器観察表（４）

番号	遺構	器種	器形	法量(cm)	成形・調整の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考	登録番号
100	ＳＤ55	土師器	高杯	(口) (高) 16.0；	ヨコナデ、内面に斜のミガキ	橙褐色	密	良	口縁部1/4		8—3
101	〃	〃	甕	18.0；	口縁内外面ヨコナデ、外面：ハケメ、内面：ヨコハケメ	明橙褐色	〃	〃	口縁部1/4		8—4
102	〃	〃	〃	15.7；	外面：ヨコハケメ、内面：ヨコナデ→ナデ	(外)淡褐色 (内)橙褐色	密	良	口縁部1/4		9—2
103	ＳＫ62	須恵器	杯	10.0；	ロクロナデ→ケズリ	灰色	〃	〃	口縁部1/6		21—6
104	ＳＤ49	〃	甕	；	ロクロナデ、外面に波状文	〃	〃	〃	口縁部小片		9—5
105	Ｌ—8 包含層	〃	〃	；	〃	暗灰色	〃	〃	〃		25—4
106	ＳＫ39	〃	杯	12.0；	ロクロナデ	灰色	〃	〃	口縁部1/18		9—4
107	〃	土師器	皿	19.0； 2.4	不明瞭	赤褐色	〃	〃	口縁部3/8		8—1
108	〃	須恵器	鉢	(底径) 10.2；	底部外面に浅い刺突アリ	暗灰色	〃	〃	底部1/2		17—1
109	ＳＫ61	土師器	皿	16.4； 1.7	口縁部内外面ヨコナデ	赤褐色	〃	〃	口縁部1/3		21—4
110	ＳＨ10	須恵器	蓋	；	ロクロナデ→ケズリ、ツマミ貼り付け	灰白色	〃	〃	口縁部を欠く		5—1
111	〃	〃	鉢？	21.6；	ロクロナデ、外面カキ目	灰色	〃	〃	口縁部1/8		3—2
112	ＳＫ２	土師器	皿	12.6； 3.0	ヨコナデ→ナデ	褐色	〃	〃	80%		1—3
113	〃	〃	〃	12.2； 2.5	〃	〃	〃	〃	完形	底部外面に圧痕	31—1
114	〃	須恵器	杯	12.8；	ロクロナデ	灰色	〃	〃	口縁部1/8		1—4
115	Ｏ—16 Pit 1	土師器	甕	13.4；	外面：ヨコナデ→タテハケメ、内面：ヨコナデ→ナデ	明橙褐色	〃	〃	口縁部1/6		22—1
116	Ｊ—6 包含層	陶器	椀	15.0； 5.1	ロクロナデ、底部糸切	灰色	〃	〃	完形		30—2
117	〃	〃	〃	15.0； 5.0	〃	〃	〃	〃	〃	高台なし	30—1

(3) 結　　語

今回の調査で東浦遺跡は、断続的にではあるが、縄文時代から中世に至る複合遺跡であったことが判明し、遺構としては縄文時代中期末葉頃からを検出することができた。また遺物としては、木葉形尖頭器の出土も注目される。

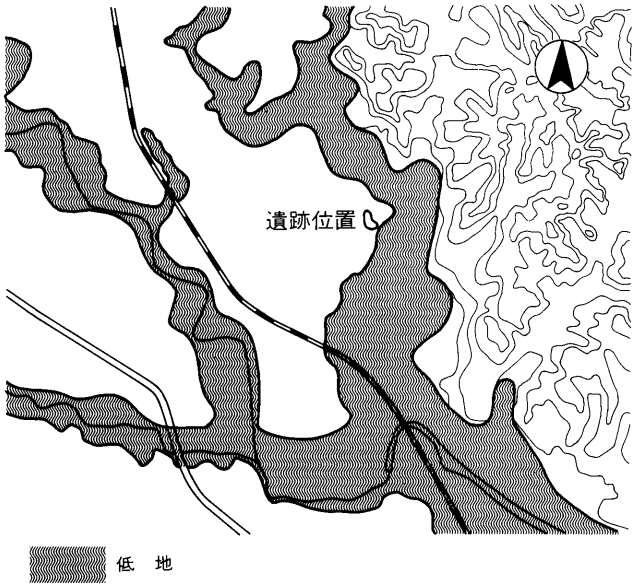
以上のように比較的充実した成果を得ることができたが、恐らくこの丘陵上に広範囲にあったであろう遺跡群のごく一部分を調査したに過ぎず、調査結果から導き出される解釈は、自ずと限定されたものとならざるを得ないことは言うまでもない。

本遺跡は前述のように、大きくは南北に伸びる第三系鮮新統菴芸層群の丘陵の東端に位置している。そして調査の結果、遺構検出面が南南東方向で急激に落ち込むと言う地形的な特徴のあることも明らかとなった。恐らくこうした自然地形的条件は、時代を遡る程、土地利用に際し大きな制約となったであろうことは、容易に想定することができる。よって局地的ではあるが、地形と居住域の関係について、時代を追ってどの様に推移していったかを若干見ておきたい。

落ち込みの部分は、調査前の状況において既に北西部分よりかなり低い畑地となっていたが、遺構基盤層が高位部で耕土直下であったのに対し、落ち込み部分には凡そ60cmもの黒色土が堆積していた。そしてＳＢ81などが建ち並ぶ所は最も低位置にあり、その部分にはかなり大きな礫を含む層が露頭していた。

この礫層は、丘陵形成前の堆積層と考えられる。また地形的に見て南及び東を谷筋によって規制されたこの丘陵はかつて大きな河川に接していたことは明らかで、落ち込みはその浸食作用によって形成されたものと判断される。

ところで黒色土層の下には、部分的に黄白色の粘質土層も認められた。このことは、落ち込み部分が浸食後一時期、例えば湿地などであったことを想起させ興味深い。少なくともこの部分が居住には適さ



第14図　大里地区地形概念図

なかったことには疑いなかったようで、特に縄文時代の遺構や遺物の出土が北側の最も高位部分に集中しているのは、そのためであると考えられる。

５世紀になっても落ち込み部分には住居は建てられず、恐らく居住には適さない状況が続いていたものと考えられる。ただ縄文時代との際立った違いは、住居が落ち込みの周辺を取り巻くように営まれ、縄文時代の遺構の集中した部分は全くの空白地となっていることである。その理由については想定の域を出ないものの、空白地が５世紀の集落のほぼ北側に位置していること、及び樹木の根跡と思われる小穴が特に集中していることから、例えば防風のための山林地であったと判断することもできよう。

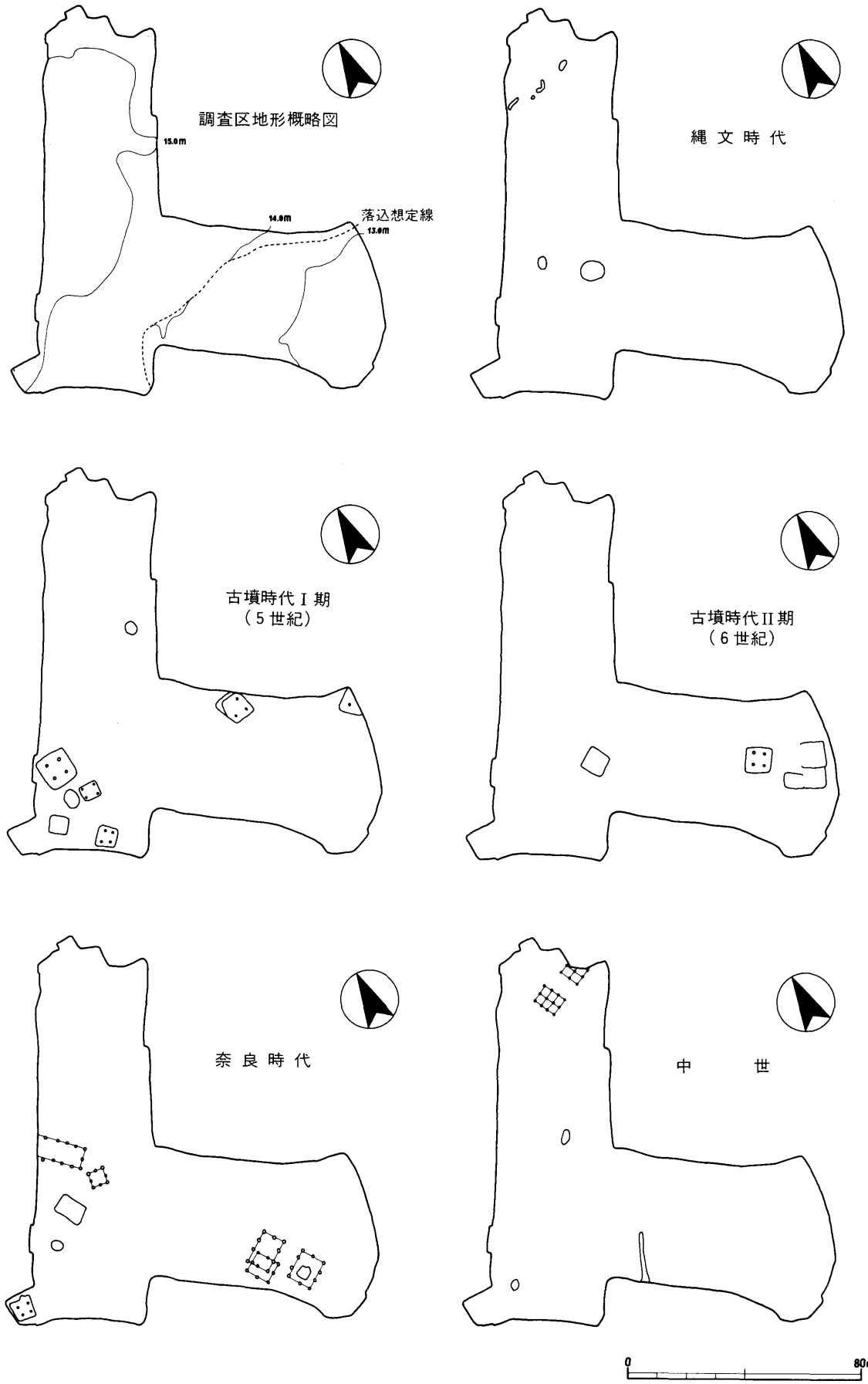
落ち込み内に居住するようになるのは、概ね６世紀以降である。落ち込み内の遺構は、特に掘立柱建物の柱掘形の深さが現状で20～30cmと、決して良好な保存状態ではなかった。このことは、検出し得なかったが、黒色土層中に当時の生活面のあった可能性を示すとともに、５世紀から６世紀に到る間に落ち込みがある程度埋没し、居住空間となり得る状態となったことをも想起させるものである。

さて検出した全時代の遺構において、最も充実した内容を持つのが５世紀代の住居跡群である。勿論ＳＨ54やＳＨ67の北側、またＳＨ40の西側にも住居跡が広がる可能性が十分にあり、当時の集落を全て検出できた訳ではない。また、厳密な意味での各住居の同時併行性も、言わば相対的な判断にしか過ぎない。しかし、建て替えの痕跡が殆ど認められなかったことは、個々の建物の存続期間が短かったことを示しており、ある程度の集落構造を想定することは許されるであろう。

まず、住居のまとまりから判断して、単純にＳＨ40周辺とＳＨ54・ＳＨ67周辺で、２つの単位集団を想定することができる。特に前者の場合住居の規模から、ＳＨ40がその中心であったとも考えられる。１集団の構成人数ついては全くの想定であるが、規模から推して10～15人程度であったと見られる。しかしこれは、あくまで検出し得た遺構での可視的な判断に過ぎず、生産や血族などの、実体としての単位集団とどこまで重なるのかは、今後の課題であろう。

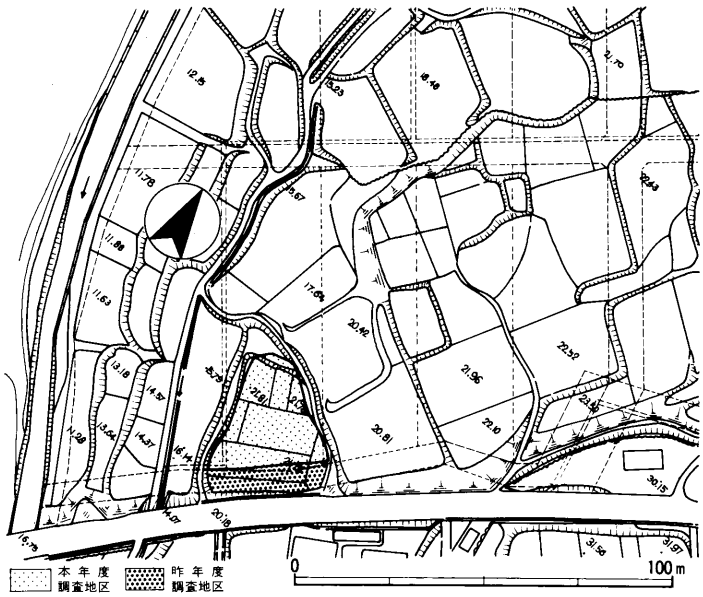
ところで、前述したように、ＳＨ１では主柱穴は検出できなかった。これは、遺構の残存状況からして、主柱穴がなかったと判断してよい。しかし生活痕跡（炉跡）がある以上、上部構造物は存在しており、恐らく屋根を数本の柱で支えるだけの、不安定且つ簡略なものであったと考えられる。また、高杯が埋設されていたことも注目される。

以上のように、その意味するところは不明ながらも、ＳＨ１はかなり特殊な存在と位置づけすることはできるであろう。そして、ＳＨ40周辺を仮に生産ないしは血族の単位集団と見た時、ＳＨ１の存在は大形竪穴住居のＳＨ40との関連をも含めて、重要な意味を持っていると考えられる。今後の類例の増加に期待したい。　　（小林　秀）


調査区地形概略図
15.0m
14.0m
13.0m
落込想定線
縄 文 時 代
古墳時代Ⅰ期
（5世紀）
古墳時代Ⅱ期
（6世紀）
奈 良 時 代
中　　世
0
80m

第15図　遺構変遷図

3．津市大里山室町　小谷Ｃ遺跡



第16図　調査区周辺地形図(1：2,000)

今回の調査は、昨年度実施された調査地区に隣接して行われた。昨年度の調査では調査地区の南西隅に柱穴、下層に縄文時代の遺物包含層が確認された。そのために今回の調査は、上層と下層に遺構がある可能性を想定して行った。

調査に当たって４ｍグリッドを設定し、西から数字、北から南にアルファベットを与え、小地区とした。

表土と無遺物層は、重機により掘削し、その後は人力により行った。

下層遺構の検出作業は、上層検出面に遺物が比較的多く認められた調査小地区Ｄ～Ｇ－９を人力で行った。しかし遺構はなく、他の小地区への遺物の広がりも殆どないものと判断されたため、他の部分では重機を使用した。

(1) 遺　　構

遺跡の層序は、第17図に示した。北東壁面では、調査地区の東隅から北西に向かって６ｍ程で耕土直下が岩盤になる。南東壁面では、黄褐色シルト層の下は酸化したような赤みがかった塊が所々に見られる砂質の層で、その下は還元したような青みがかった砂の層が堆積している。

遺物は黄褐色シルト層より上面には殆ど含まれないので、遺構検出は黄褐色シルト層の上面で行った。黄褐色シルト層は、縄文時代の遺物包含層である。黄褐色シルト層がなくなる所では、遺構検出面を耕土直下とした。

調査の結果、竪穴住居４棟、掘立柱建物１棟などを検出した。

Ａ．竪穴住居

ＳＨ１　長辺約3.7m、短辺約2.7mの長方形で、深さは検出面より約30cmである。

北辺の東隅寄りには、竈を伴っていた。竈の袖石から壁に向かって、部分的に焼けた粘土の塊が残存し、上方からの圧力で潰れたような形で皿や長胴甕が出土した。また竈内にあたる壁面の上部は、よく焼けていたが壁には煙道はなかった。

竪穴住居の西側には直径82cmの土坑、その東側には三角形の土坑があるが、竪穴住居に伴うものであるかどうかは不明である。周溝及び主柱穴は検出されなかった。

出土遺物は、土師器の杯・皿・長胴甕などや、須恵器の杯蓋・身などがある。

ＳＨ２　平面形は台形を呈し、長辺が約3.3m、短辺約1.9～2.8mで、深さは検出面より約７cmである。

周溝らしい溝の一部と、主柱穴と思われる穴が３個検出された。北側の隅がＳＨ１を切っている。

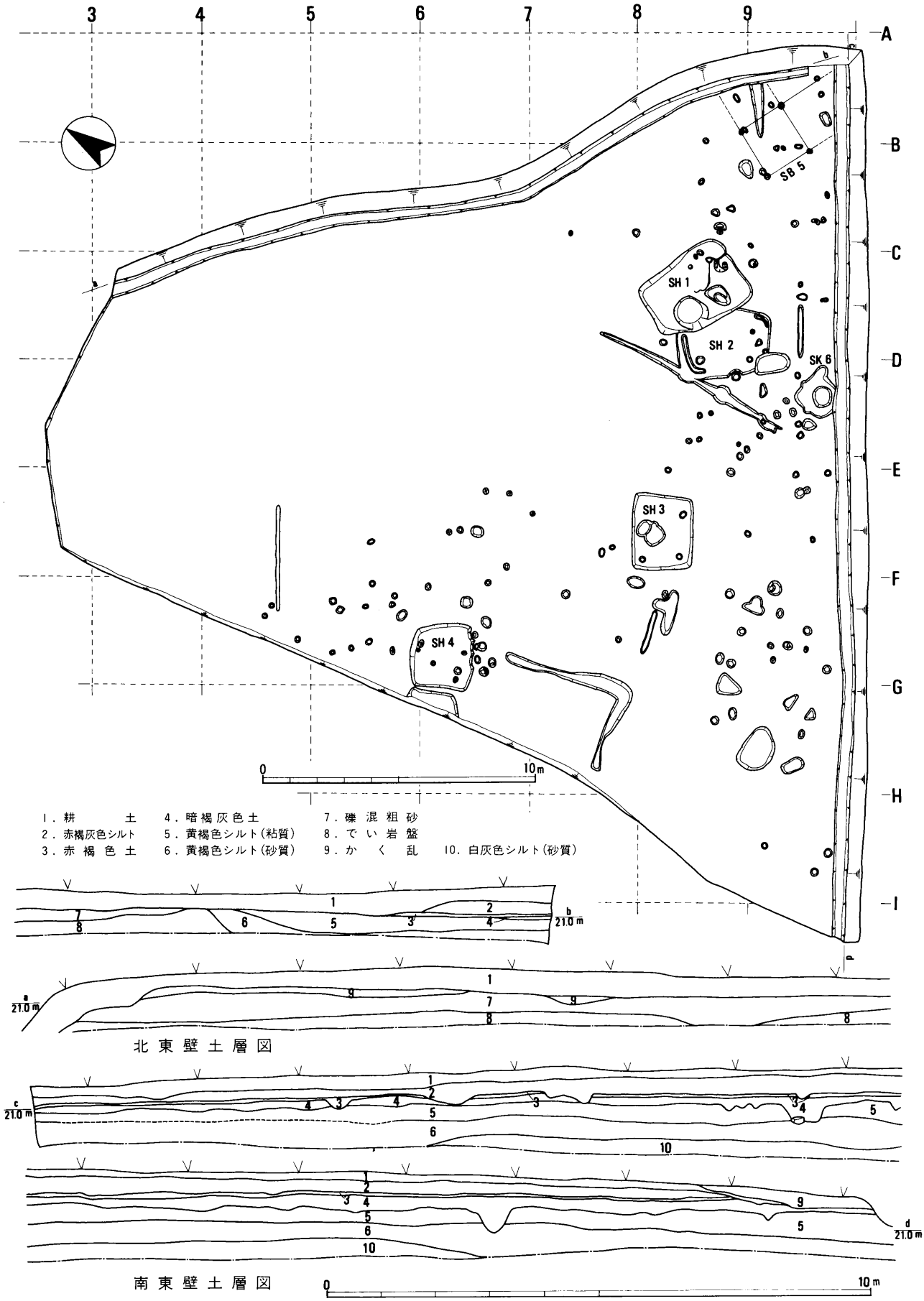
出土遺物は、土師器皿や甕片などが数点である。

ＳＨ３　長辺が約2.6m、短辺が約2.2mの長方形で、深さは検出面より約６～13cmである。主柱穴と思われる穴が３個検出された。

出土遺物は、土師器甕などの小片のみであった。

ＳＨ４　一辺が約2.2mのほぼ正方形で、深さは検出面より約６～16cmである。

出土遺物は、土師器や須恵器などの小片のみであった。



第17図　遺構平面図（1：200）、土層図（1：100）

B．掘立柱建物

ＳＢ５　東西２間、南北１間以上の総柱建物で、更に北東の調査区外に続くものと考えられる。柱間は桁行1.7m、梁行1.9mである。柱掘り形は円形で、直径20cmで、深さは20～30cmである。

C．土坑

ＳＫ６　平面形は一辺が約1.4mのほぼ正方形である。埋土に焼土と炭化物を多く含む。

出土遺物には、土師器甕や須恵器杯がある。

(2) 遺　　物

縄文時代の遺物（1～16）

この時代の遺構は認められなかったが、縄文土器が調査区の南東側で集中的に出土した。

土器類には胎土に繊維を含む一群(1～4)と、縄文や羽状沈線を施した一群(5～13)があるが、土器片はいずれも著しく磨耗していた。

繊維を含む一群には爪型の沈線が散漫についているもの(3)と、隆帯に押圧した跡が見られるもの(1・2)がある。また底部付近の部分(4)もあり、尖底であることが窺われる。これらの一群は、早期末のものと考えられる。

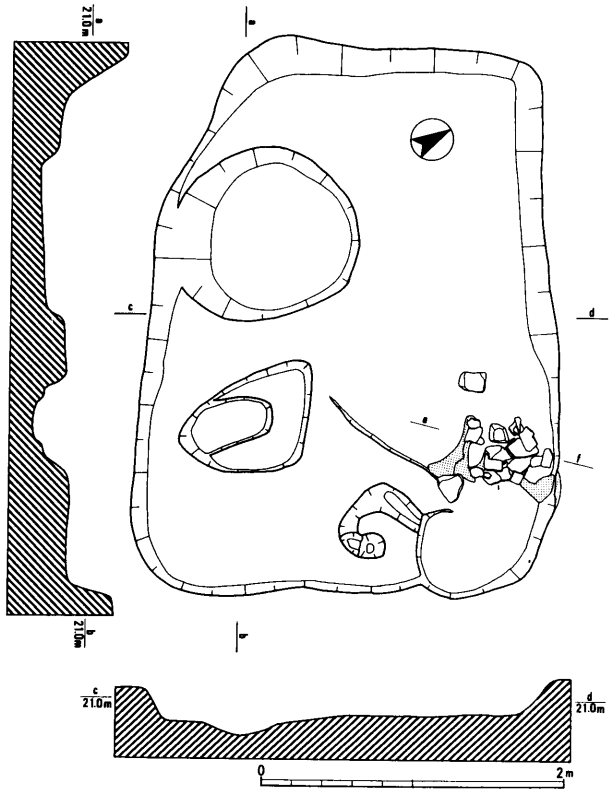
縄文や羽状沈線を施した一群の中には、底部や口縁端部がある。底部には、網代跡の残るもの(12)がある。口縁部には縄文を施したもの(8)と、太い沈線や条線を施したもの(5～9)がある。羽状沈線を施したものは橋状把手をもち、その上面には更にＳ字状の沈線を持つ。北白川Ｃ式２期[1]に比定できよう。これらの一群は、中期末のものと考えられる。

石器類には磨製石斧(14)とスクレーパー(15)、更に二次加工された剝片(16)がある。磨製石斧は砂岩製、スクレーパーはサヌカイト製、二次加工された剝片はチャート製である。磨製石斧はかなり使用されたようで、刃部が著しく磨耗している。形態から縄文時代のものと判断される。

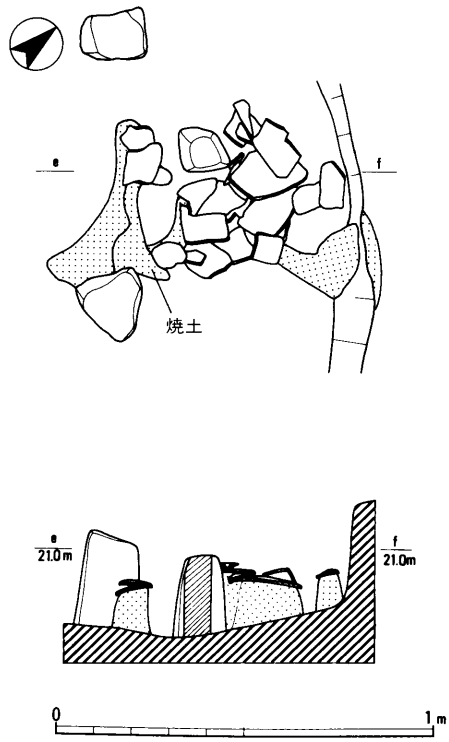
ＳＨ１出土の遺物(17～24)

土師器杯(17)　器壁は全体的に厚い。口縁部は直線的に外へ開き、端部に近づく程薄くなり、丸く仕上げている。

土師器甕(20)　頸部が「く」の字に屈曲し、口縁端部を上方に摘み上げ、弱い面を形成する。



第18図　ＳＨＩ平面図（１：50）



第19図　ＳＨＩ土器出土状況図（１：20）

須恵器杯蓋(23)　陶邑編年[②]Ⅳ－３に比定できよう。

須恵器杯身(24)　高台に特徴があり、高台外側下部に内傾する面を持つ。

ＳＨ２出土の遺物(25・26)

土師器甕(26)　口縁部は内側に丸みをもって肥厚し、端部は上方への摘み出しで、やや丸みのある三角形状に仕上げている。

ＳＨ３出土の遺物(27)

土師器甕(27)　口縁部は少し外反するが、口縁部を内側に折り返し、口縁端部は丸みをもたせて仕上げている。

ＳＢ５出土の遺物(28)

土師器小皿(28)　南西隅の柱穴から出土したものである。底部は比較的平坦で、器壁はやや厚い。口縁端部はヨコナデされ、細く且つ丸く終わる。

ＳＫ６出土の遺物(29～31)

土師器甕(31)　底部片であるが、割れ口が擬口縁状を呈し、成形過程で容器に転用した可能性も考えられる。

その他の遺物(32～36)

山皿(33)　常滑窯製品編[③]年Ⅱ段階に比定できよう。

須恵器杯身(34)　陶邑編年[④]Ⅱ－６の杯蓋かⅢ－１の杯身に比定でき、ここでは杯身として取り扱った。

須恵器甕(36)　口縁部外面を帯状に肥厚させ、横方向のカキメを施し、頸部は波状文で飾る。

(3)　ま　と　め

今回の調査では、袖石と支柱石が良好に残る竈を持つＳＨ１を検出した。出土遺物から、奈良時代中期頃と考えられる。

他の３棟の竪穴住居はいずれも残りが悪く、出土土器も少量であったため、時期を確定するには至らなかった。

ＳＢ５は、出土遺物や遺構の形態から、平安時代末頃の建物と考えられる。

ＳＫ６は、出土した須恵器の椀・杯から飛鳥時代後半頃と考えられるが、遺構の性格については不明である。

以上が主な遺構である。

遺構の検出状況や、昨年度の立会調査地区でも西隅に柱穴が検出されていることから、遺跡としては、周辺の削られて低くなっている部分にも、かつては遺跡が広がっていたものと思われる。

縄文土器が遺構に伴わず、且ついずれも小片で著しく磨耗していること、また堆積層の状況から判断すると、縄文土器は流れ込みの可能性がある。従って、調査区より高位の南東や東側に、この時代の遺跡のある可能性が高いものと考えられる。

（清水正明）

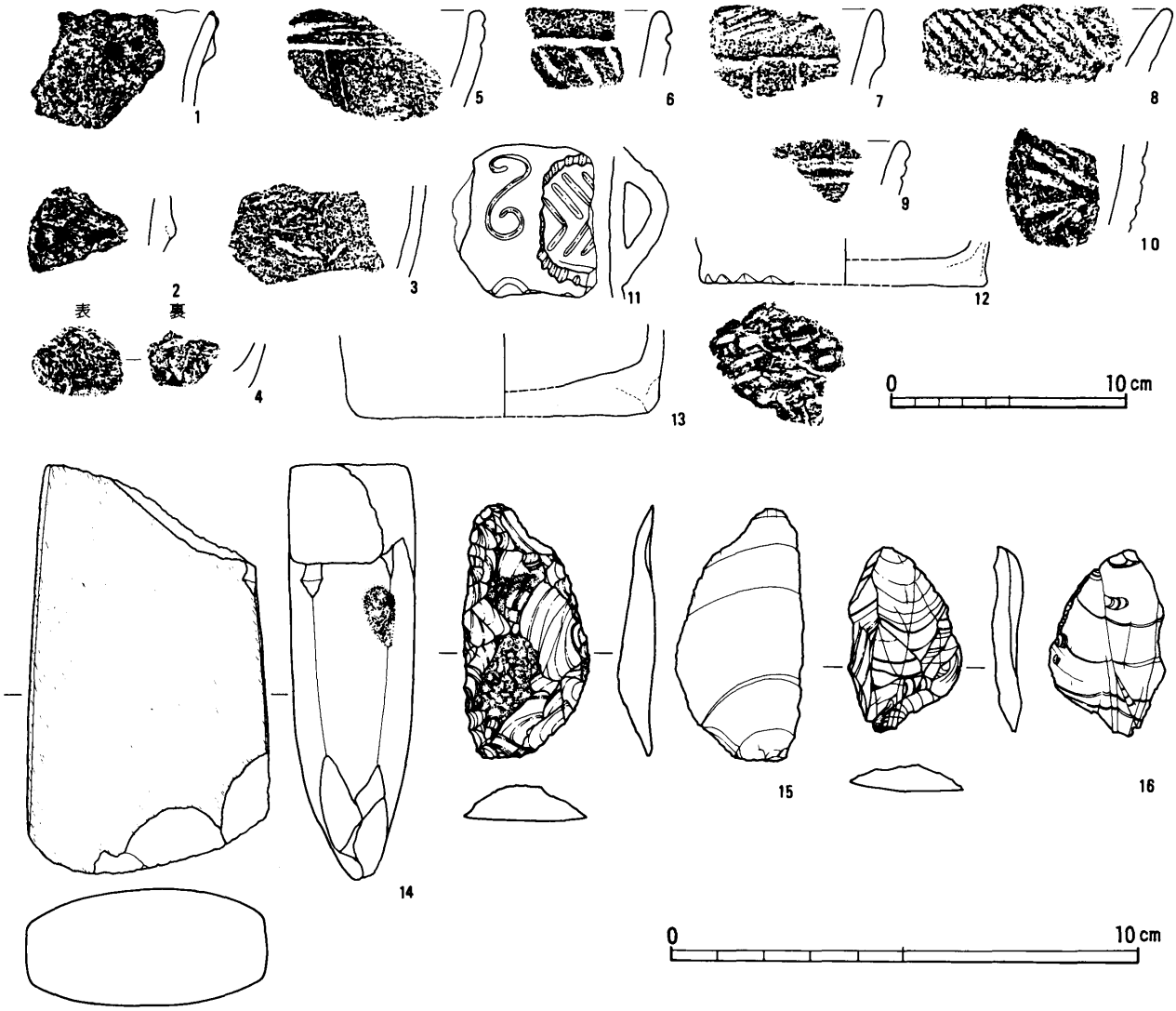
〔註〕

① 矢野健一・千葉豊氏「土器は語る－縄文土器の変遷」（『先史時代の北白川』京都大学文学部博物館　1991年）

② 中林浩氏『和泉陶邑窯の研究』　1985年

③ 赤羽一郎氏『常滑焼－中世窯の様相』（考古学ライブラリー23　1984年）

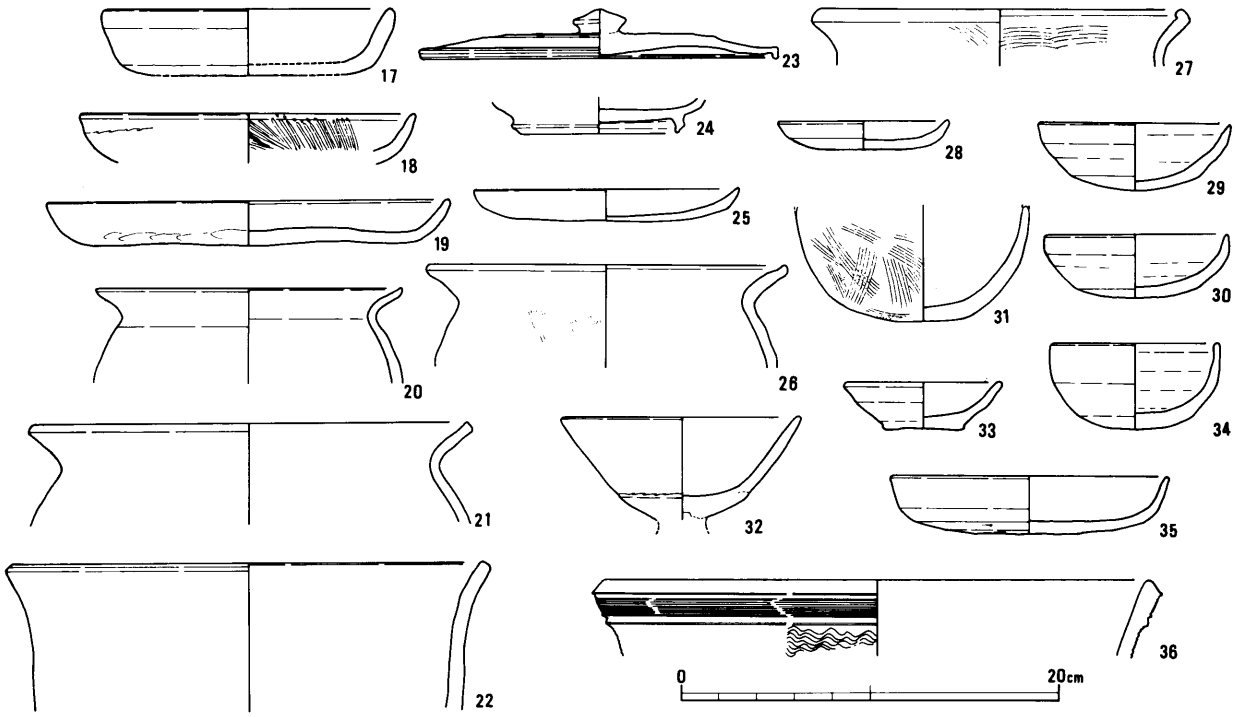
④ 前掲註②に同じ。



第20図　出土遺物実測図（1）（1～13＝1：3、14～16＝2：3）

第7表　出土土器観察表（1）

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	8－1	尖底深鉢	D7 包含層	—	—	口縁部は小波状 隆帯に押圧した圧痕	密	良	淡橙褐色	小片	
2	8－3	〃	F9 I層	—	—	刻目突帯文	密	やや良	淡橙褐色	〃	外面に媒付着
3	8－2	〃	G8 包含層	—	—	無文	密（2ミリ前後の白石混）	やや軟	赤黒褐色	〃	内面全体と外面一部に媒と繊維痕
4	8－4	〃	F9 I層	—	—	内面に条痕	密（1ミリ前後の白石・石英混）	良	赤褐色	〃	内面に媒付着
5	7－3	深鉢	E9 包含層	—	—	口縁真下に、平行沈線とその下に縦に3条1組の細い沈線	やや密（3ミリ前後の石英混）	やや軟	淡橙褐色	〃	
6	7－1	〃	C8 SH1	—	—	口縁真下に太い沈線と、その下に斜めに太い沈線	やや密（2～5ミリの白石・石英混）	良	淡赤褐色	〃	
7	7－2	〃	E9 I層	—	—	隆帯をはさんで上部は斜位の条線、下部は垂下沈線	やや粗（2ミリ前後の石多く混）	良	淡黄褐色	〃	
8	7－4	〃	C9 トレンチ	—	—	口縁部に、斜めに縄文	やや粗（3ミリ前後の石多く混）	やや軟	淡橙褐色	口縁部 1/8	
9	7－6	〃	E9 包含層	—	—	口縁真下に、深い平行沈線	密（1ミリ前後の白石混）	良	橙褐色	小片	
10	7－5	〃	E9 I層	—	—	羽状沈線	やや粗（2ミリ前後の石多く混）	良	淡橙褐色	〃	
11	6－1	〃	E9 包含層	—	—	橋状把手上にS字沈線、周りに刻目、胴部は羽状文	やや密（1～2ミリの白石・黒斑粒）	良	暗灰褐色	把手部のみ	
12	6－2	〃	F9 I層	底径 11.7	—	ナデ	密（3ミリ前後の白石・石英混）	良	暗橙褐色	底部 1/6	底部に網代跡



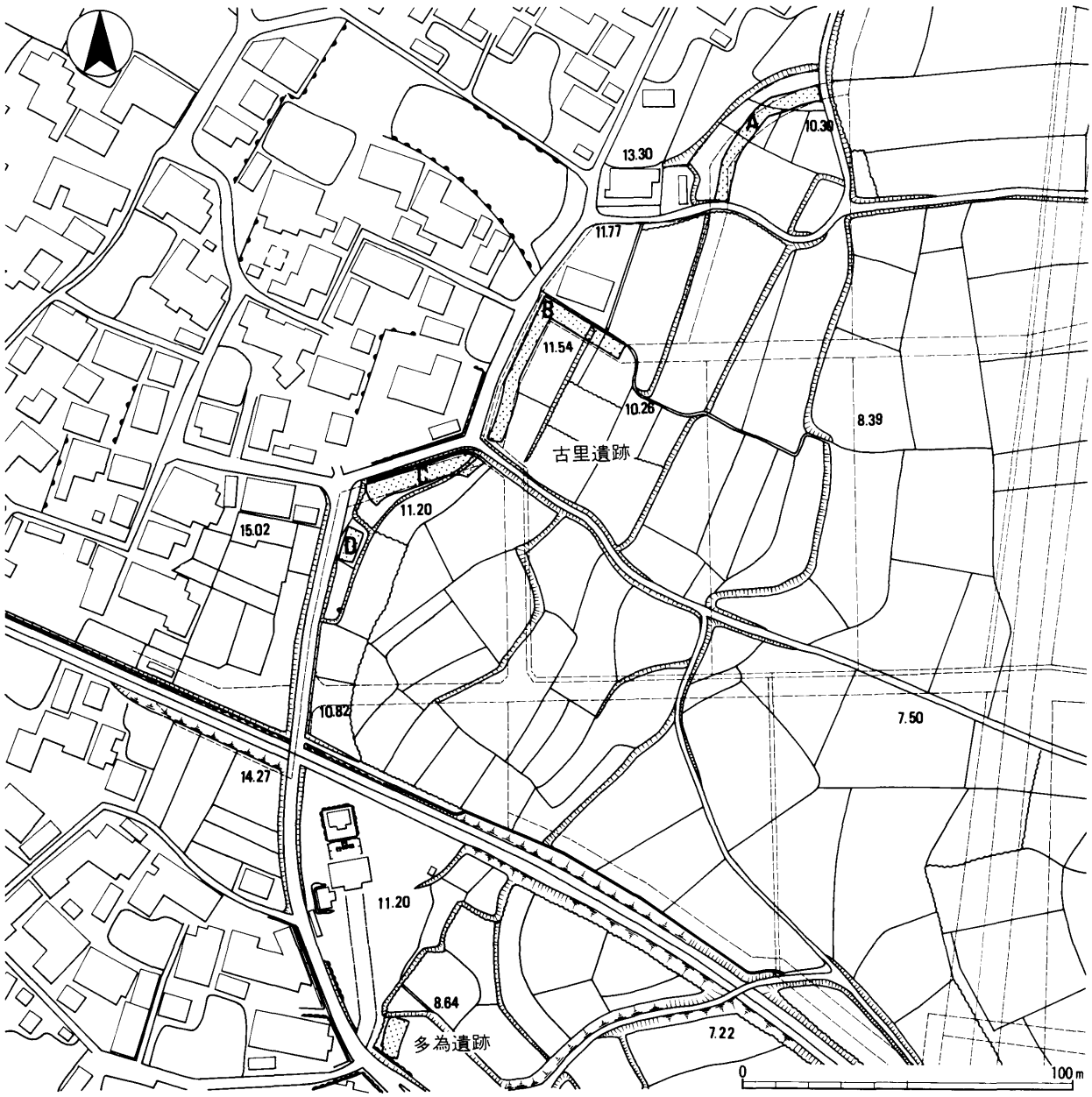
第21図　出土遺物実測図（２）（１：４）

第８表　出土土器観察表（２）

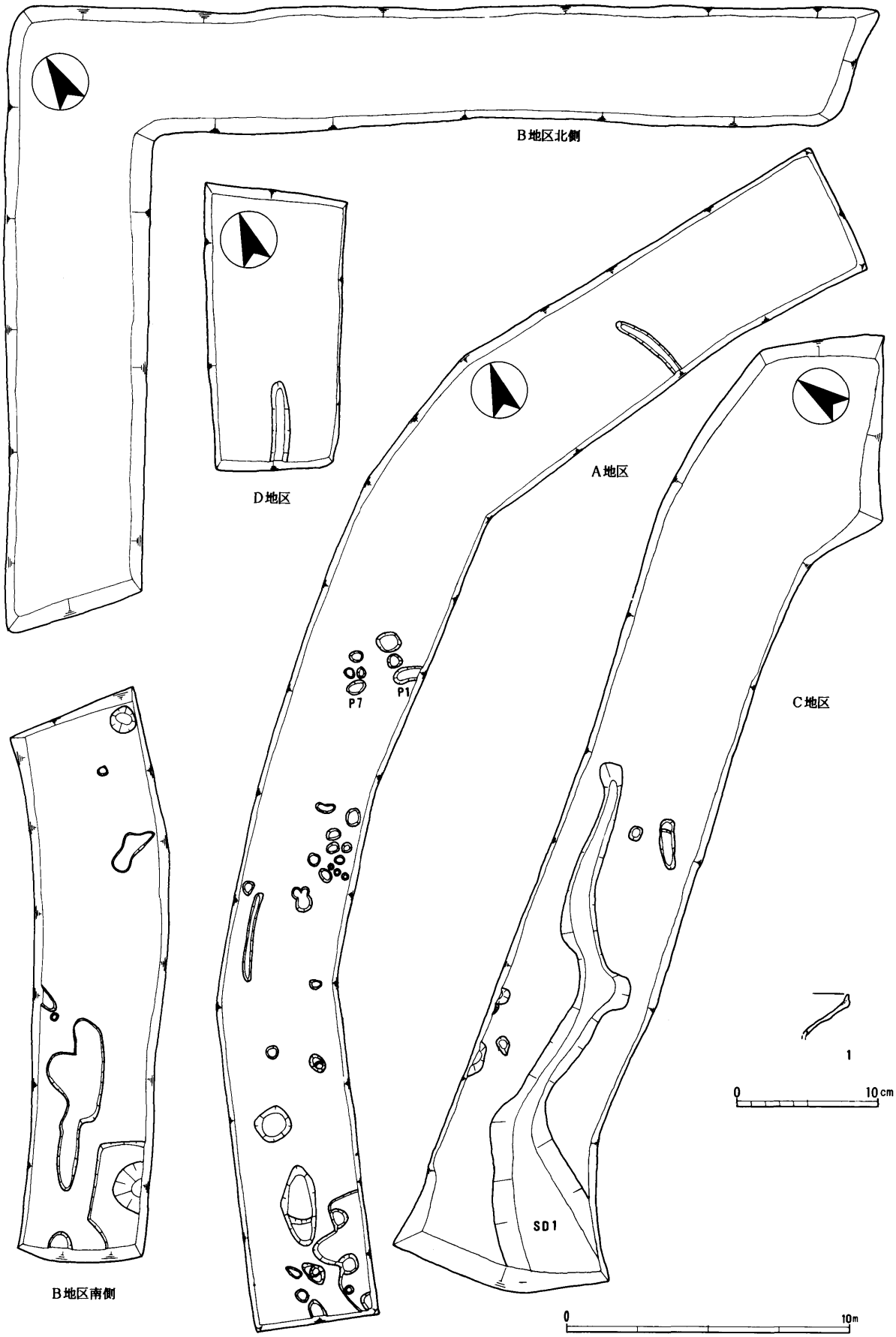
番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
13	6—3	深鉢	F9 I層	底径 12.5	—	剝離がひどくて不明	粗（3ミリ前後の白石多く混）	粗	淡橙褐色	底部 1/5	
17	2—4	土師器 杯	C8 SH1	15.0	約3.4	口縁ヨコナデ 底部外面指押さえ	やや粗（0.5ミリ前後の茶黒斑粒混）	やや良	橙	口縁 1/5	
18	1—6	土師器 皿	〃	17.4	—	口縁部ヨコナデのち内面に暗文	やや密（1ミリ前後の白石混）	良	暗黄	口頸 1/6	
19	5—2	土師器 皿	〃	21.0	2.4	ナデ、但し口縁端部ヨコナデ、底部の一部ヘラケズリ	やや粗（0.5ミリ前後の斑粒多く混）	良	明橙	5/6	内面に媒
20	1—5	土師器 甕	〃	16.0	—	口頸部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面指押さえ後刷け目？	やや密（0.5ミリ前後の白石混）	良	橙	口頸 1/6	表面摩耗
21	3—2	土師器 甕	〃	22.8	—	ヨコナデ 口頸部不明	やや密（1ミリ前後の石混）	良	淡黄	口頸 1/7	体部に媒
22	1—7	土師器 甑	〃	22.6	—	体部から口頸部は刷け目？口頸部外面ヨコナデ、体部外面はナデ	やや粗（1ミリ前後の石英・白石混）	やや軟	明橙	口頸 1/10	傾き？ 体部内面に媒
23	5—1	須恵器 杯蓋	〃	18.8	2.7	外面上部はロクロヘラケズリ、後つまみハリツケ後ナデ、他ロクロナデ	密	良	淡灰色	1/2	ロクロ右回転 口縁部に自然釉
24	1—2	須恵器 杯身	〃	高台径 8.2	—	底部内面ロクロナデ、外面ヘラケズリ後ナデ。高台ハリツケ後ナデ	密（0.1～0.3ミリの白石混）	良	淡黄灰色	底部 1/2	
25	2—1	土師器 皿	C8 SH2	14.0	1.5	剝離がひどく不明	やや粗（黒斑粒・茶斑粒多く混）	やや良	淡橙褐色	1/5	表面剝離状態
26	2—3	土師器 甕	〃	19.2	—	体部内面ヨコナデ、外面刷け目 9本1cm	密	やや軟	淡黄褐色	口頸 1/10	表面剝離状態
27	1—1	〃	E8 SH3	19.2	—	口縁内面は横方向・外面は縦方向の刷け目　4本1cm	密	良	淡橙褐色	口頸 1/5	
28	2—5	土師器 小皿	SB5	9.0	1.5	口縁ヨコナデ 但し、底部外面指押さえ	やや粗（1ミリ前後の茶斑粒多く混）	やや軟	淡黄褐色	5/7	
29	4—2	須恵器 椀	SK6	10.2	3.6	ロクロナデ、底部ヘラ切り未調整	やや粗（3ミリ前後の白石混）	やや軟	青灰色	口縁部一部のみの欠け	表面剝離状態
30	4—1	須恵器 杯身	SK6	9.5	3.3	ロクロナデ、底部ヘラ切り未調整 但し、口縁外面はロクロヘラケズリ	やや粗（0.5～3ミリの白石混）	やや軟	暗灰色	口縁端部一部のみの欠け	
31	4—4	土師器 甕	SK6	底径 4.6	—	底部から胴部にかけて刷け目 5本1cm	やや良（1ミリ前後の白石・黒石混）	やや良	赤褐色	底部～胴部の一部分のみ	口縁部が不明瞭で椀として使用の可能性も残る
32	4—3	土師器 高杯	G9 トレンチ	12.4	—	ヨコナデ	やや密（1入り前後の石英・長石混）	良	淡橙褐色	杯部のみ	表面剝離状態
33	1—4	山茶碗 山皿	D7 表土下	8.5	2.5	ヨコナデ 但し底部糸切り後ナデ	やや密（1ミリ程の白石混）	良	淡灰色	完形	内面全体～口縁部に自然釉
34	1—3	須恵器 杯？	D9 包含層	9.0	約4.6	ロクロナデ 底部外面ヘラ起こし後ナデ	やや密（1ミリ程の石英混）	良	明灰色	1/4	
35	2—2	須恵器 皿	F8 P2	14.8	3.1	ロクロナデ 但し底部外面はロクロヘラケズリ	やや粗（0.3～0.5ミリの白石多混）	やや良	淡黄灰色	3/4	ロクロ右回転
36	3—1	須恵器 甕	F5 P4	28.6	—	口頸内面から口縁端部はロクロナデ口頸外面は櫛描波状文	密（黒斑粒混）	良	灰色	口頸 1/8	

4．津市大里小野田町　古　里　遺　跡

当遺跡は、津市大里小野田町に所在する。現況は水田及び畑地である。調査期間は平成４年９月17日～10月１日で、調査面積は950m²である。調査区は、便宜上北からＡ～Ｄの４地区に分けた。調査区の基本層序は上から耕土（20～30cm）、暗褐色土（20～30cm）、黄灰色土（地山）となるが、Ｂ区の北側とＣ区の東側は地山が青灰色粘土であり、この地区には遺構はなかった。検出した遺構は、溝４条・土坑４基などであった。出土遺物は総数で整理箱に１箱で、その大半がＡ区からであった。Ｐ１からは南伊勢系の中世土師器堝片が、Ｐ７からは奈良時代の須恵器杯片が出土しており、包含層遺物からもＡ区は奈良時代から室町時代後期の遺跡と考えられる。Ｂ～Ｄ区も包含層遺物から同時期と思われるが、Ｃ区のＳＤ１からは現代の陶器片も出土しており、撹乱を受けているものと考えられる。　（石川隆郎）



第22図　調査区周辺地形図（１：2,000）



第23図　遺構平面図（1：200)、出土遺物実測図（1：4）

5．津市大里小野田町　多　為　遺　跡

多為遺跡は、津市大里小野田町に所在する遺跡である。県道三宅・一身田停車場線から２ｍ程も低い畑地にあり、遺跡の総面積は550㎡である。

今回は、平成４年度の県営ほ場整備事業に先立って、掘削を受ける排水路部分の約70㎡について調査を行った。出土遺物は、整理箱に換算して３箱であった。

(1) 遺　　構

遺構は調査区の北側半分のみに集中し、竪穴住居跡が４棟、複雑に切り合った状態で検出された。出土遺物より、ＳＨ４以外は、全て奈良時代頃の住居跡と考えられる。

ＳＨ１　やや隅丸の方形である。南北辺は3.5mだが東西辺は調査区外にあり、全体の正確な規模は不明である。深さは現況で20cm程である。南辺で主柱穴と思われる小穴を検出したが、周溝は確認できなかった。

南東隅の小穴は、或いは貯蔵穴の可能性もあるが出土遺物がなく、ＳＨ１に伴うものか否かは判断できない。北辺の中央部には焼土があり、この住居の竈跡と思われる。

ＳＨ２　やや隅丸の方形である。規模については部分的に調査区外にあるため確定し難いが、一辺４ｍ以上の竪穴住居と判断される。

主柱穴は部分的に検出できたが、やはり周溝は確認できなかった。また床面中央部のやや北寄りの位置で、若干の焼土を確認した。ＳＨ２はＳＨ１及び３を切っており、この焼土はＳＨ２ではなく、恐らくＳＨ３に伴う竈跡と思われる。北東隅の主柱穴と考えられる小穴からは、完形の土師器甕が倒立の状態で出土した。

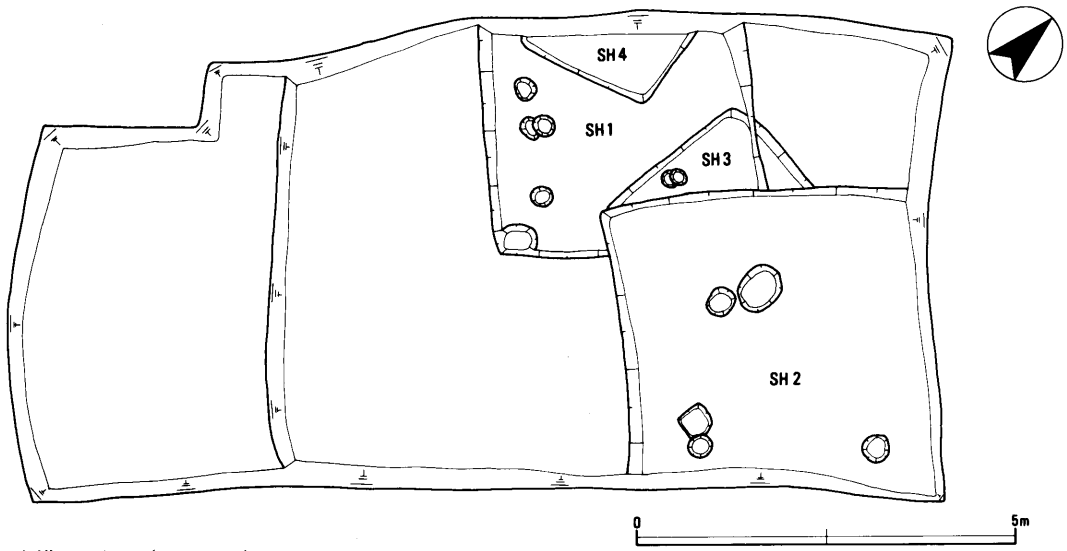
ＳＨ３　ＳＨ１及び２によって切られており、規模は全く不明であるが、隅丸方形の竪穴住居と考えられる。出土遺物も殆どなく、土師器甕の小片が数点であった。

ＳＨ４　大部分が調査区外にあるうえＳＨ１によってかなり削平をうけており、詳細については不明である。ただ弥生時代の土器の底部が出土しており、この時代の住居跡の可能性が強い。

(2) 遺　　物

土師器甕(1・2)　１は、ＳＨ２の北東隅の主柱穴から、倒立の状態で出土した。完形であり、かつ出土状況から推して廃棄されたものではなく、故意に埋められたものと判断される。法量は、口径15cm、器高17cmである。

口縁は短く、比較的緩やかに外反する。内外面はヨコナデされ、外面端部には明瞭ではないが面を持つ。胴部外面は、縦方向のハケメを施した後、底部



第24図　遺構平面図（１：100）

付近から胴部半ばまで掻き上げる様にヘラケズリされている。内面は横方向のハケメをやや乱雑に施した後底部付近を強くナデている。この様な調整は、伊勢・伊賀の甕に認められる特徴である。

2はＳＨ３からの出土である。他にも数点出土しているが、図示できたのはこの１点のみである。

口縁端部はやや三角形状となり、強い面を持つ。内面には横方向のハケメが施されている。

土師器壷(3・4)　いずれもＳＨ４からの出土である。

4は口縁外面に疑凹線状の文様を施し、棒状浮文を付している。小片であるため詳細については明瞭ではないが、弥生時代後期頃に比定しうる。

3は弥生土器の壷の底部と考えられる。底部外面には、作成時に着いたと考えられる凹状の痕跡がある。植物の葉脈の様にも見えるが、断定できない。

土師器杯(5・6)　いずれもＳＨ１からの出土である。法量は、5が口径13.6cm、器高3cm、6が口径13.6cm、器高4.7cmである。

5の口縁は内外面がヨコナデされ、弯曲せずやや外傾ぎみに立ち上がっている。器壁は非常に厚い。

6はロクロ成形され、外面底部付近にはヘラケズリが施されている。焼成も非常に良好で、当該期の土師器杯に比べ、異質な感がある。

須恵器杯(7～10)　いずれもＳＨ２よりの出土である。

7は、口径12.2cm、器高4cmで、歪みが大きい。ロクロで成形されており、口縁は直線的にやや外傾している。底部は平坦で、ヘラギリの後部分的にナデが施されている。

8は口径11cm、器高4cmで、若干小型である。器壁は薄く、焼成も悪い。口縁はやや外反し、底部は丸みを帯びている。

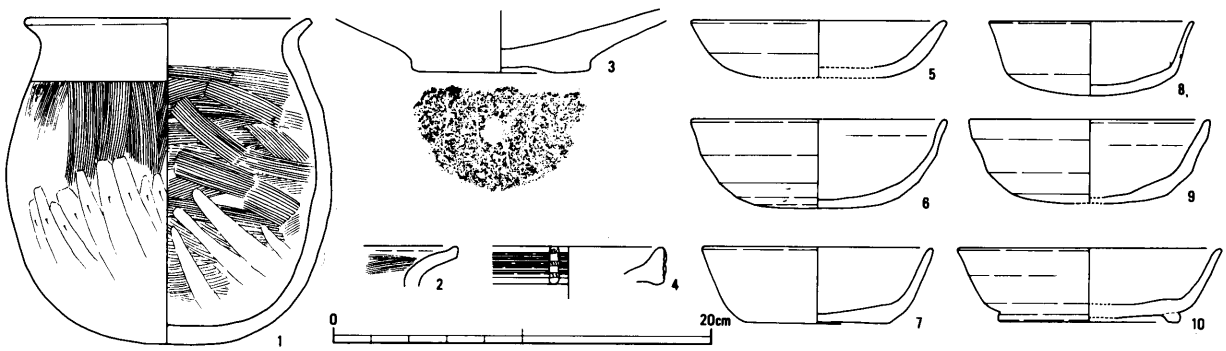
9の口径は12.8cm、器高は4.4cmである。口縁はやや内弯ぎみである。器壁は比較的厚いが、底部のみ非常に薄くなっている。

10は口径14cm、器高3.9cmで、ハリツケの高台を持つ。口縁は直線的にやや外傾して立ち上がっている。焼成は良好で、外面には薄く自然釉が掛かっている。

(3) 結　　語

前述したように、今回の調査は僅か70m²にしか過ぎなかったが、遺構・遺物共に調査面積に比して多く、当遺跡が弥生時代から奈良時代にかけての良好な集落遺跡であることが判明した。また、当遺跡の総面積は現在550m²とされているが、大里睦合町の集落の広がる丘陵の北端に立地しているところから、当然この丘陵部にも更に中心的な遺跡のある可能性を指摘しうる。

ところで、今回の調査で設定した調査区は、多為神社の参道に接する形で設けられた。現在の多為神社は近世には「正天神・正八王子」と呼ばれ、山田井・野田・小野田の三ヶ村の持合であったと言う。ただ『延喜式』には伊勢国安芸郡として「多為神社」の名が見えており、地名からも現在の多為神社を式内社多為神社に比定されている。しかし、今回の調査によって現在の多為神社境内へも確実に遺跡が広がっていることが考えられるところから、式内社多為神社乃至はその母体となった社自体は、厳密な意味において他の位置に有ったものとも考えられるのである。　　（小林　秀）

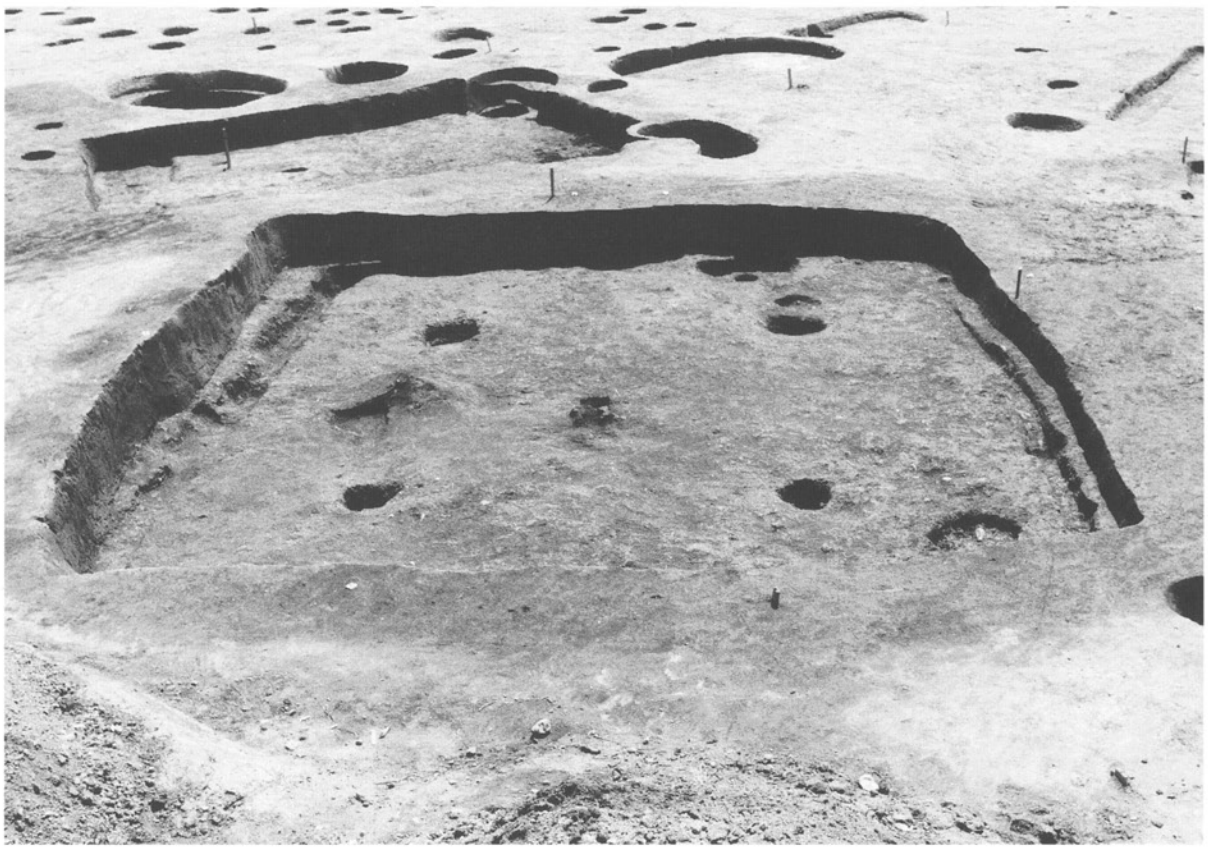


第15図　出土遺物実測図（１：４）

調査区全景

ＳＨ１（西から）

ＳＨ１遺物出土状況

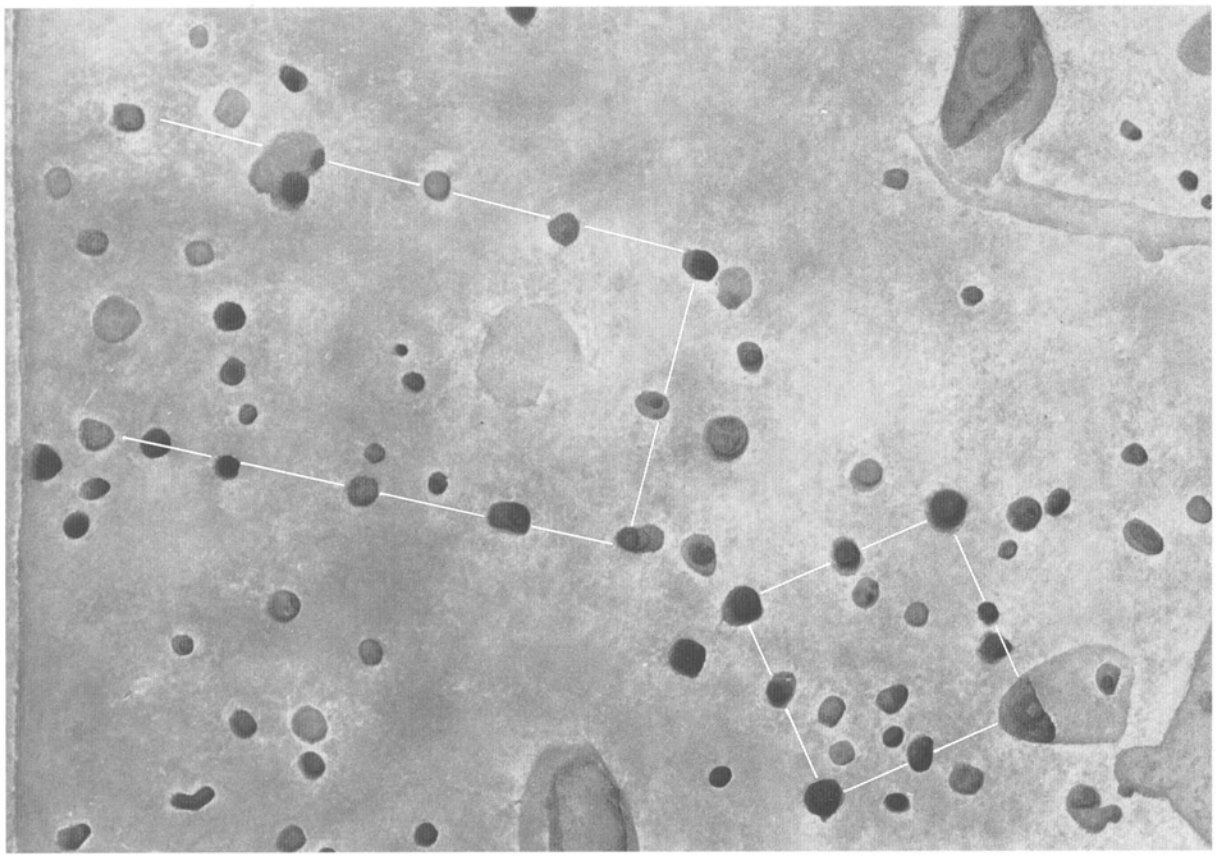


ＳＨ40（西から）

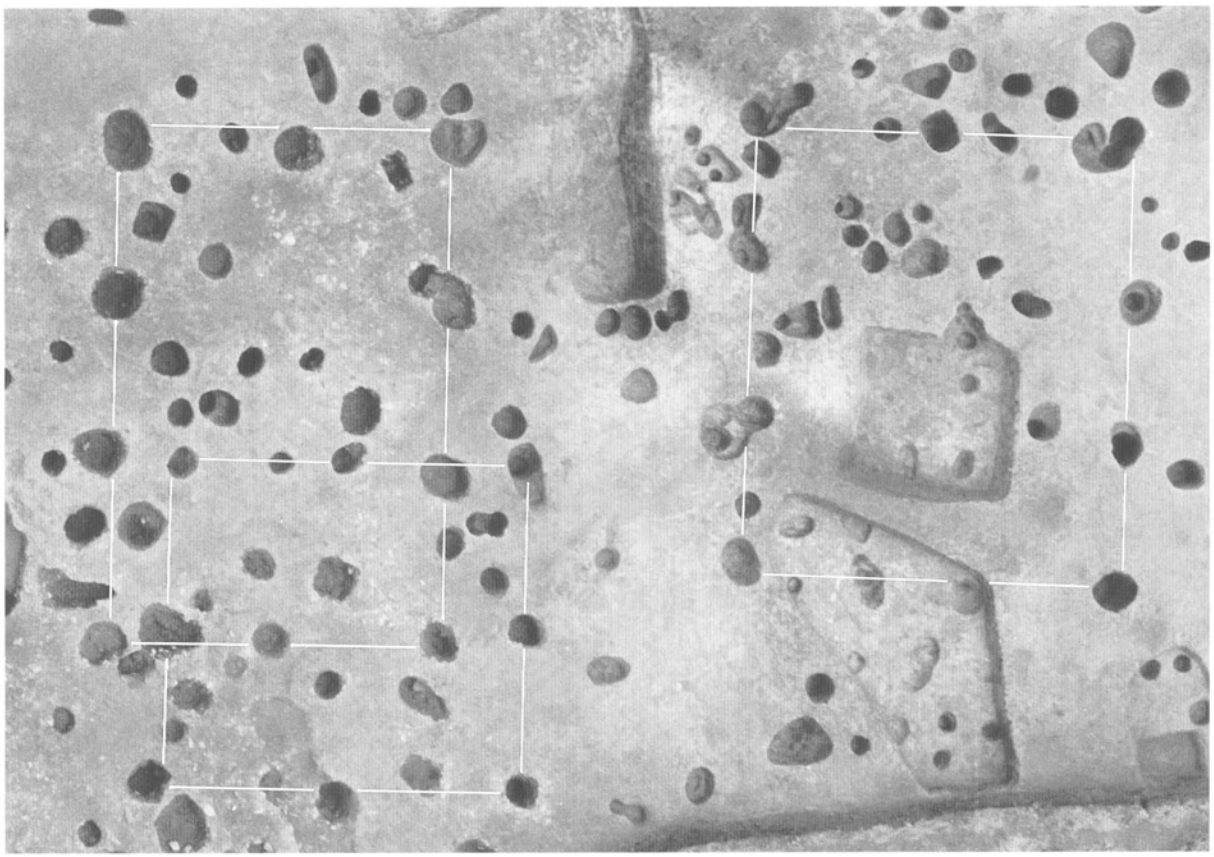
ＳＨ６（東から）

SH54（南から）

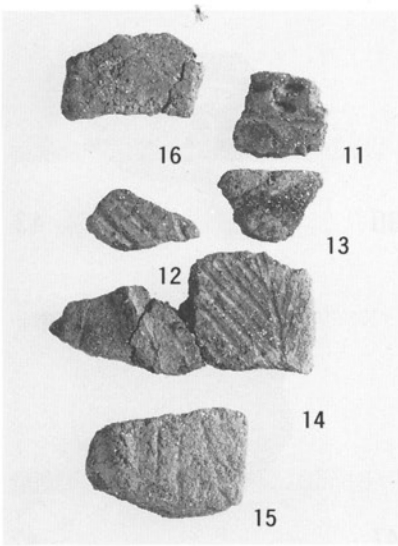
SH4（南西から）

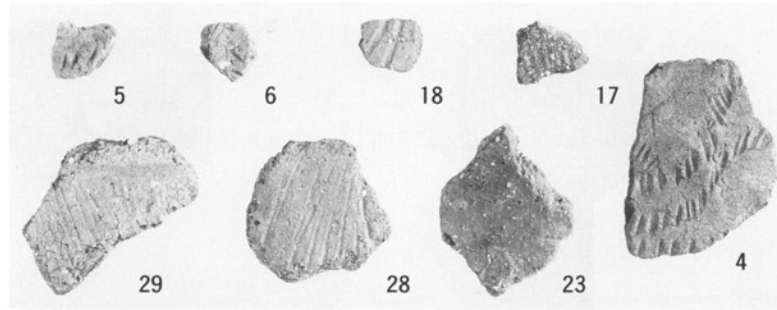


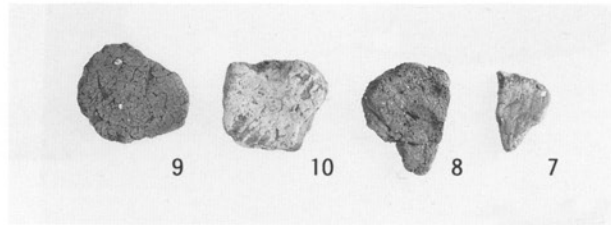
ＳＨ77・78



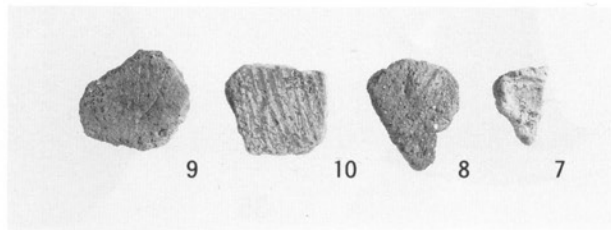
ＳＨ79・86・81



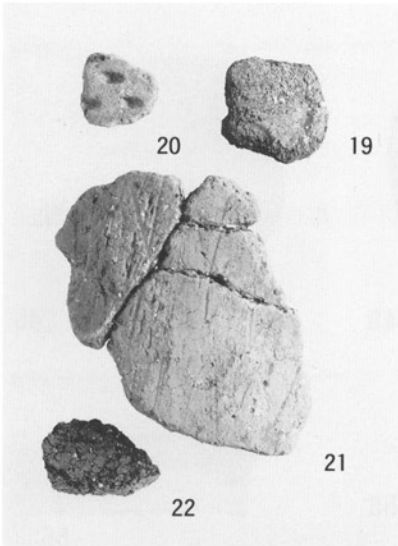


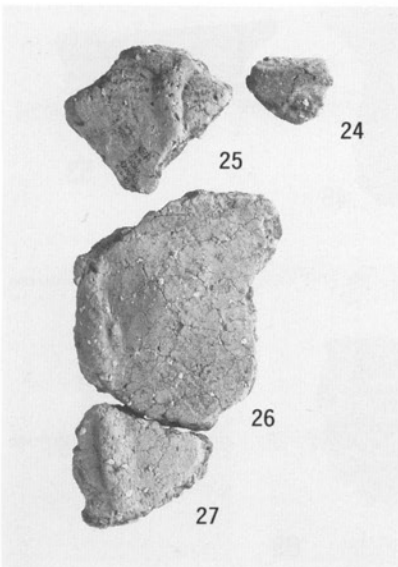


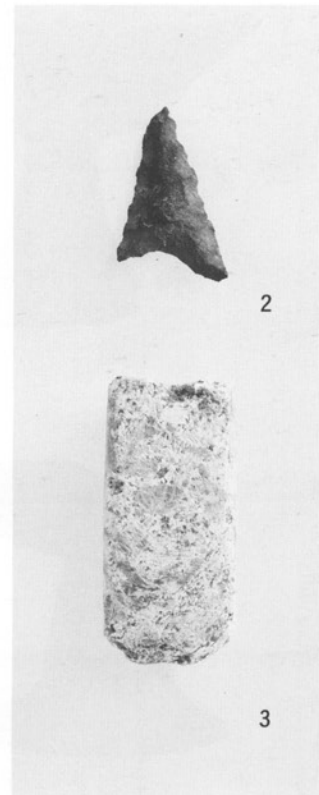
表



裏





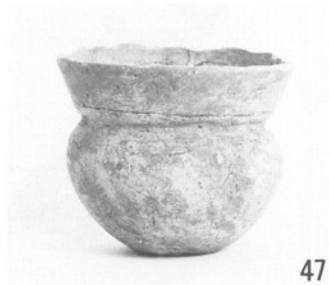


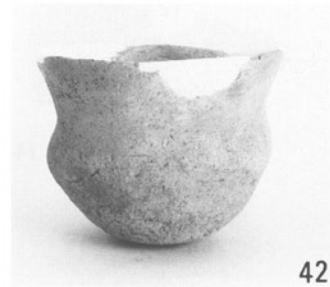
出土遺物（1～3は1：1、4～29は1：3）

34

30

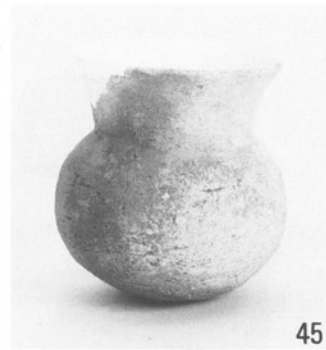
43


47

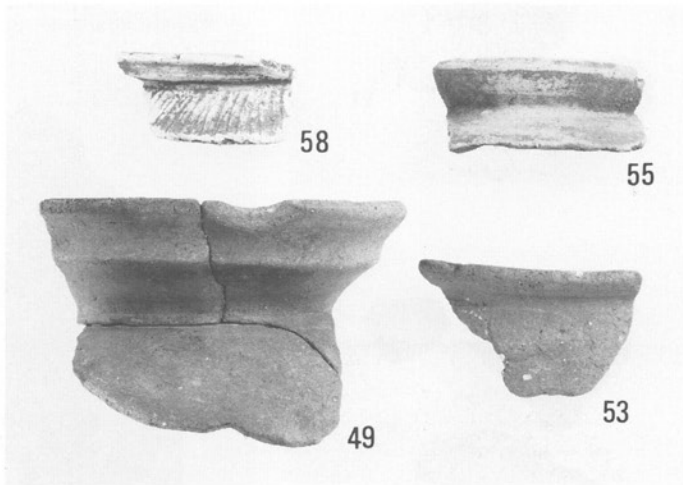

42

35

48


45

81

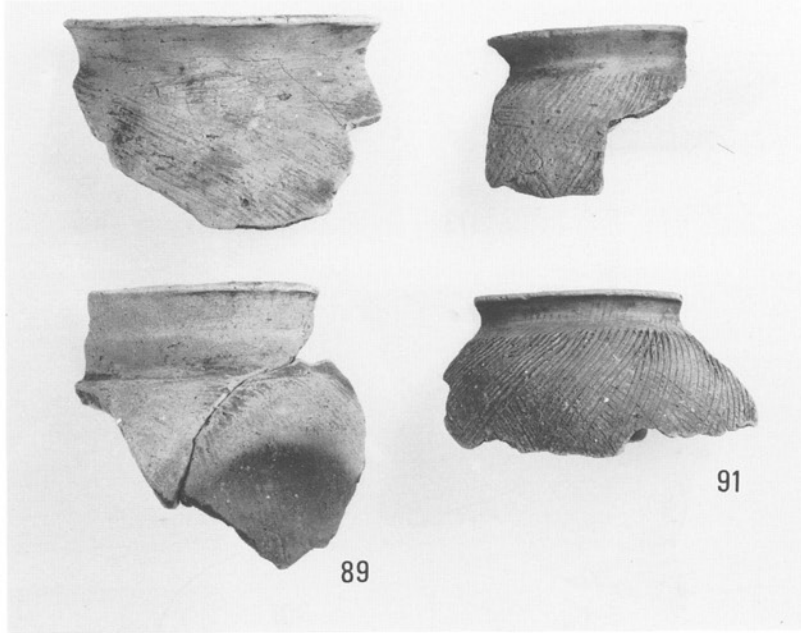

58
55
49
53

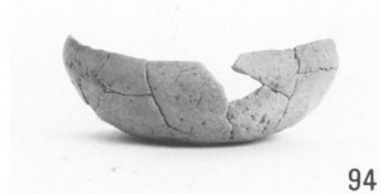
60

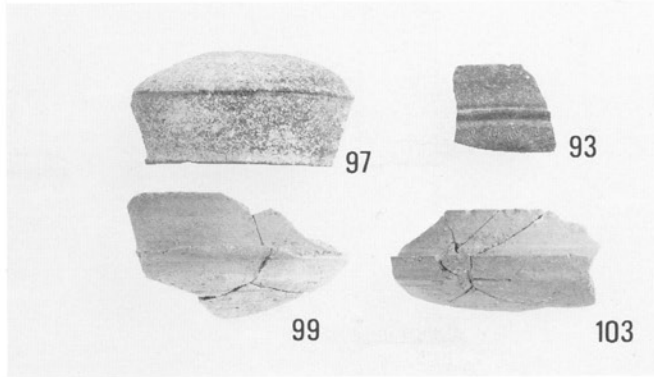
63

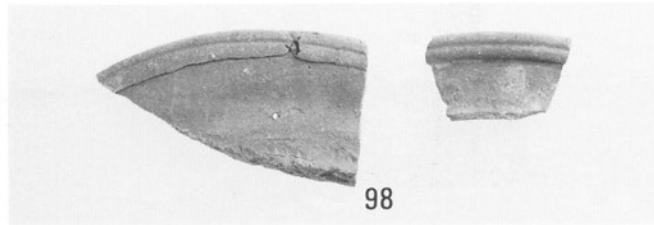
69

出土遺物（１：３）

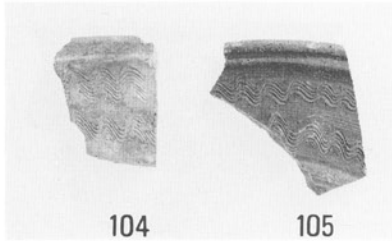


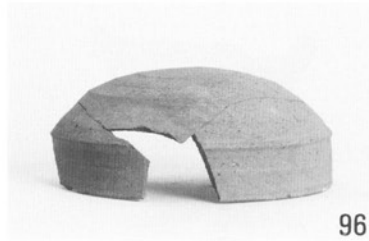


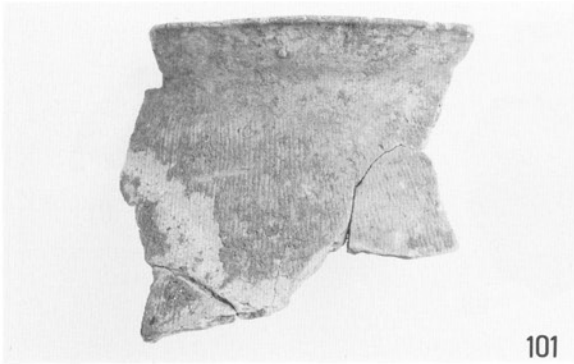




出土遺物（１：３）

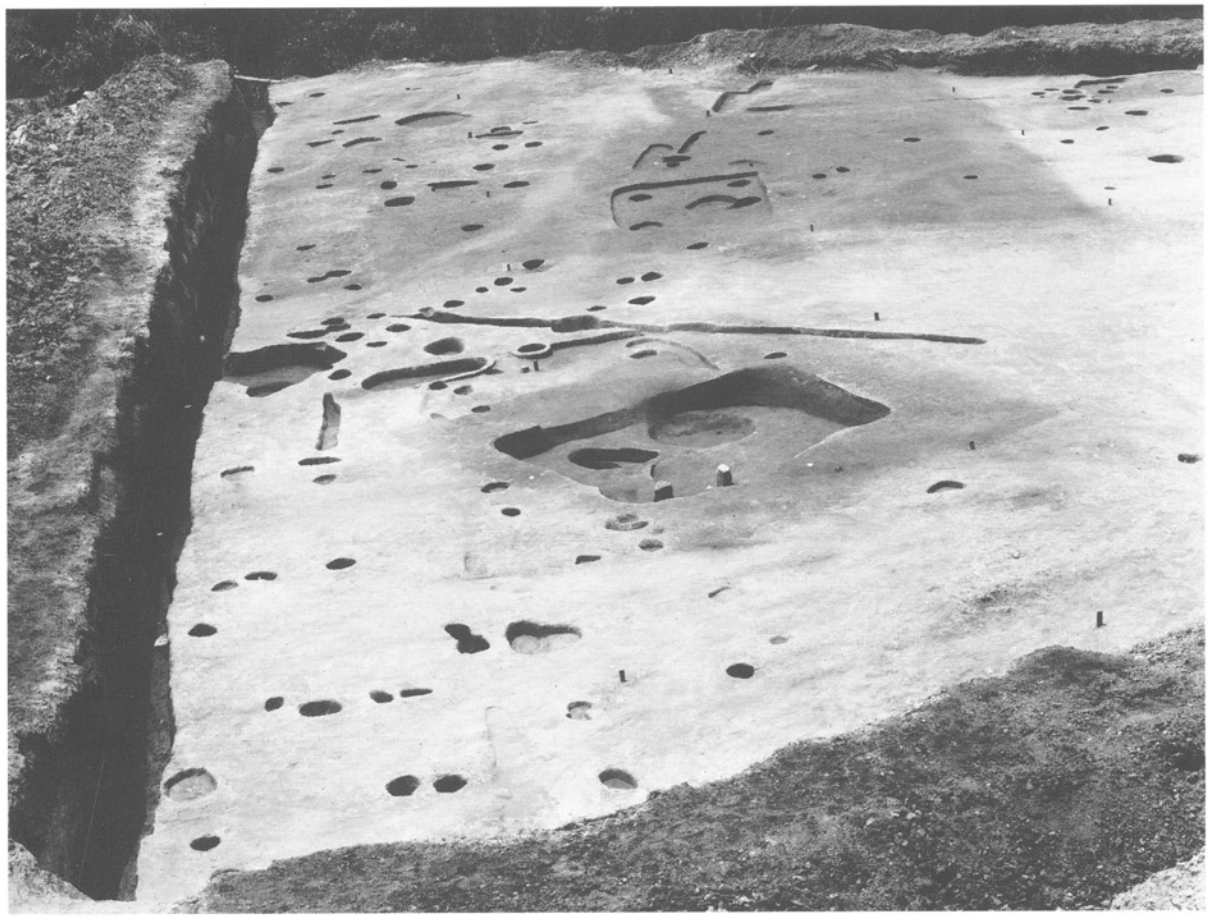






出土遺物（１：３）

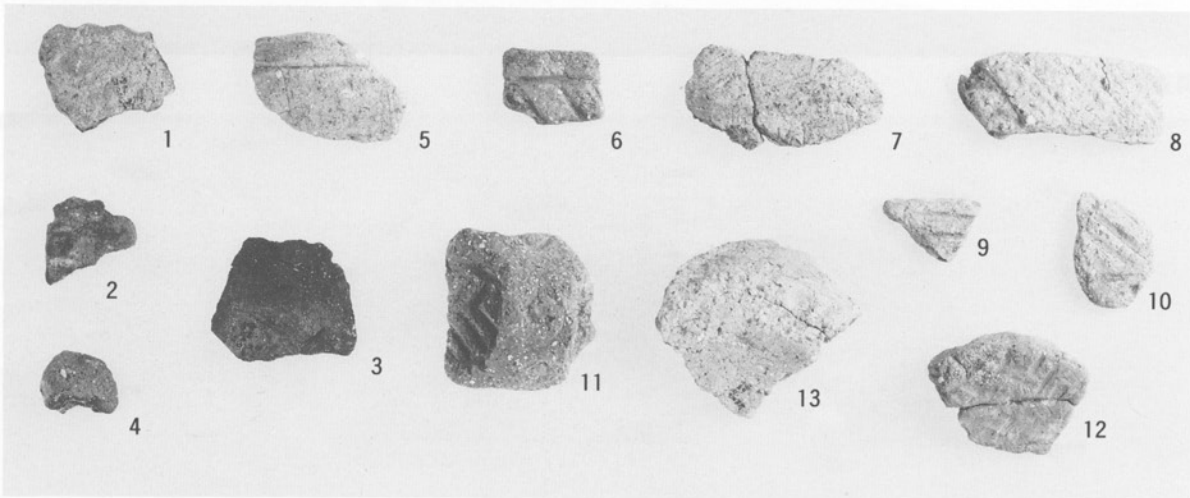
航空写真（西上空より）

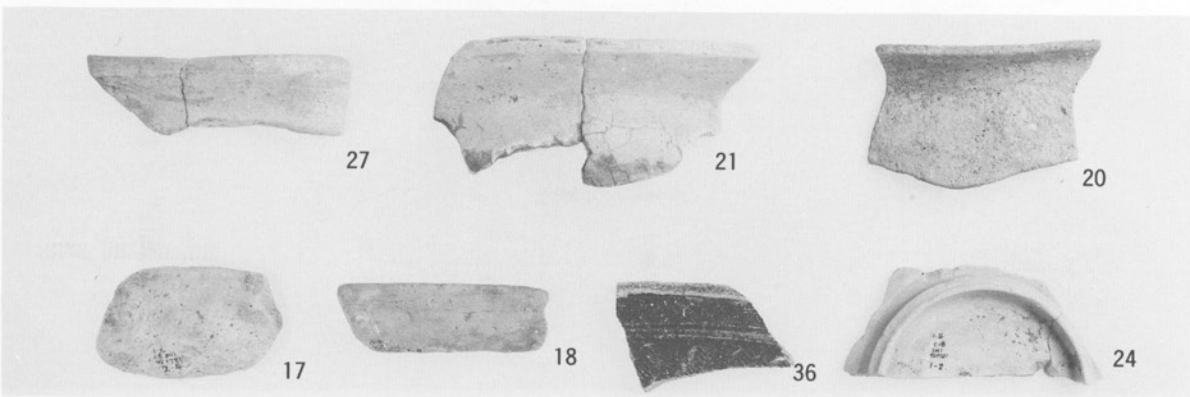


調査区全景（北東から）

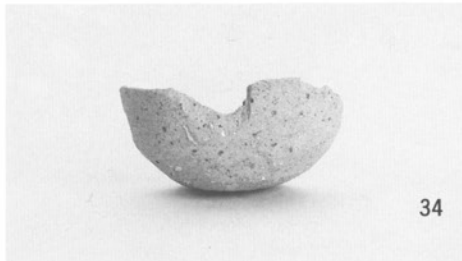
ＳＨ１（西から）

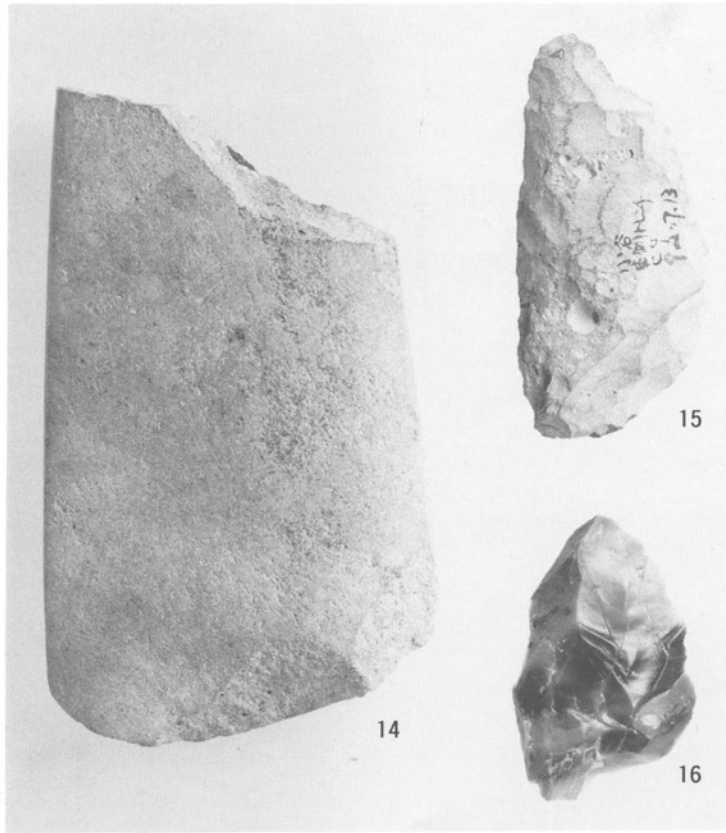
ＳＨ１竈周辺出土状況





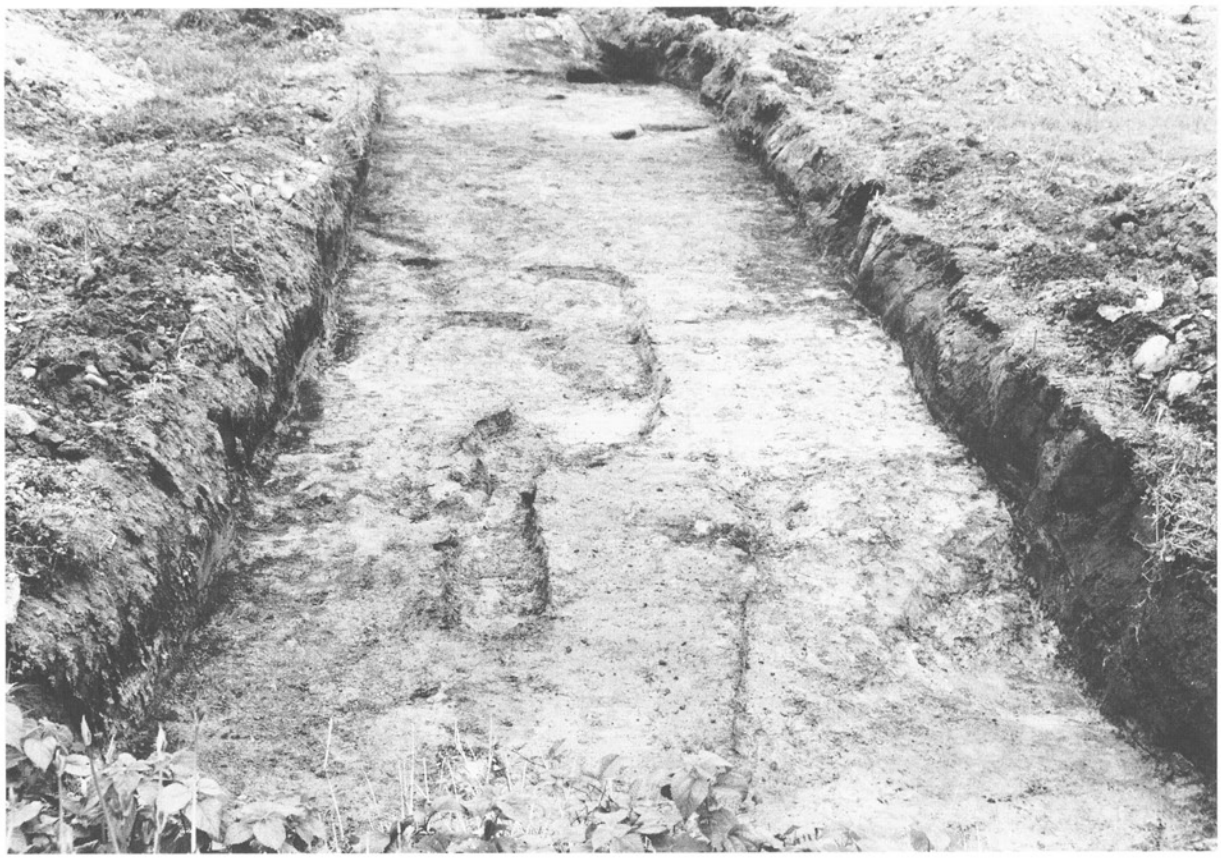
出土遺物（１：３）



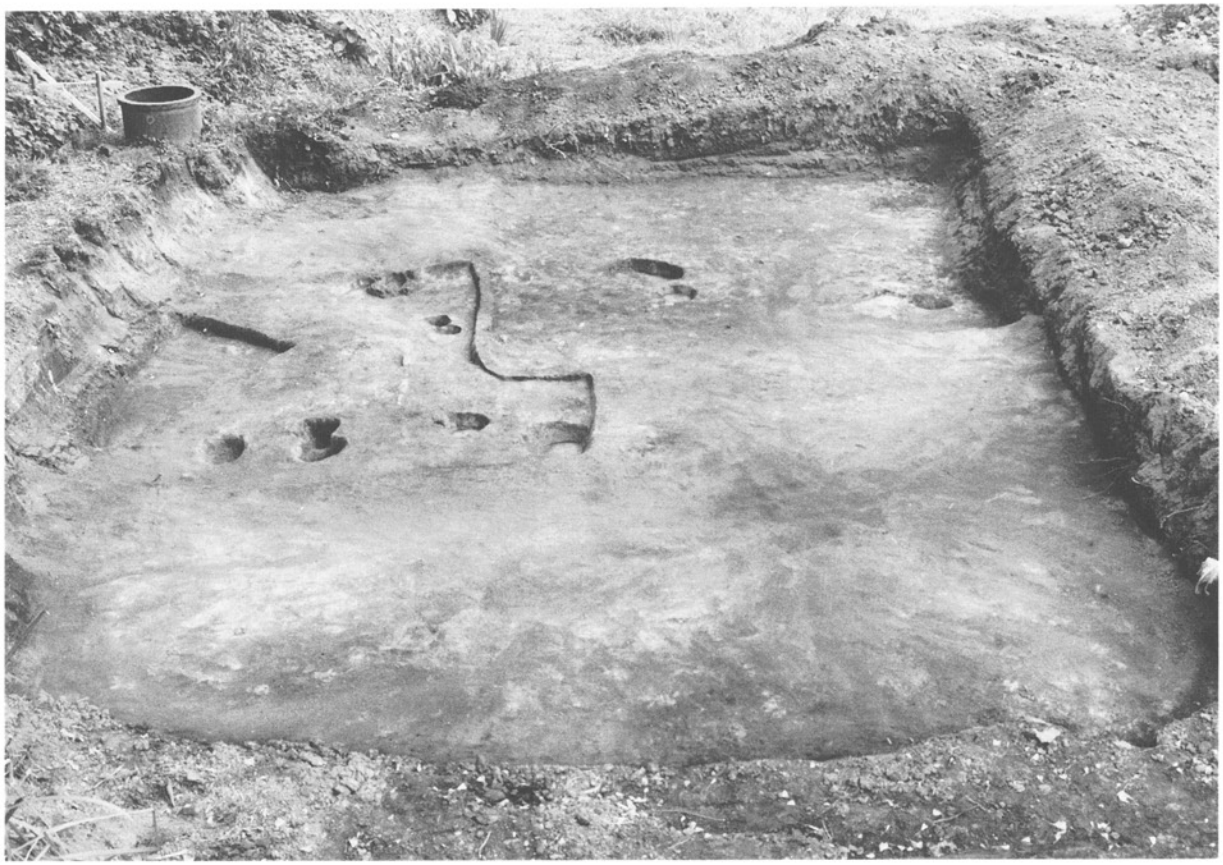


出土遺物（19～35は１：３、14～16は１：１）

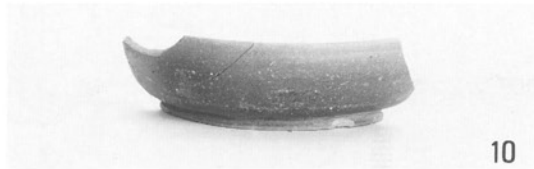
Ａ地区（北から）



Ｂ地区（南から）



調査区全景（南から）



出土遺物（1：3）

Ⅲ　芸濃町椋本　椋本南方遺跡

1．位置と歴史的環境

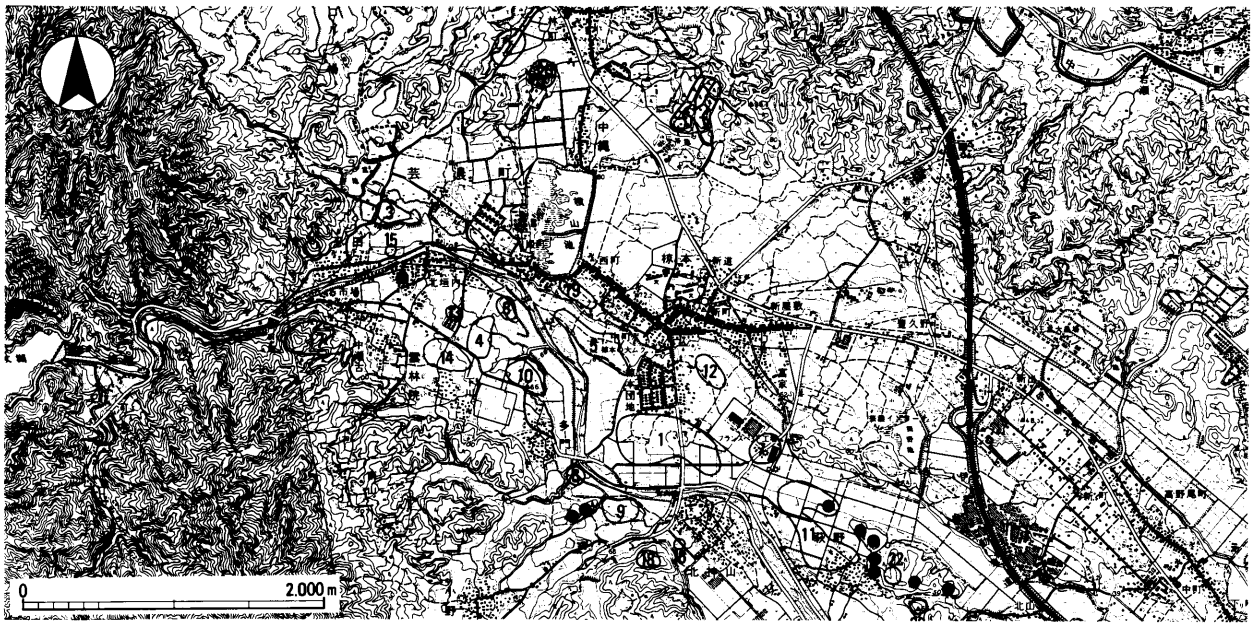
椋本南方遺跡は、鈴鹿山脈錫仗ケ岳付近を源流とする安濃川中流域左岸の標高54m前後の河岸段丘低位面に立地し、行政上は安芸郡芸濃町大字椋本字森・川原・響野、大字北神山字川向に所在する。

遺跡範囲は東西約200m、南北245mの規模で、約49,000m²の面積をもつ。昭和62年度県営ほ場整備事業に伴い、水路部分を中心に約4,800m²の調査を実施している。調査区はA～I区に分かれ、奈良～平安時代前期の竪穴住居12棟、掘立柱建物1棟、鎌倉時代の掘立柱建物5棟、溝・土坑等が検出されており、包含層からは縄文時代後期の土器片も出土している。[1]

今回の調査は平成4年度県営ほ場整備事業に伴うものであり、水路部分を中心に約730m²を調査した。調査区はA～F区の6ヶ所にわかれる。

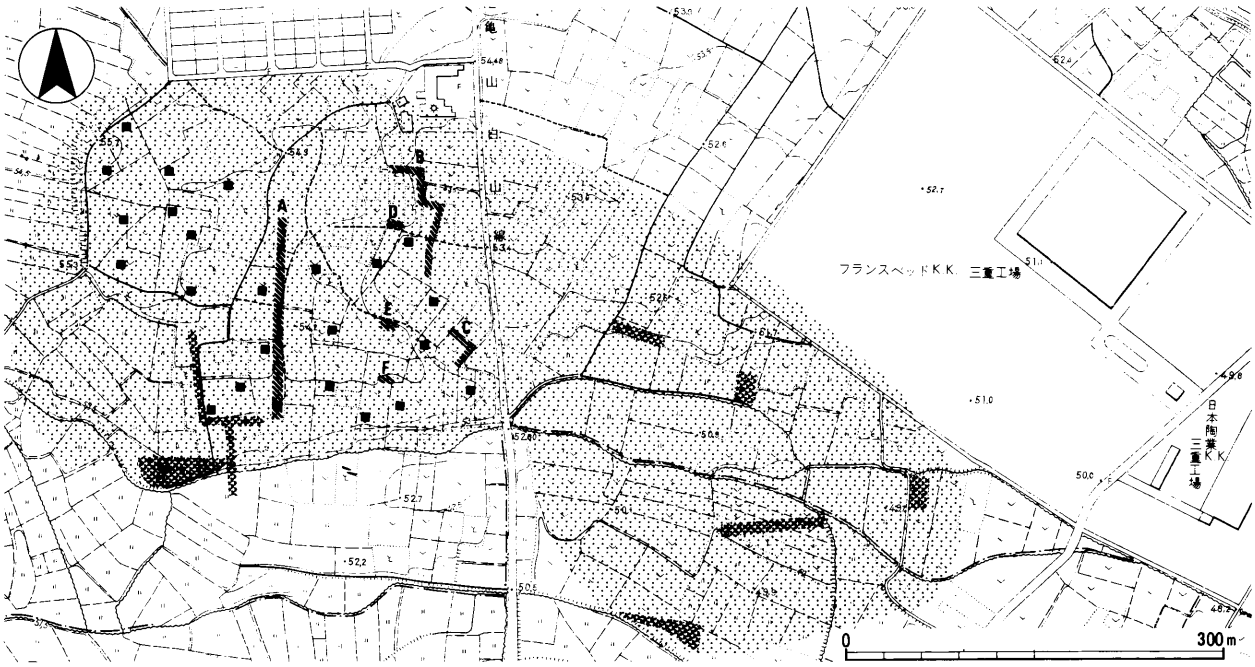
安濃川流域には、縄文時代から近世にかけての遺跡が幅広く分布している。椋本南方遺跡(1)周辺の遺跡を時代を追って概観してみる。

安濃川流域における旧石器時代の遺跡は、現在のところ確認されていない。縄文時代に入っても芸濃町を含め安濃川流域では、最近まで土器を伴出する良好な遺跡はほとんどなく、上新田遺跡(2)・忍田松山遺跡(3)で石鏃等が出土しているのみであったが、平成3年度、芸濃町教育委員会により発掘調査された雲林院青木遺跡(4)では、中期の埋甕と思われるものや、後期の中津式土器が多数出土した。また平成3年度に発掘調査された大石遺跡(5)からは、縄文時代中期後半の竪穴住居3棟、土坑5基、埋甕1基が検出され、中期後半から終末に比定される遺物が整理箱で40箱程出土している。[2]



1．椋本南方遺跡　2．上新田遺跡　3．忍田松山遺跡　4．雲林院青木遺跡　5．大石遺跡　6．椀田遺跡
7．馬屋町遺跡　8．栢井戸遺跡　9．多門遺跡　10．北奥遺跡　11．松山遺跡　12．野垣内遺跡
13．巾遺跡　14．下川遺跡　15．興遺跡　16．里内遺跡　17．雲林院城跡　18．前山城跡
19．野呂氏館跡　20．林城山城跡　21．忍田城跡　22．萩野城跡　23．岡本城跡　●：古墳

第26図　遺跡位置図（1：50,000）（国土地理院『椋本』1：25,000より）



第27図 遺跡周辺地形図（１：6,000）　遺跡範囲　平成４年度調査区　昭和62年度調査区　■試 掘 坑

第28図　調査区周辺地形図（１：2,000）

弥生時代では、椀田遺跡(6)・馬屋町遺跡(7)・栢井戸遺跡(8)・多門遺跡(9)・北奥遺跡(10)など後期の遺跡が多く確認されているが、椀田遺跡からは中期の土器が表採されており、この時期に弥生時代人による開発が行われ出したと考えられる。

古墳時代においては後期の円墳が数基存在するが、下流地域に比べてその分布密度は希薄である。

律令時代、この地域は伊勢国安濃郡として編成され、条里制が施行された。椋本の集落は「四天王文書」によると、二十条の一の「比ノ山里」に相当するようである。椋本南方遺跡・忍田松山遺跡・松山遺跡(11)では、奈良・平安時代の遺構・遺物が確認されている。

鎌倉時代にはこの地域にも地頭が補任された。それは美濃夜神社蔵の寛元2年（1244）の棟札に、忍田・生原・雲林院・椋本4ケ村の地頭名が記されていることからもわかる。また『神鳳抄』からは、忍田等に御厨の存在が確認できる。[3] 集落の存在は、椋本南方遺跡・大石遺跡・忍田松山遺跡・松山遺跡・巾遺跡(12)、野垣内遺跡(13)・下川遺跡(14)・興遺跡(15)・里内遺跡(16)に認められ、低位段丘面の開発が一層広く進んだものと考えられる。

戦国時代安濃・庵芸郡は、鎌倉時代に来往し現在の美里村長野に本拠をおいた長野工藤氏がおさえ、雲林院・細野・草生・家所・分部などの被官を領内に配し、芸濃町の大半は同氏の勢力下となっていた。一方、鈴鹿・河曲郡は伊勢平氏の子孫を称する関氏が支配しており、芸濃町林地区は、長野工藤氏と関氏の勢力が接する所であったらしい。現在、この地域に存在が確認されている中世城館もこの状況下で理解すると、長野工藤氏の一族雲林院氏とその被官等の城館と推定できるものとして、雲林院城跡(17)・前山城跡(18)・野呂氏館跡(19)があり、関氏の城館としては林城山城跡(20)を想定することが出来る。他には忍田城跡(21)・萩野城跡(22)や、所在地が確定されていない椋本城跡がある。また岡本城跡(23)は、資料を欠き憶測の域を出ないようであるが、元久元年（1204）伊賀・伊勢の平氏の余党が一斉に蜂起したといわれる「伊勢国三日平氏の乱」で、幕府から平氏追討の命を受けた平賀朝雅の攻撃を受けたといわれる岡八郎貞重の城跡とする説がある。[4]

このような中世城館も、織田信長の伊勢侵攻とその余波の中でしだいに姿を消し始め、その後の近世への歩みと共に破棄されてゆく。近世以降、椋本周辺は伊勢別街道の宿場町として発展し、現代に至っている。

2．遺　　構

農業基盤整備事業に伴う配水路部分の調査であり、A～F地区について調査を実施した（第28図）。以下、主な遺構を各地区ごとに報告する。その他の遺構については、第9表の土坑一覧表、第10表の溝一覧表を参照されたい。

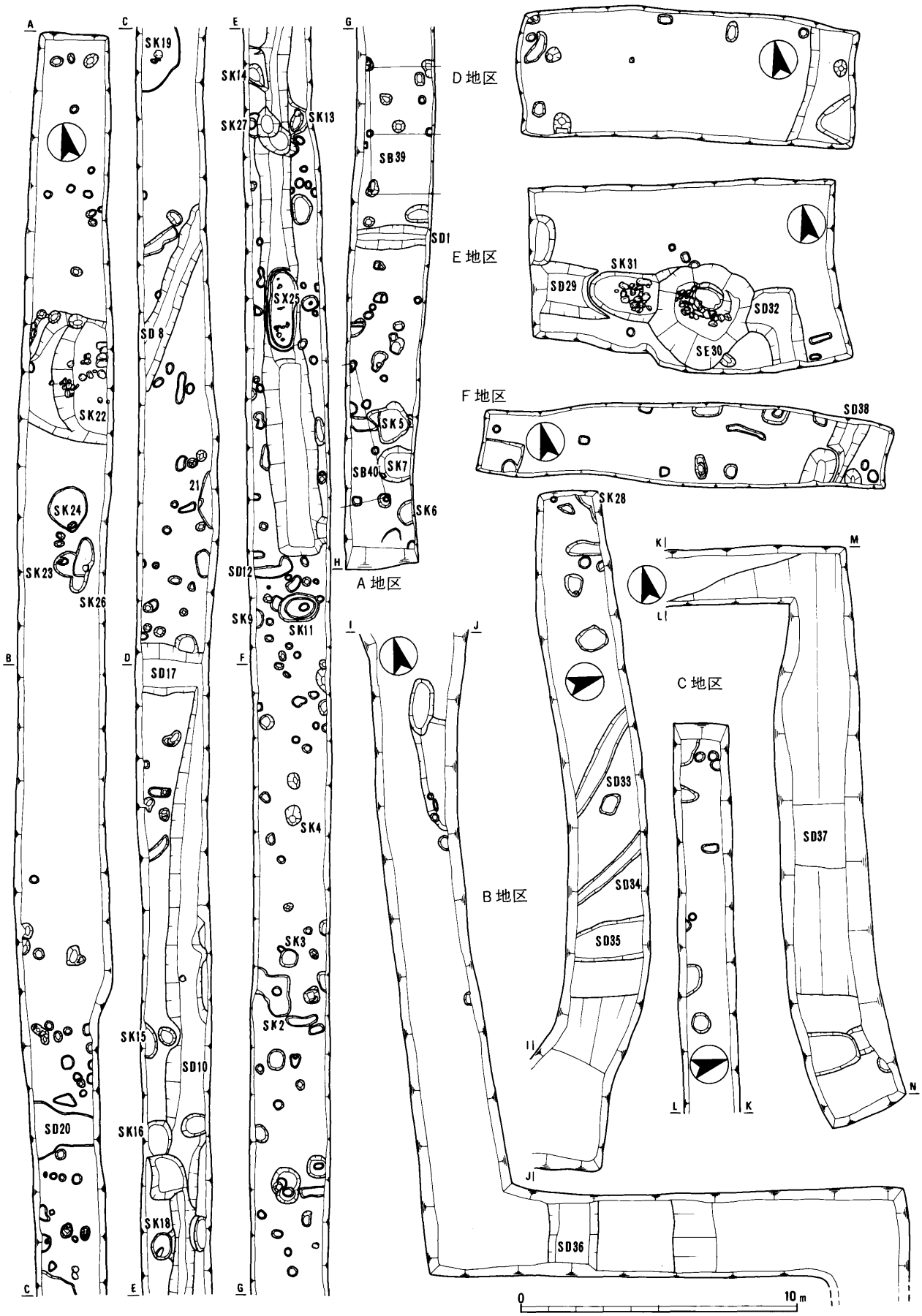
（1）A地区の遺構

調査面積は約330m²である。土層の基本層序は上から第一層；黒色土（耕土）、第二層；暗茶色土（床土）、第三層；黒褐色（遺物包含層）、第四層；黄褐色土（地山）であり、耕土から地山までの深さは50～80cmである。包含層出土の遺物は土師器皿・鍋・山茶椀などの中世遺物が大部分を占めるが、縄文時代中期と思われる土器の破片4点も出土している。検出された遺構は、平安時代末～鎌倉時代中期の掘立柱建物2棟・溝4条・土坑墓1基・土坑14基と、時期不明の溝2条・土坑4基である。

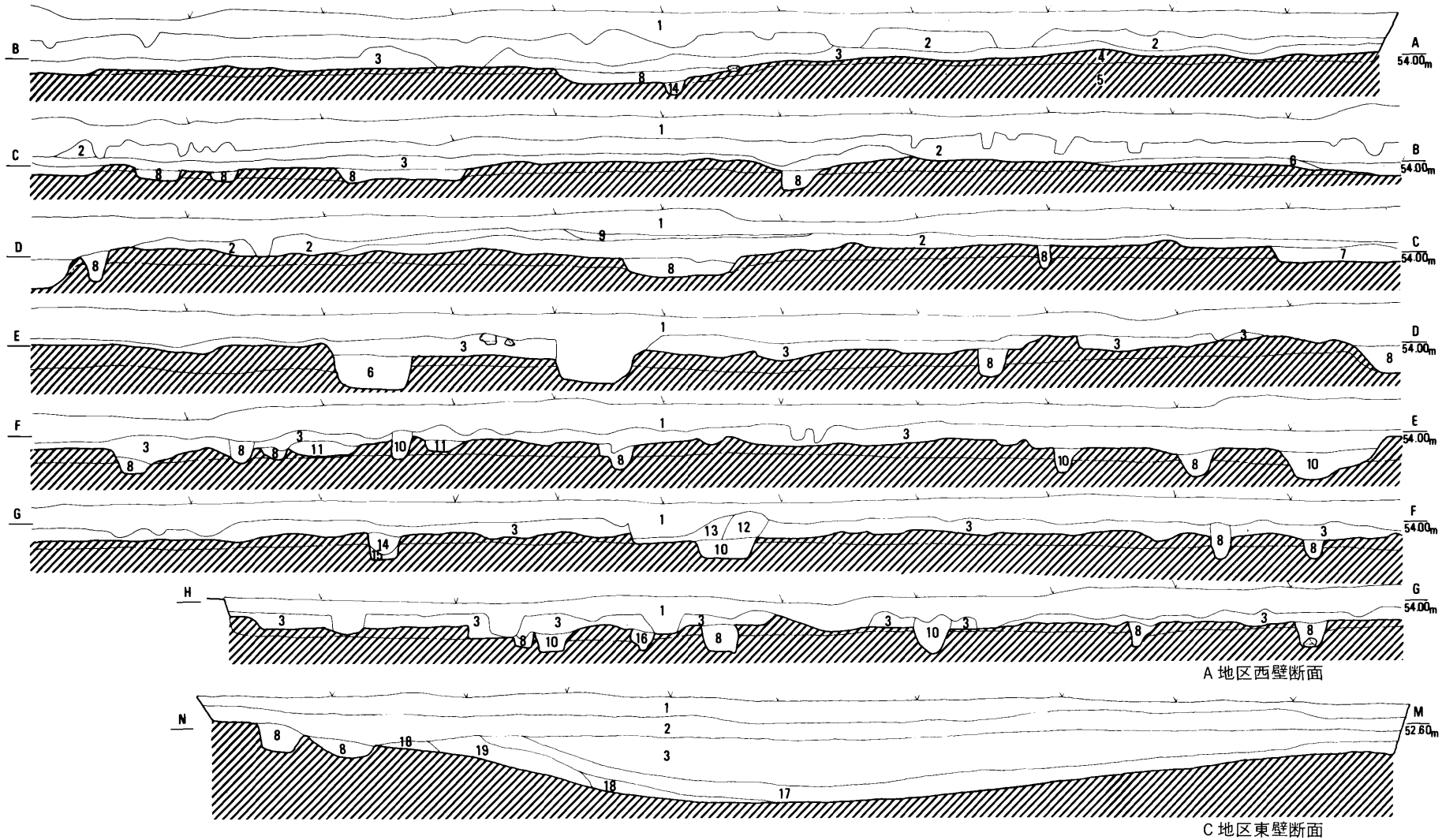
A．掘立柱建物

ＳＢ39　東側が調査区外のため詳細は明らかでないが、桁行2間、梁行1間以上を確認した。柱間は2.2mで、建物方向N18°Eの南北棟と思われる。柱穴から時期不明の須恵器片・長胴甕片が出土しているが、ＳＤ１とほぼ平行していること、包含層出土遺物も山茶椀・土師器鍋等の中世遺物が中心であることから、ＳＤ１と同時期の平安時代末期の建物と思われる。

ＳＢ40　西側が調査区外のため確定できないが、桁行3間、柱間1.6m、棟方向N6°Eの南北棟と思われる。柱穴から鎌倉時代前期の山茶椀が出土している。



第29図　遺構平面図（1：200）



1．黒　色　土(耕　土)
2．暗　茶　色　土
3．黒　褐　色　土(包含層)
4．黒褐色混り黄褐色土
5．黄　褐　色　土
(地山)
6．礫混り暗茶褐色土
7．礫混り茶褐色土
8．褐　色　土
9．褐色粘質土
10．暗黄褐色土
11．礫混り暗黄褐色土
12．黄褐色混り暗茶褐色土
13．黄褐色混り茶褐色土
14．暗黒色土
15．礫混り黄褐砂質土
16．暗　褐　色　土
17．礫混り暗茶褐色土
18．橙褐粘質土
19．礫混り橙褐色土

0　5m

第30図　土層図（1：100）

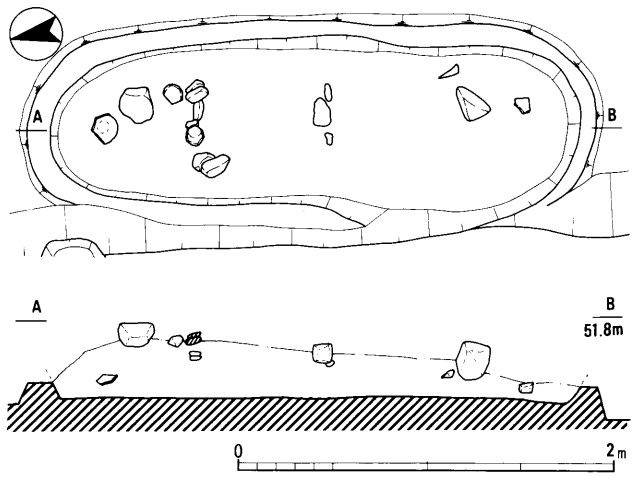
B．溝

ＳＤ10　調査区中央部で幅約１～1.8m、深さ約30～50cmの南北溝を検出した。埋土は暗褐色であり、平安時代末期～鎌倉時代前期の土師器皿(15･16)・鍋(17～19)・山茶椀(20～29)・山皿(30)が出土した。南端で、東側にほぼ直角に曲がる幅約90cm、深さ30cmの溝とつながる。溝の北側は、鎌倉時代中頃の山茶椀が出土したＳＤ17に切られている。

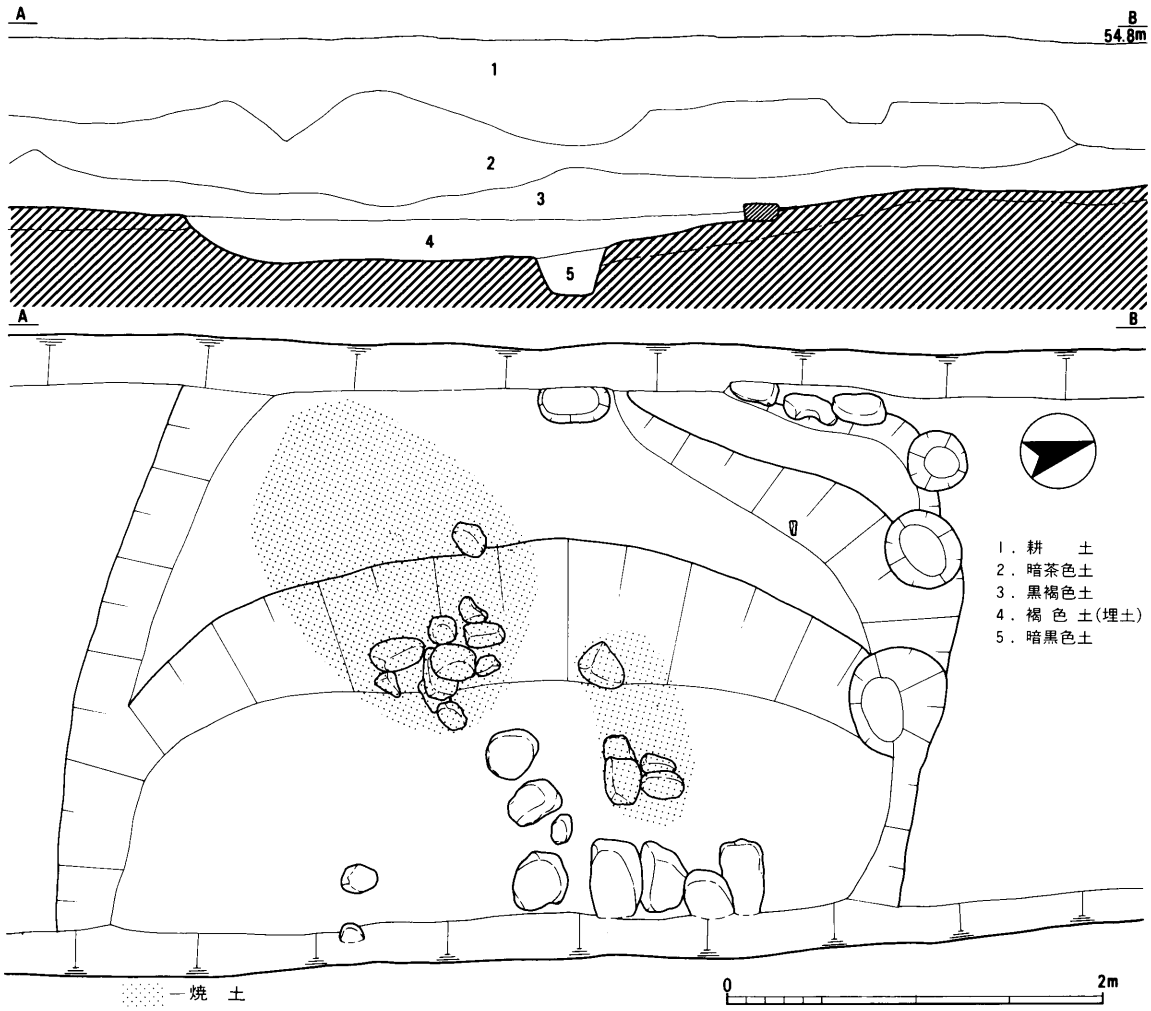
C．土坑

ＳＫ22　西側・東側が共に調査区外のため全容は明らかでないが、幅約４ｍの方形の土坑であると思われる。西側で深さ約30cm、東側で深さ約50cmになり、人頭大の石が東側中央部を中心に散在しており、一部は組まれている。埋土は黒褐色であり、西側から中央部にかけて焼土が見られた。鎌倉時代前期の土師器皿(1・2)・山茶椀(4・5)・青磁椀(6)などが出土している。

ＳＫ24　径約1.5m、深さ約15cmの楕円形の土坑である。埋土は黒褐色で、炭が混ざる。土坑の周囲には厚さ約１cmの焼土が見られた。昭和62年度の調査でも同じような土坑が多数検出されており、土坑墓の可能性もある。鎌倉時代前期の山茶椀(7)が出



第31図　ＳＸ25平面図（１：40）



第32図　ＳＫ22平面図・断面図（１：40）

土している。

E．土坑墓

ＳＸ25　幅約85cm、長さ約2.8m、深さ約30cmの隅丸長方形の土坑墓でＳＤ10を切り検出された。埋土は暗灰褐色であり、南側に「コ」の字状の石組がある。中央部から人と思われる骨片が出土した。焼土は見られない。鎌倉時代前期の土師器皿・鍋(14)・山茶椀(12・13)が出土した。

（2）Ｂ地区の遺構

調査面積は約170m²である。土層の基本層序は上から第一層；黒色土（耕土）、第二層；暗茶色土、第三層；黄褐色土（地山）であるが、調査区南側では地山が黄色砂礫土になる。なお調査区の南端約50m²については、地山が完全な礫層になり遺構も検出されなかったため、第29図の遺構平面図からは割愛した。耕土から地山までの深さは、約35～80cmである。検出された遺構は、鎌倉時代前期～中期の土師器鍋・山茶椀が出土したＳＫ28の他、時期不明の溝４条がある。

（3）Ｃ地区の遺構

調査面積は約80m²である。土層の基本層序は上から第一層；黒色土（耕土）、第二層；暗茶色土、第三層；黒褐色土（包含層）、第四層；黄褐色土（地山）となり、耕土から地山までの深さは約60～80cmである。調査区南側で幅約16m、深さ約１mの河道ＳＤ37を検出した。遺構からの遺物はないが、包含層から鎌倉時代前期～中期の土師器皿・鍋が出土している。その他、時期不明の溝・土坑がある。

（4）Ｄ地区の遺構

調査面積は約50m²である。土層は上から第一層；黒色土（耕土）、第二層；暗茶色土、第三層；黄褐色土（地山）である。地山までの深さは約20～40cmである。溝・土坑を検出したが、遺構からの遺物は無かった。暗茶色土から時期不明の山茶椀が出土した。

（5）Ｅ地区の遺構

調査面積は約60m²である。土層は、耕土直下が黄褐色の地山であり、地山までの深さは約20～40cmである。時期不明の溝１条、鎌倉時代前期の土坑１基、井戸１基を検出した。

ＳＤ29・32　共に、幅約1.4～1.8m、深さ約40

遺構番号	形　状	規模(cm)	深さ(cm)	年　代
ＳＫ２	隅丸方形	80×150	20	12世紀末
3	円　形	60×60	30	13世紀前半
4	楕円形	50×70	50	13世紀前半
5	楕円形	120×140	60	13世紀前半
6	楕円形	80×—	20	13世紀前半
7	楕円形	130×—	60	13世紀前半
9	楕円形	70×—	15	不　明
11	長円形	100×140	25	13世紀中頃
13	不整形	—×—	20	13世紀前半
14	溝　状	140×—	30	不　明
15	楕円形	120×—	30	不　明
16	楕円形	100×150	45	13世紀中頃
18	楕円形	70×95	25	13世紀前半
19	楕円形	330×—	10	不　明
21	楕円形	200×—	25	13世紀前半
22	方　形	450×—	30～50	13世紀前半
23	楕円形	100×—	15	13世紀前半
24	楕円形	150×140	15	13世紀前半
26	隅丸長方形	70×200	25	13世紀前半
27	楕円形	90×—	30	13世紀中頃
28	不整形	—×—	35	13世紀中頃
31	隅丸方形	140×—	30	12世紀末

表９　土杭一覧表

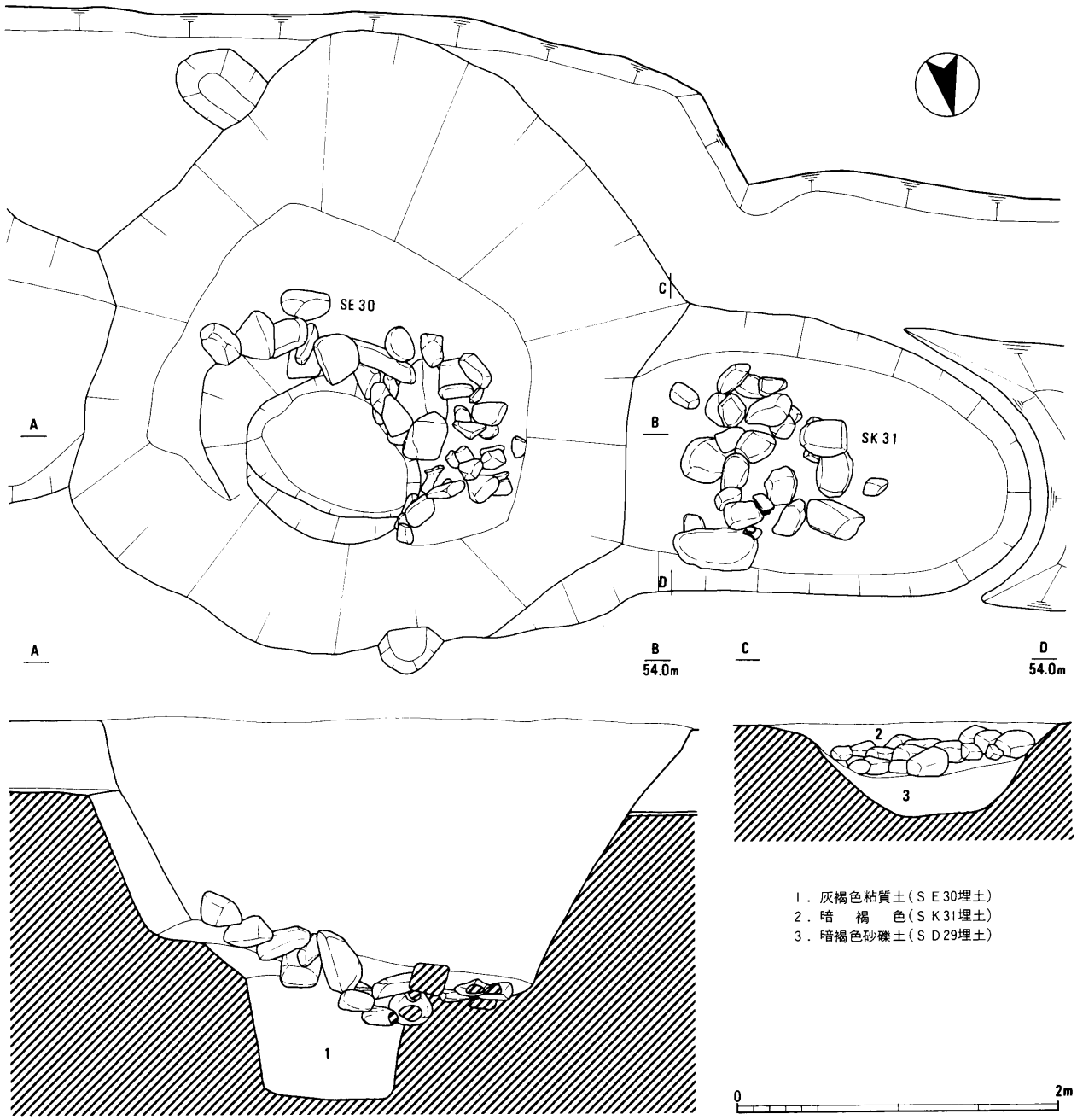
遺構番号	幅(cm)	深さ(cm)	主軸方向	年　代
1	90	35	W18°N	12世紀末
8	100	25	N38°E	不　明
10	100～180	50	N７°E～N25°E	13世紀前半
12	45	30	W12°N	13世紀中頃
17	180	30	W12°N	13世紀中頃
20	120～200	15	W13°N	不　明
29	180	40	W12°N	不　明
32	160	40	N３°E～W12°N	不　明
33	60	20	N50°W	不　明
34	50	20	N31°W	不　明
35	140	15	N２°W	不　明
36	180	15	N９°W	不　明
37	16000	200	N40°W	不　明
38	100	40	N26°E	不　明

第10表　溝一覧表

cm、埋土は暗褐色砂礫土の溝である。遺物は共に土師器皿の細片だけであり、時期は決定できないが、ＳＥ30とＳＫ31に切られているため、鎌倉時代以前の遺構と考えられる。恐らく同一の溝と思われる。

ＳＫ31　東側をＳＥ30に切られているが、幅約1.4m、長さ2.5m以上、深さ約30cmの隅丸方形の土坑と思われる。埋土は暗褐色であり、焼土は見られなかった。東側に人頭大の石の集石があり、その周辺から鎌倉時代前期の土師器皿(36•37)・小皿(33～35)・鍋(38•39)・山茶椀(40～42)・陶器ねり鉢(43)の他、使途は不明であるが、藁痕跡のある分厚い粘土片が多数出土した。ＳＥ30とは遺物を見るかぎり時期差はなく、井戸に付随する施設であった可能性もある。

ＳＥ30　径約１m、深さ約2.4mの円形の井戸で、深さ約1.6mの所で人頭大の石を２～３段に半円形に組んでいる。井戸の上部は石組が崩れていたため、径約4.0mの円形の井戸掘形しか検出できなかった。井戸の最深部は石組はなく素掘りであったが、木の曲物が組まれていたのではないかと思われる。埋土は、深さ約1.6mまでは黒褐色土、その下は灰褐色



第33図　ＳＥ30、ＳＫ31平面図・断面図（１：40）

粘質土となり、これが井戸の湧髄[⑤]部分と思われる。鎌倉時代前期の土師器皿(47～58)・小皿(59～75)・鍋(76～83)・山茶椀(85～111)・山皿(112～116)・陶器甕(117)・瓦器椀(118)が多数出土した。山茶椀の底部に「上」・「大」等の墨書があるものが6点(106～111)ある。また平安時代後期のロクロ土師器(44)・土師器皿(46)・台付き皿(45)が井戸掘形より出土したが、ＳＤ29・32からの混じり込みと思われる。井戸下層部からは、土師器皿(82)・山茶椀(85・86)が出土しているが、上層部の遺物と時期差は認められない。恐らく短期間に埋没したものと思われる。

（6）Ｆ地区の遺構

調査面積は約40m²である。土層は上から第一層；黒色土（耕土）、第二層；暗茶色土、第三層；黄褐色土（地山）であり、耕土から地山までの深さは約20～50cmである。溝・土坑を検出したが、遺構からの遺物はなかった。暗茶色土より鎌倉時代前期の土師器皿・鍋・山茶椀が出土している。

3．遺　　物

当遺跡から出土した遺物は、整理箱（テンバコ）にしておよそ46箱ある。その内訳はＡ地区から19箱、Ｅ地区から26箱（内ＳＥ30より25箱）、その他の地区からは1箱である。遺物の大部分は中世の土器類であるが、Ａ地区包含層より縄文土器4点が出土している。以下に特徴的な遺物について概略を述べる。遺物の法量・調整等については、遺物観察表を参照されたい。

（1）平安時代後期の土器

この時期の遺物としては、ＳＥ30出土の土師器皿(46)・小皿(45)・台付き皿(45)があるが、いずれもＳＤ29・32からの混入と思われる。

土師器小皿(44)　底部糸切りのロクロ土師器である。口縁端部に丸みをもつ。

土師器台付き皿(45)　口縁端部が外側に摘むようにヨコナデされてるため、端部上面に平坦な面ができる。貼り付け高台である。

土師器皿(46)　口縁部が強いヨコナデにより大きく外反する。口縁端部は丸みをもつ。

（2）平安時代末～鎌倉時代中期の土器

ＳＫ22出土の土器

土師器小皿(1)　底部から屈曲して立ち上がり、口縁端部に丸みをもつ。

土師器皿(2)　平坦な底部から緩やかな弧を描いて口縁部が立ち上がる。

山茶椀(4・5)　腰部に張りがあり、口縁がわずかに外反する。藤澤編年の第Ⅲ段階第5型式に相当[⑥]する。

山皿(3)　高台は付かず、底部糸切りである。山茶椀と同時期であろう。

青磁椀(6)　内面に陰刻花文をもつ。太宰府分類の龍泉窯系青磁椀Ⅰ－2－a[⑦]に相当する。

ＳＫ24出土の土器

山茶椀(7)　腰部に張りがあり、口縁部が外反する。藤澤編年の第Ⅲ段階第5型式に相当する。

ＳＫ27出土の土器

土師器鍋(8)　口縁部の折り返し形状は伊藤編年の第Ⅰ段階[⑧]に類似するが、頸部の形状、体部のハケメによる調整から第2段階に相当するものと思われる。

ＳＫ26出土の土器

山皿(9)　ロクロ水晩き形成である。藤澤編年の第Ⅲ段階第5型式に相当するものであろう。

ＳＫ16出土の土器

山茶椀(11)　立ち上がりが直線的で、内面は底部と体部の境の稜が明瞭である。藤澤編年の第Ⅲ段階第6型式に相当すると思われる。

山皿(10)　ロクロ水挽き形成である。山茶椀と同時期であろう。

ＳＸ25出土の土器

山茶椀(12・13)　口縁端部に丸みをもつもの(13)と、やや尖るもの(12)がある。前者は藤澤編年の第5型式、後者は第Ⅲ段階第6型式に相当するものと思われる。

土師器鍋(14)　口縁端部を内に折り返すものであり、伊藤編年の第Ⅰ段階に相当する。

ＳＤ10出土の土器

土師器小皿(15)　平坦な底部から丸く立ち上がる。

土師器皿(16)　口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部は細く終わる。

土師器鍋(17～19)　いずれも伊藤編年の第Ⅰ段階に相当するが、17は口縁端部の折り返し部分に施される強いヨコナデのため、口縁端部が若干立ち上がり気味となる。

山茶椀(20～29)　体部の腰部にやや丸みをもって立ち上がるもの(21・28・29)と、体部が直線的に立ち上がるもの(20・22・24・26・27)とがある。前者は藤澤編年の第Ⅲ段階第５型式、後者は第Ⅲ段階第６型式に相当するものと思われる。底部外面に墨書をもったものは６点(20～25)あるが、20・21・24・25はＳＸ25の周辺から出土しており、この遺構からの混じり込みの可能性もある。20・21は梅鉢文様、24・25は菊花文様である。

山皿(30)　底部から体部にかけて素直に立ち上がるものであり、藤澤編年の第Ⅲ段階第６型式に相当するものと思われる。

ＳＫ11出土の土器

山茶椀(31)　口径が13.0cmと小さくなり、体部が直線的に立ち上がる。また内面は、底部と体部の境の稜が明瞭である。藤澤編年の第Ⅶ段階第８型式に相当する。

ＳＤ17出土の土器

石鍋(32)　底部しか残っていないが、外面にベッタリと煤が付着しており、煮たきに使用したと思われる。

ＳＫ31出土の土器

土師器小皿(33～35)　底部から屈曲して立ち上がるもの(33)と、底部から丸く立ち上がるもの(34・35)とがある。

土師器皿(36・37)　口縁が外反的に立ち上がるもの（36）と、器壁が薄く、口縁が緩やかに内弯して立ち上がり、口縁端部が細く終わるもの（37）とがある。

土師器鍋(38・39)　共に口縁端部を折り返すが、39は口縁端部が若干立ち上がり気味となり、口縁部全体の形状としてはやや受口状となる。いずれも伊藤編年の第Ⅰ段階に相当する。

山茶椀(40～42)　口縁部が外反気味のもの（41・42)と素直に立ち上がるもの(40)とがあるが、いずれも藤澤編年の第Ⅲ段階第５型式に相当するものと思われる。

陶器ねり鉢(43)　山茶椀質のねり鉢である。山茶椀と同時期のものであろう。

ＳＥ30出土の土器

土師器皿(47～58)　口縁部が強いヨコナデにより屈曲気味に立ち上がるもの(47～49・51・55～57)、底部から丸く立ち上がるもの(50・52～54)とがある。47は口径が16.2cmあるが、その他は口径14.0～15.0cmの範囲に収まる。

土師器小皿(59～75)　口縁部が強くヨコナデされ、底部と口縁部との境に稜を残しながら外反気味に立ち上がるもの（59～61）と、底部から口縁部にかけて内弯気味に緩やかに立ち上がるもの（62～75）がある。

土師器鍋(76～83)　南伊勢系鍋と呼ばれるものである。頸部が丸く、口縁部が素直に外反するもの(77・79・80・82・83)と、口縁端部が若干立ち上がり気味になり、頸部と端部がそれぞれにわかれたような形状をとるもの(76・78・81)がある。前者は伊藤編年の第Ⅰ段階ａ型式、後者は第Ⅰ段階ｂ型式に相当しよう。

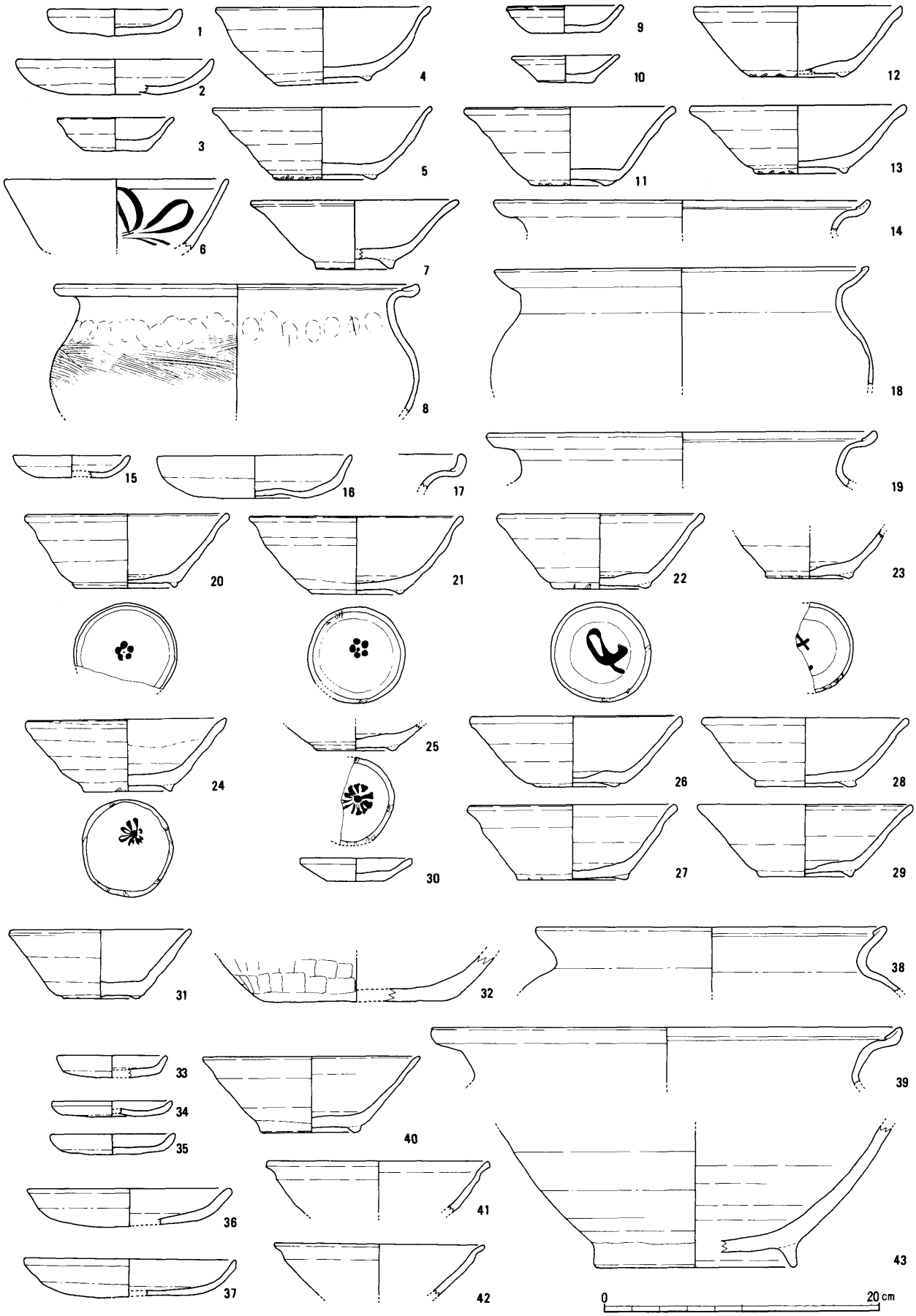
土師器羽釜(84)　口径14.0cmの小型の羽釜である。口縁部に折り返しはなく、ヨコナデにより方頭状におさまる。

山茶椀(85～111)　腰部に緩やかな丸みをもち、口縁は弱く外反するもの(85～98・107～111)と、口径が14.4～14.8cmと小さくなり、腰部に張りがなく、体部が直線的になるもの(99～106)とがある。前者は藤澤編年の第Ⅲ段階第５型式、後者は第Ⅲ段階第６型式に相当するものと思われる。胎土から知多産と渥美産がある。(106～111)は、底部に墨書がある。

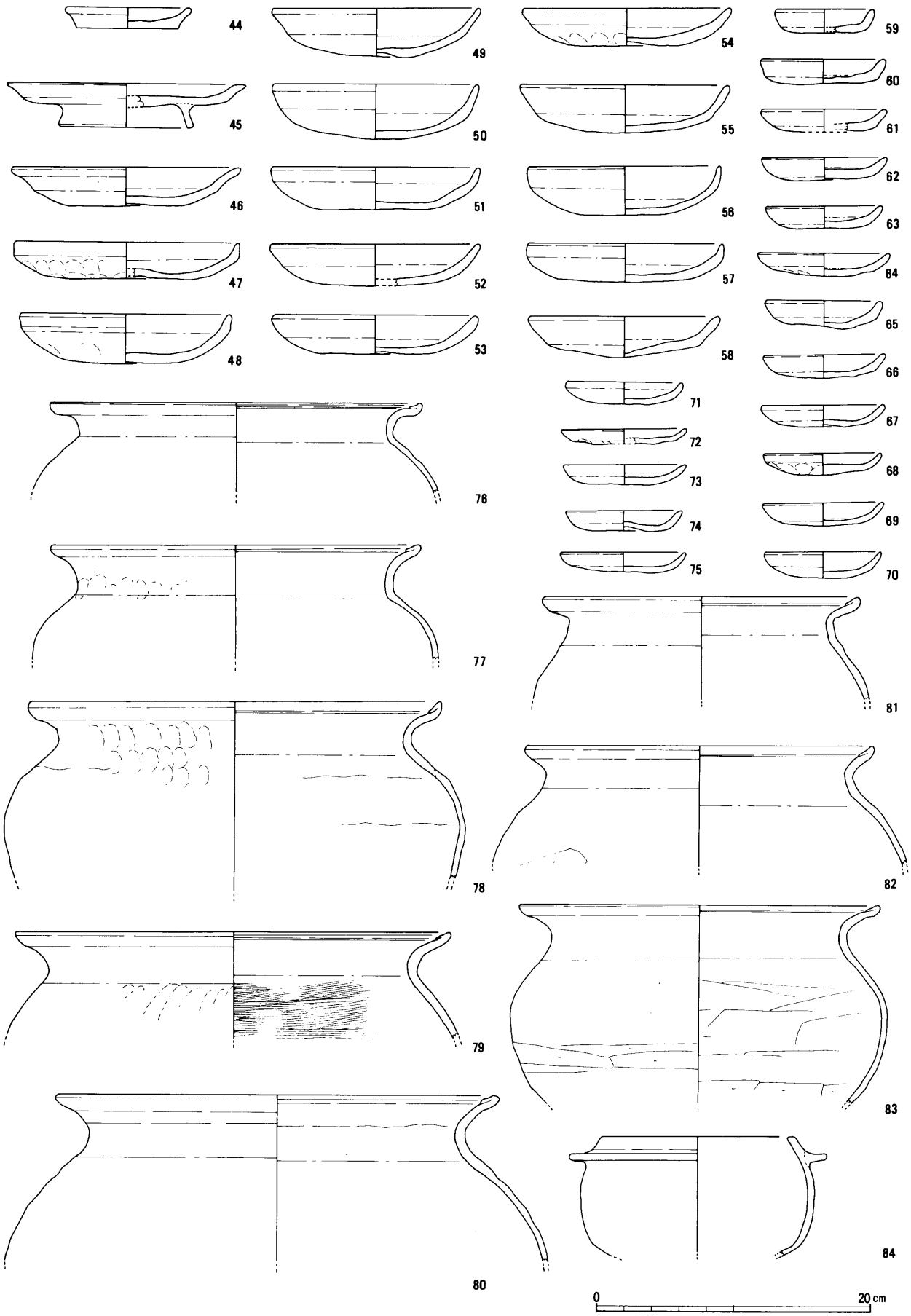
山皿(112～116)　底部糸切りであり、口縁端部は丸くおさまる。藤澤編年の第Ⅲ段階第５型式に相当すると思われる。

陶器甕(117)　外面に灰オリーブの釉ダレが見られる。

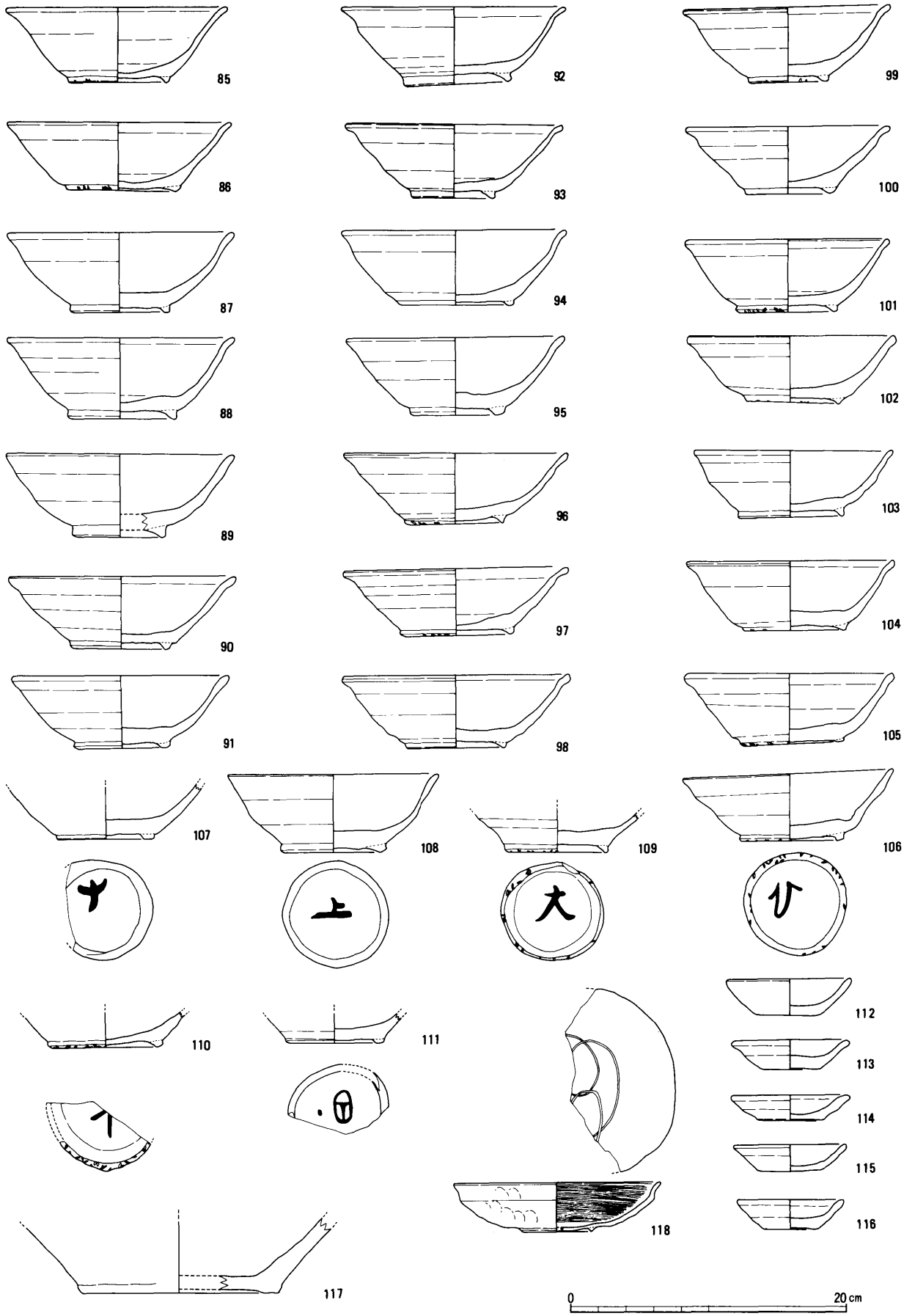
瓦器椀(118)　体部外面は指オサエが施され、ヘラミガキは認められない。山田編年のⅢ段階１型式[9]



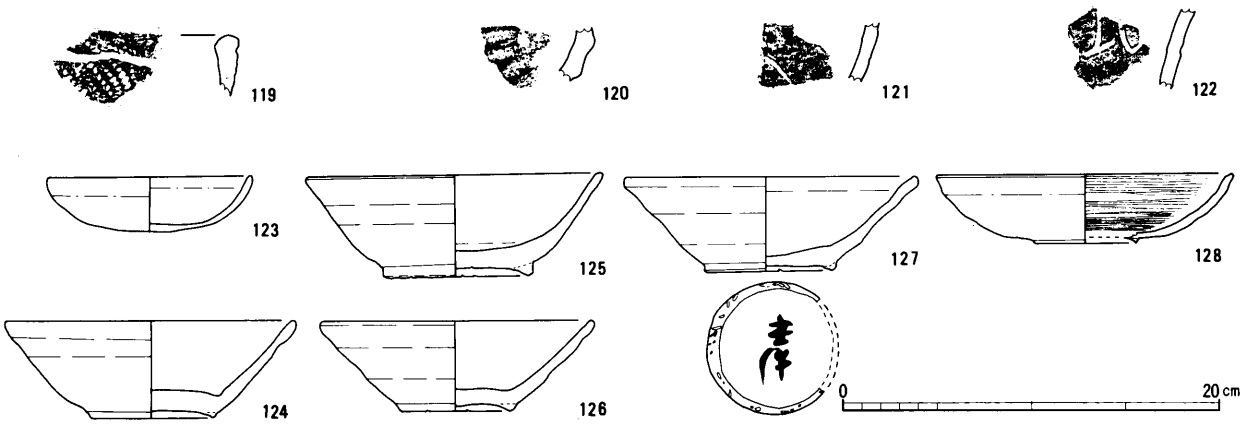
第34図　出土遺物実測図（1）（1：4）



第35図　出土遺物実測図（２）（１：４）



第36図　出土遺物実測図（３）（１：４）



第37図　出土遺物実測図（4）（1：4）

に相当するものと思われる。

3．包含層出土の土器

縄文土器(119～122)　A地区包含層より、4点の縄文土器が出土した。いずれも小片であり詳細はわからないが、沈線があるもの(121・122)、口縁端部に横方向の沈線を施した後、縦方向の縄文が帯状に施文されたもの(119)と、窓枠状の隆帯がつくもの(120)がある。いずれも縄文時代中期後半の深鉢と思われる。

土師器皿(132)　底部から丸く立ち上がる口縁部をもつ。器壁は薄く、口径10.8cmと小さい。鎌倉時代中期以降の遺物と思われる。

山茶椀(124～127)　125・127は藤澤編年第Ⅲ段階5型式、124・126は藤澤編年第Ⅲ段階6型式に相当するものと思われる。127の底部の墨書は、「主伴」とも読めるが明確ではない。

瓦器椀(128)　山田編年のⅢ段階1型式に相当するものと思われる。

4．結　　語

椋本南方遺跡は、前述した様に安濃川左岸に位置する面積約49,000m²におよぶ広大な遺跡である。しかし今回はその極一部を調査したに過ぎないため、遺跡の全体像や性格を十分把握するまでには至らなかったが、検出された遺構・遺物からその一端を垣間見ることはできる。今回の調査で検出した遺構は平安時代後半から鎌倉時代中頃までのものであり、特に鎌倉時代前半のものが中心である。掘立柱建物はA地区で検出された2棟だけであり、これだけで時代による棟方向の違いを断定するわけにいかないが、溝の主軸方向と建物の棟方向から、おおよそ平安時代末の棟方向はN18°E前後、鎌倉時代前半の建物は棟方向N6°E前後と思われる。また、A地区のSD10、E地区のSD29・SD32等の溝は、形状からなんらかの区画溝と思われるが、トレンチ掘りのためその性格は不明である。

昭和62年度の調査では、今回の調査区より南に下がった地点で、奈良～平安時代前期の竪穴住居や掘立柱建物が多数検出されている[10]。このことから当遺跡は、奈良時代にまず安濃川に近い段丘上に集落が形成されはじめ、鎌倉時代前期には安濃川からややはなれた段丘上にまで集落が広がったものと思われる。平安時代後期から鎌倉時代中頃にかけての集落跡は、当遺跡より700m程北西にある大石遺跡でも掘立柱建物が多数検出されている。また南東に1km程隔たった所にある松山遺跡[11]でもこの頃の集落跡が確認されていることなどから、鎌倉時代前期には広範囲にわたり人々が生活をしており、比較的開かれた地域であったことがわかる。それは美濃夜神社蔵の寛元2(1224)年の棟札に椋本村の地頭名[12]が記されていることからも推察される。ただ鎌倉時代中期以降になると、この地域での集落跡の遺跡は極端に減少する。今回の調査でも、鎌倉時代中期以降の遺構・遺物はどの地区からも確認出来なかった。これは推測の域をでないが、安濃川の氾濫等なんらかの理由で、集落が安濃川の段丘上から微高地にあたる現在の集落地に移動したためと思われる。

遺物には、A地区包含層より縄文時代中期の小片

が4点出土している。これは混入と思われるが、大石遺跡の縄文土器と同時期であり、注目される。

中世の遺物は全ての地区から出土しており、山茶椀が多い。大半は常滑産のものと推定され、大石遺跡出土のものと産地が同じである。底部外面に墨書されたものが多くあり、中でも注目されるのは、梅鉢・菊花文様の墨書がそれぞれ2点出土していることである。これは推測の域をでないが、この墨書が所有を表すものとすれば、この印は所有者を表し、室町時代以降に広く使われた家紋の原型のようなものではないかとも考えられる。また「上」と書かれた墨書山茶椀がE地区のSE30より1点出土しているが、昭和62年度の調査でもA区・F区の溝・土坑から同じ文字の墨書山茶椀が5点出土している。「上」は「たてまつる」とも解釈され、先に述べた墨書が所有を表したものだけでなく、祭祀等で神仏に捧げたものもあったとも判断される。その他に、大石遺跡出土の墨書山茶椀には、所有者の階層を窺わせる「侍器」という文字がはいるものもあり、平安時代末から鎌倉時代にかけてのこれらの墨書は、多様な意味に用いられていたものと考えられる。

（石川隆郎）

［註］

① 三重県教育委員会「三重県埋蔵文化財年報18」 1988年
② 森川幸雄・伊藤徳也「大石遺跡」『平成3年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告－第1分冊－』三重県埋蔵文化財センター 1992年
③ 『芸濃町史上巻』芸濃町教育委員会 1986年
④ 前掲註③
⑤ 駒見和夫『考古學雑誌第77巻第4号』「井戸をめぐる祭祀」日本考古學會 平成4年
⑥ 藤澤良祐『瀬戸市歴史民族資料館研究紀要II』瀬戸市歴史民族資料館 1983年
藤澤良祐「山茶椀と中世集落」『尾呂』瀬戸市教育委員会 1990年
⑦ 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』 1978年
⑧ 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』 1990年
⑨ 山田猛「瓦器に関する若干の考察」『中世土器の基礎研究〕』中世土器研究会 1986年
⑩ 前掲註①
⑪ 前掲註①
⑫ 前掲註③

第11表 出土土器観察表（1）

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	器高	底径	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	6－4	土師器小皿	B－22 SK22	9.4	2.0		内：ナデ 口：ヨコナデ 外：オサエ、ナデ	密	良	淡橙	1/3	
2	6－6	土師器皿	B－22 SK22	14.3	2.6		内：ナデ 口：ヨコナデ 外：オサエ、ナデ	密	良	淡橙	1/4	
3	6－3	陶器皿	B－22 SK22	8.4	2.4	4.6	内外：ロクロナデ 底：糸切	密	良	灰白	2/3	山皿
4	6－2	陶器椀	B－22 SK22	15.4	5.6	6.2	内外：ロクロナデ 底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	9/10	山茶碗、高台籾殻痕
5	6－1	陶器椀	B－22 SK22	16.0	5.2	7.1	内外：ロクロナデ 底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	1/2	山茶碗、高台籾殻痕
6	6－5	青磁椀	B－22 SK22	16.2			内外：ロクロナデ	密	硬	断面：灰白 釉：灰オリーブ	口縁 1/6	内側の陰刻花文
7	7－2	陶器椀	B－23 SK24	15.1	5.0	5.6	内外：ロクロナデ 底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	2/3	山茶碗、高台籾殻痕
8	5－6	土師器堝	B－43 SK27	26.0			内：ナデ 口：ヨコナデ 外：オサエ、ハケメ	密	良	淡黄橙	口縁 1/6	外面にスス付着
9	5－1	陶器皿	B－24 SK26	8.2	2.0		内外：ロクロナデ 底：糸切	密	良	灰白	2/3	山皿、一部に自然釉
10	5－3	陶器皿	B－40 SK16	7.6	2.0	3.0	内外：ロクロナデ 底：糸切	密	良	灰白	3/5	山皿
11	5－4	陶器椀	B－40 SK16	14.9	5.5	5.6	内外：ロクロナデ 底：糸切、貼付高台	やや密	良	灰白	1/2	山茶碗、高台籾殻痕
12	7－3	陶器椀	B－44 SX25	15.0	5.1	6.7	内外：ロクロナデ 底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	1/4	山茶碗、高台籾殻痕
13	7－1	陶器椀	B－44 SX25	15.8	4.9	6.4	内外：ロクロナデ 底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	3/4	山茶碗、高台籾殻痕
14	7－4	土師器堝	B－44 SX25	26.0			口：ロクロナデ	密	良	淡黄橙	口縁 1/10	
15	1－3	土師器小皿	B－45 SD10	8.4	1.6		内：ナデ 口：ヨコナデ 外：オサエ、ナデ	密	良	浅黄橙	1/3	
16	2－4	土師器皿	B－44 SD10	14.0	3.1		内：ナデ 口：ヨコナデ 外：オサエ、ナデ	密	良	黄橙	完形	
17	4－4	土師器堝	B－40 SD10				口：ヨコナデ	密	良	黄橙	口縁 1/12	
18	1－1	土師器堝	B－40 SD10	27.2			内：ナデ 口：ヨコナデ 外：オサエ、ナデ	やや密	良	淡黄	口縁 1/4	
19	4－3	土師器堝	B－40 SD10	28.0			内：ナデ 口：ヨコナデ 外：オサエ、ナデ	密	良	淡黄橙	1/5	外面にスス付着

第11表　出土土器観察表（2）

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	器高	底径	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
20	3—3	陶器椀	B—44 SD10	14.6	5.3	7.2	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	1/3	山茶碗、高台籾殻痕 底部墨書
21	3—4	陶器椀	B—44 SD10	15.2	5.5	6.4	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	やや密	良	灰白	1/3	山茶碗、高台籾殻痕 底部墨書
22	4—1	陶器椀	B—39 SD10	14.7	5.4	6.6	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	やや密	良	灰白	2/3	山茶碗、高台籾殻痕 底部墨書
23	4—2	陶器椀	B—39 SD10			5.9	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	底部 2/5	山茶碗、高台籾殻痕 底部墨書
24	3—1	陶器椀	B—45 SD10	14.3	5.2	6.5	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	完形	山茶碗、高台籾殻痕 底部墨書
25	3—2	陶器椀	B—44 SD10			5.7	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	底部 1/2	山茶碗、高台籾殻痕 底部墨書
26	2—1	陶器椀	B—45 SD10	14.8	1.7	6.0	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	1/2	山茶碗、高台籾殻痕
27	2—2	陶器椀	B—44 SD10	14.6	5.4	8.0	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	やや密	良	灰白	1/3	山茶碗、高台籾殻痕
28	2—3	陶器椀	B—44 SD10	14.6	5.0	7.0	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	やや密	良	灰白	1/3	山茶碗、高台籾殻痕
29	1—2	陶器椀	B—40 SD10	15.8	5.2	6.7	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	やや密	良	灰黄	1/3	山茶碗、高台籾殻痕
30	1—4	陶器皿	B—44 SD10	8.0	1.7	4.0	内外：ロクロナデ　底：糸切	密	良	灰白	1/2	山皿
31	5—5	陶器椀	B—47 SK11	13.0	5.0	5.6	内外：ロクロナデ　底：糸切	密	良	灰白	1/3	山茶碗、高台籾殻痕
32	5—2	石鍋	B—36 SD17			13.2	内：ミガキ　外：ケズリ、ミガキ			灰白	底部 1/8	外面にスス付着
33	27—5	土師器小皿	E—40 SK31	7.9	1.6		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	黄橙	1/4	
34	27—4	土師器小皿	E—40 SK31	8.6	1.1		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	黄灰	2/5	
35	27—8	土師器小皿	E—40 SK31	9.0	1.5		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	浅黄橙	1/2	
36	28—4	土師器皿	E—40 SK31	14.7	2.8		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	浅黄橙	1/2	
37	27—3	土師器皿	E—40 SK31	15.2	2.9		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	浅黄橙	3/4	
38	27—2	土師器堝	E—40 SK31	25.4			内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	黄灰	口縁 1/10	外面にスス付着
39	27—1	土師器堝	E—40 SK31	34.0			口：ヨコナデ	密	良	黄灰	口縁 1/10	外面にスス付着
40	28—3	陶器椀	E—40 SK31	15.7	5.5	6.5	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	3/5	山茶碗
41	27—6	陶器椀	E—40 SK31	16.0			内外：ロクロナデ	密	良	灰白	口縁 1/6	山茶碗
42	27—7	陶器椀	E—40 SK31	15.2			内外：ロクロナデ	密	良	灰白	口縁 1/8	山茶碗
43	28—2	陶器鉢	E—40 SK31			14.4	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	やや密	良	灰白	底部 1/3	山茶碗質のねり鉢
44	17—5	土師器小皿	F—40 SE30	8.8	1.5	7.5	内外：ロクロナデ　底：糸切	密	良	黄橙	1/2	ロクロ土師器
45	14—2	台付き皿	F—40 SE30	17.4	3.2	9.2	内：ナデ　口：ヨコナデ 外：オサエ、ナデ　底：貼付高台	密	良	黄橙	1/2	
46	15—2	土師器皿	F—40 SE30	16.4	2.8		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	黄橙	1/2	
47	18—4	土師器皿	F—40 SE30	16.2	2.7		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ	やや密	良	灰黄橙	1/8	
48	20—6	土師器皿	F—40 SE30	15.0	3.6		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	黄白	1/3	
49	24—2	土師器皿	F—40 SE30	14.7	3.5		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	暗黄橙	7/8	
50	15—1	土師器皿	F—40 SE30	14.6	4.0		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	浅黄橙	完形	
51	15—4	土師器皿	F—40 SE30	14.9	3.1		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	浅黄橙	1/2	
52	17—3	土師器皿	F—40 SE30	14.6	3.0		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	黄橙	1/2	
53	15—3	土師器皿	F—40 SE30	14.6	2.8		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	黄橙	1/3	
54	20—5	土師器皿	F—40 SE30	15.0	2.7		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	黄橙	1/3	
55	13—4	土師器皿	F—40 SE30	15.4	3.5		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	暗黄橙	2/3	
56	13—2	土師器皿	F—40 SE30	13.9	2.5		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	暗黄橙	3/4	
57	13—1	土師器皿	F—40 SE30	14.4	2.9		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	浅黄橙	3/4	

第11表　出土土器観察表（3）

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	器高	底径	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
58	22—4	土師器皿	F—40 SE30	14.0	3.9		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	黄橙	2/5	
59	18—5	土師器皿	F—40 SE30	7.0	1.7		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：工具によるナデ、オサエ	密	良	暗黄橙	1/5	
60	22—2	土師器小皿	F—40 SE30	9.0	1.8		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	浅黄橙	4/5	
61	15—8	土師器小皿	F—40 SE30	8.8	1.7		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	黄橙	3/5	
62	20—4	土師器小皿	F—40 SE30	9.0	1.6		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	黄橙	4/5	
63	20—1	土師器小皿	F—40 SE30	8.4	1.6		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	浅黄橙	2/3	
64	19—1	土師器小皿	F—40 SE30下層	9.6	1.7		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	黄橙	1/3	
65	22—1	土師器小皿	F—40 SE30下層	8.5	1.9		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	黄橙	4/5	
66	22—3	土師器小皿	F—40 SE30下層	9.0	1.7		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	浅黄橙	4/5	
67	18—3	土師器小皿	F—40 SE30下層	8.8	1.6		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	黄白	1/2	
68	18—6	土師器小皿	F—40 SE30下層	8.4	1.6		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	浅黄橙	完形	
69	20—3	土師器小皿	F—40 SE30下層	8.6	1.7		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	黄橙	2/3	
70	15—6	土師器小皿	F—40 SE30下層	8.4	1.9		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	浅黄橙	9/10	
71	15—5	土師器小皿	F—40 SE30	8.2	1.6		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	暗黄橙	3/5	
72	19—2	土師器小皿	F—40 SE30	9.0	1.1		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	やや密	良	黄橙	1/4	
73	20—2	土師器小皿	F—40 SE30	8.8	1.5		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	橙	9/10	
74	17—4	土師器小皿	F—40 SE30	8.3	2.0		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	暗黄橙	2/3	
75	15—7	土師器小皿	F—40 SE30	9.0	1.4		内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	淡黄橙	3/5	
76	17—2	土師器鍋	F—40 SE30	26.5			内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	やや密	良	黄橙	口縁 1/6	外面にスス付着
77	18—2	土師器鍋	F—40 SE30	26.3			内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	やや密	良	灰褐	口縁 1/5	
78	16—1	土師器鍋	F—40 SE30	29.8			内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	やや密	良	灰黄	口縁 1/2	外面にスス付着
79	17—1	土師器鍋	F—40 SE30	31.2			内：ナデ、ハケメ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	やや密	良	灰黄	口縁 1/6	外面にスス付着
80	21—1	土師器鍋	F—40 SE30	31.4			内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	黄橙	口縁 1/2	外面にスス付着
81	18—1	土師器鍋	F—40 SE30	22.6			内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	やや密	良	黄橙	口縁 1/5	外面にスス付着
82	23—2	土師器鍋	F—40 SE30下層	25.0			内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	黄橙	口縁 2/5	外面にスス付着
83	24—1	土師器鍋	F—40 SE30下層	26.0			内：板ナデ、ケズリ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ケズリ	密	良	黄橙	口縁 1/4	
84	14—1	土師器羽釜	F—40 SE30下層	14.0			内：ナデ　口：ヨコナデ　外：オサエ、ケズリ	密	良	黄灰	3/5	外面にスス付着
85	12—5	陶器椀	F—40 SE30下層	15.7	5.5	6.9	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	1/2	山茶碗、高台籾殻痕
86	12—2	陶器椀	F—40 SE30下層	16.0	4.9	7.0	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	3/5	山茶碗、高台籾殻痕
87	11—6	陶器椀	F—40 SE30下層	16.1	5.7	6.8	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	3/5	山茶碗
88	8—5	陶器椀	F—40 SE30下層	16.4	5.8	7.5	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	1/2	山茶碗
89	8—3	陶器椀	F—40 SE30下層	16.4	6.0	6.1	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	1/3	山茶碗
90	11—5	陶器椀	F—40 SE30下層	16.2	5.2	6.7	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	2/3	山茶碗
91	11—3	陶器椀	F—40 SE30下層	15.5	5.3	6.2	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	完	山茶碗
92	12—1	陶器椀	F—40 SE30下層	15.8	5.6	7.3	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰黄	3/4	山茶碗
93	12—3	陶器椀	F—40 SE30下層	15.5	5.3	6.0	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰黄	1/2	山茶碗
94	11—4	陶器椀	F—40 SE30下層	16.0	5.5	7.8	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	やや密	良	灰白	完	山茶碗、高台籾殻痕
95	8—1	陶器椀	F—40 SE30下層	15.8	5.6	6.8	内外：ロクロナテ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	3/5	山茶碗、高台籾殻痕

第11表　出土土器観察表（4）

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	器高	底径	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
96	9—1	陶器椀	F—41 SE30下層	16.1	5.2	7.5	内外：ロクロナテ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	5/6	山茶碗、高台杷殻痕
97	8—6	陶器椀	F—41 SE30下層	16.2	4.8	7.7	内外：ロクロナテ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	1/3	山茶碗、高台杷殻痕
98	9—3	陶器椀	F—41 SE30下層	16.3	5.3	7.3	内外：ロクロナテ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	1/3	山茶碗、高台杷殻痕
99	8—4	陶器椀	F—41 SE30下層	14.8	5.4	5.7	内外：ロクロナテ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	1/3	山茶碗、高台杷殻痕
100	11—2	陶器椀	F—41 SE30下層	14.6	4.9	6.2	内外：ロクロナテ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	2/3	山茶碗、高台杷殻痕
101	12—4	陶器椀	F—41 SE30下層	14.6	5.2	7.1	内外：ロクロナテ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰黄	3/5	山茶碗、高台杷殻痕
102	11—1	陶器椀	F—41 SE30下層	14.9	6.8	4.7	内外：ロクロナテ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰黄	4/5	山茶碗、高台杷殻痕
103	8—2	陶器椀	F—41 SE30下層	14.4	4.8	7.2	内外：ロクロナテ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	1/3	山茶碗、高台杷殻痕
104	9—2	陶器椀	F—41 SE30下層	14.9	5.0	7.7	内外：ロクロナテ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	5/6	山茶碗、高台杷殻痕
105	10—5	陶器椀	F—41 SE30下層	14.8	5.2	6.8	内外：ロクロナテ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	完形	山茶碗、高台杷殻痕
106	25—2	陶器椀	F—40 SE30			7.0	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	底部 4/5	山茶碗 底部に墨書
107	25—1	陶器椀	F—40 SE30	15.2	5.6	6.7	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	4/5	山茶碗、高台杷殻痕 底部に墨書「上」
108	25—4	陶器椀	F—40 SE30			7.0	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	底部 完形	山茶碗、高台杷殻痕 底部に墨書「大」
109	25—3	陶器椀	F—40 SE30	15.7	4.8	7.0	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	4/5	山茶碗、高台杷殻痕 底部に墨書「ひ」？
110	26—1	陶器椀	F—40 SE30			8.2	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	底部 2/5	山茶碗、高台杷殻痕 底部に墨書
111	26—2	陶器椀	F—40 SE30			7.1	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白	底部 2/3	山茶碗、高台杷殻痕 底部に墨書「上」
112	10—2	陶器椀	F—40 SE30	8.8	2.6	4.1	内外：ロクロナデ　底：糸切	密	良	灰白	4/5	山皿
113	10—3	陶器椀	F—40 SE30	8.4	2.1	4.3	内外：ロクロナデ　底：糸切	密	良	灰白	7/8	山皿
114	9—4	陶器椀	F—40 SE30	8.3	1.8	4.7	内外：ロクロナデ　底：糸切	密	良	灰白	完形	山皿
115	9—5	陶器椀	F—40 SE30	7.9	1.9	4.5	内外：ロクロナデ　底：糸切	密	良	明灰白	3/4	山皿
116	10—1	陶器椀	F—40 SE30	7.6	2.1	4.0	内外：ロクロナデ　底：糸切	密	良	灰白	完形	山皿
117	19—3	陶器甕	F—40 SE30			14.0	内外：ロクロナデ	密	良	灰褐	底部 1/3	内面自然釉 対面に釉ダレ
118	22—5	瓦器椀	F—40 SE30	15.0	3.5		内：ヘラミガキ　口：ヨコナデ 外：オサエ、ナデ　底：貼付高台	密	良	黒灰	1/4	
119	31—3	縄文土器（鉢）	B—49 包				口縁部外面に 横方向の沈線後、縦方向の縄文	粗	良	暗褐	小片	
120	3—4	縄文土器（鉢）	B—35 包				外面に窓枠状の隆帯	粗	良	暗褐	小片	
121	31—1	縄文土器（鉢）	B—34 包				外面に沈線	粗	良	暗褐	小片	
122	31—2	縄文土器（鉢）	B—51 包				外面に沈線	粗	良	暗褐	小片	
123	30—4	土師器皿	B—35 包	10.8	3.0		内：ナデ　口ヨコナデ　外：オサエ、ナデ	密	良	黄橙	6/7	
124	30—1	陶器椀	B—47 包	15.3	5.2	6.4	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白黄橙	5/8	山茶碗
125	29—1	陶器椀	E—40 包	15.4	5.4	7.6	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白黄橙	1/3	山茶碗、高台杷殻痕
126	30—2	陶器椀	B—40 包	14.3	4.8	5.7	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白黄橙	1/5	
127	30—3	陶器椀	B—44 包	15.2	5.0	7.0	内外：ロクロナデ　底：糸切、貼付高台	密	良	灰白黄橙	2/5	山茶碗 底部に墨書「主伴」？
128	29—2	瓦器椀	F—40 包	15.6	3.6	5.5	内：ヘラミガキ　口：ヨコナデ 外：オサエ、ナデ　底：貼付高台	密	良	黒灰	1/7	山茶碗

Ａ地区南側（北から）

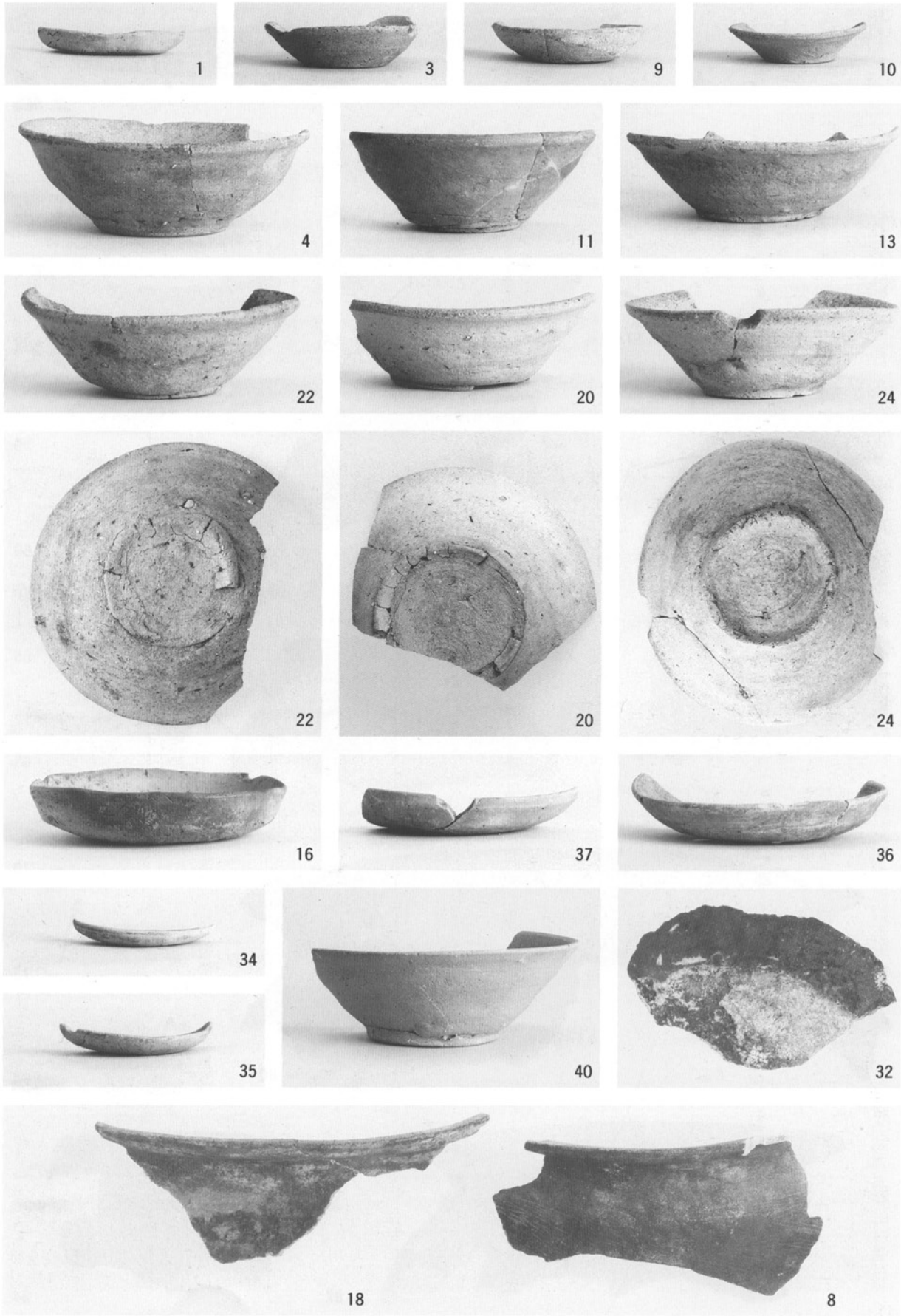
Ａ地区北側（北から）

Ｅ地区全景（西から）

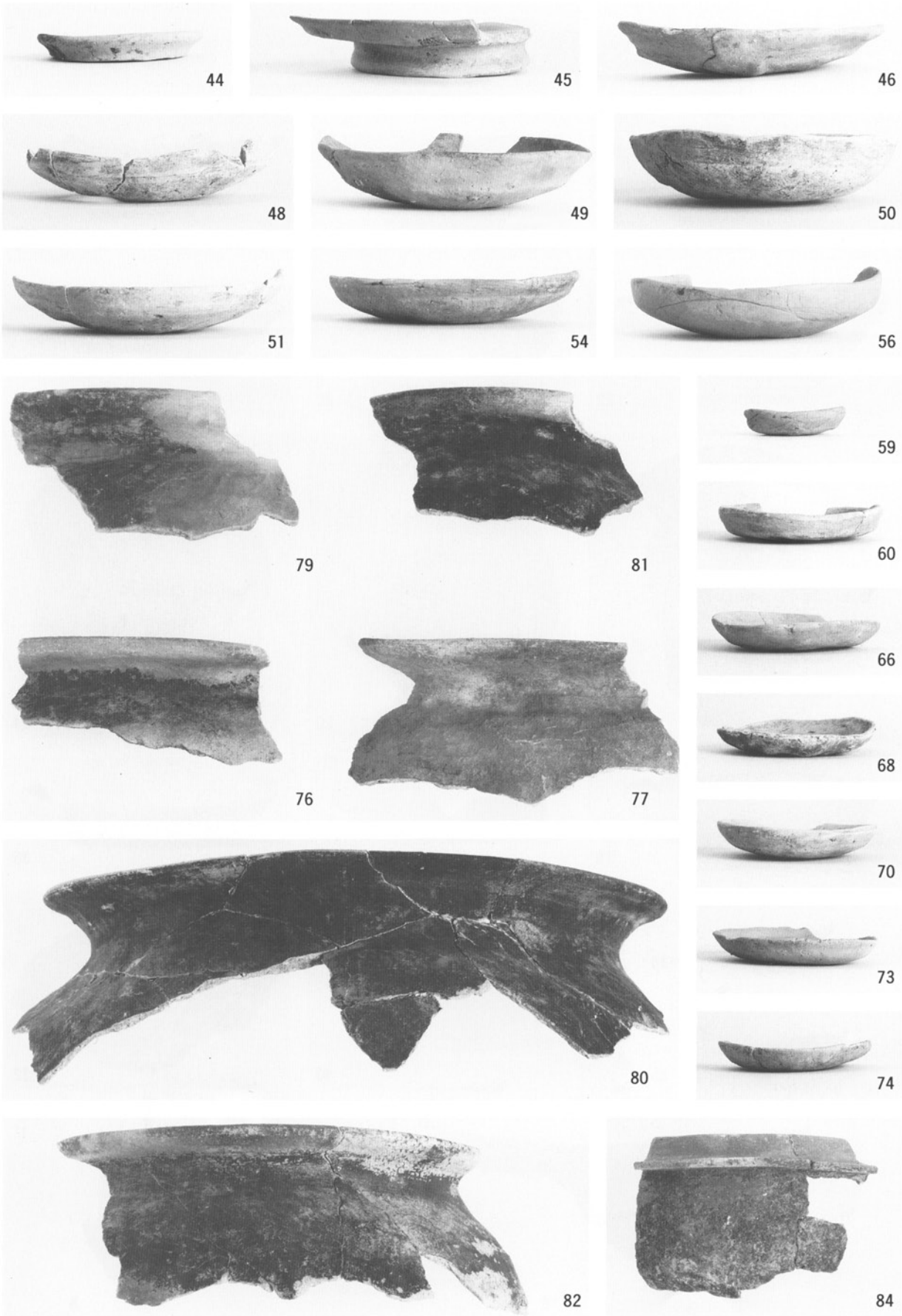
ＳＸ25（東から）

ＳＥ30（南から）

ＳＤ37（南から）



出土遺物（１：３）



出土遺物（１：３）

90

91

112

113

96

97

114

102

105

116

106

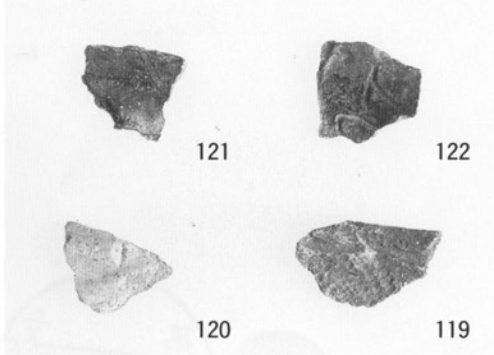
107

127

106

109

127


121
122
120
119

123

118

124

出土遺物（１：３）

平成5(1993)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年1月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 108-1

東浦遺跡・椋本南方遺跡ほか

1993（平成5）年3月31日

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　オリエンタル印刷株式会社